

川柳塔

平成元年 二月二十五日 創刊
平成元年 三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七四二号



日
川
協
加
盟

No. 742

同人特集・昭和と私

三月号

黒川紫香

尼崎市文化功労賞受賞
句文集「むらさき」発行 記念川柳大会

日時 三月五日（日）午前十一時開場 正午締切
場所 尼崎サンシビック三階大ホール
尼崎市御園町

・祝辞 小林由多香氏
・お話 橘高薫風氏
課 題（各題二句）

（第一部）事前投句、出欠を問わず、乞多数ご参加

「喜」黒川紫香謝選 「友」正本水客友情選

（第二部）当日出席投句 席題なし

「絆」春城 年代選 「山」八木 千代選

「文」小出 智子選 「岬」野村太茂津選

「絵」森田 栄一選 「風」森中恵美子選

「和」西尾 栞選

当日会費 二千円（軽食、作品集、句文集「むらさき」呈

・第一部の事前投句は締切りました。

投句先 千利尼崎市武庫荘五―二五―一七
春城武庫坊（電〇六―四三―一一五二）

主催 尼崎川柳同好会

（アトリズ、ひろば
いくしま、おほま）

後援 川柳塔社

黒川紫香句文集

『むらさき』発行

序文 西尾 栞

橘高 薫風

正本 水客

座談会 紫香を語る（路郎・霞乃・潮花・いさむ）

内容 作品 約五百句

旅の句帖（北海道から沖縄まで）

随筆 十二篇

あとがき

体裁 B6判美装・約二百頁

頒価 千五百円（着本後送金）

申し込み 川柳塔社又は黒川紫香まで

発行所 川柳塔社

早春

西尾 栞

水ぬるみ 山笑う季節となった。臥遊録に「春山淡冶にして山笑うが如く、夏山蒼翠にして滴るが如く、秋山明浄にして粧うが如く、冬山惨淡として眠るが如し」というのが語源といわれている。

君見給へほうれん草が

伸びている

路 郎

有名なこの句の情景は、之からの背戸の裏庭の隅で見ることが出来るであらう。この素晴らしい繊細な感性は師の独特のもので、今尚人口に膾炙されている。

春の僕ただ良寛を

ころごさず

路 郎

烈しい気性という噂であった先生が、こんなやさしい良寛さんの心境を目ざされていられるのはほえましい。

寝転べば畳一帖

ふさぐのみ

路 郎

起きて半帖、寝て一帖を悟った師の句境のこの一句は、先生の一歩お気に入りによつてあつた。川柳に清貧を貫かれた師の詩心が遺憾なく詠まれている。

常に門下生を指導されるのに、川柳は人生を、生活を深く掘り下げて詠うものである。箸がころげたり、茶碗がわれたおかしさは、川柳ではない、と訓された。私達を指導されるのに、批評もなければ、批判もなく、ただ没と入選でもって導かれた。

そして入選句でもって個々の独自性を育てられた。大きな花を咲かせる為に容赦なく、蕾を剪られた。奥村丹路のロマ

シの花が咲き、須崎豆粒にユーモアの実がなったのも、個性尊重からの指導よろしきを得たからであつた。

ああ日向五尺の影と

知るも憂し

路 郎

師の語録に、「句はその人の心である。十七音字はその人の姿である。リズムはその人の呼吸である」というのがある。

人類は悲しからずや

左派と右派

路 郎

という句もある。師はこれが私の世界観である。私は常に川柳に生きることによつて、平和な世界を生み出し度い念願に燃えていると師は叫んでおられた。

二階を降りてどこへ行く身ぞ 路郎
沢山な句の中で、自分はこの句が大好きだ。半分ほどけたマフラーを首に巻いて、着流しの長身瘦軀の先生を早春の四ツ辻に思い浮べる。

座右の句

牛の瞳に人間何をあわてとる

私の句

ひらめいた色で女の日を通す

(一 栗)

田中 紀美代

川柳塔 三月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

早春

黙って十年

川柳塔(同人吟)

自選集

■川柳太平記(130) 川柳の群像 片山雲雀

■連載 誹風柳多留廿六篇研究(四十丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

愛染帖

△女性コーナー△ 茴香の花

89年川柳塔社新年会

西尾 栞 (1)

小出 智子 (2)

西尾 栞選 (4)

東野 大八 (34)

黒川 紫香選 (38)

安藤 寿美子 (55)

佐藤 藤子 (59)

橘高 薫風選 (56)

小出 智子選 (60)

黙って十年

小出 智子

まだ私が川柳を始めて五、六年経った頃だったでしょうか。「黙って十年句を作れ」という言葉を何度か聞かされたものでした。その頃は決して心にも留めず、そんなものだろうかと思っておりました。そして、内心では結構不満もあり、十年の間には、伝統だの革新だのと考えて、目新しい句に憧れたものでした。でも、「黙って十年句を作れ」という言葉が、今になってもまだ心にこびりついているのは、その言葉の持つ深い意味が、この頃になつてようやく納得出来るようになったからかもしれません。

一口に何をしても、十年苦勞しなければとよく聞かされます。川柳もやはり同じです。十年も経ちますと、その間にいろんなことを経験し、一応は川柳界のこともわかって、句の傾向などが理解出来るようになり、しっかりした基礎も出来て、最も大切な、自分の進むべき方向も、自ずと決ってくるのもその頃だと思つのです。

今頃こんな古い言葉を引っ張り出して、若い方から嗤われるかもしれませんが、これも

■同人アンケート 「昭和と私」……………(62)

奥谷弘朗／林 荒介／堀江正朗／渥美弧秀／吉川寿美／米澤曉明
林はつ絵／有働芳仙／田中隆二／久家代仕男／寺井東雲

「頭」……………城角鶏生選……………(70)

一路集「触れる」……………大林曲ん手選……………(70)

「座る」……………平田実男選……………(71)

初歩教室「卒業」……………阿萬萬的……………(72)

高橋操子さんを悼む……………(74)

西尾 栞・植山武助・原さよ子・藤村メ女・児島与呂志

長野文庫氏のご逝去を悼む……………月原宵明……………(77)

本社二月句会……………(78)

各地柳壇（佳句地10選／春城年代）……………(82)

柳界展望……………(96)

■3月各地句会案内／97

■編集後記／99

座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑 (薫風)

私の句

うるのおくやま越えて来ました座りだこ 永田俊子

齢の所為かもしれません。

ああでもない、こうでもないと言っているうちに、人は年をとってゆく。若い間は無理をしてでも、一生懸命に生きることが出来るのですが、年をとってからの生き方はむづかしくなってきました。

つい最近のこと、和歌山の若宮武雄さんの一年間の句を見せて頂く機会を得ました。八十歳になられるそうですが、三年前に奥さまを亡くされて、今は一人暮らしと聞いています。年をとってから奥さまに先立たれた辛さは、どんなであつただろうかと、想像にあまりあるのですが、今はすっかり立ち直られました。葉桜の下の広さは老いのもの

齢をとるほど懐しい子守唄

すばらしい一日でした もう暮れる

人形の気持わかつてきた独り

男独り病めば不様のありつたけ

句のさびしきは覆うべくもありませんが、愚痴っぽさがなく、いい格好の句を作ろうとする気負いもなく、どの句も思い入れの深いしみじみとした味わいがあり、心の老いを感じさせない程の素晴らしい感性の句を発表しておられます。若宮武雄さんの句を見せて頂いて、川柳への情熱さえ持ち続けておれば、これだけの句が作り続けてゆけるのだと教えて頂いたのです。



西尾 栗選

岸和田市 福浦勝晴

きさらぎの空に凍てつく主義主張
手相見のすこし気になるわが手相
喜んでころこぶクジに当たりたい
改元にかかわりもなくパチンコ屋
逃げられた女にロビーで逢う芝居
強行採決 妻 ミンクのコート買う

下関市 石川 侃流洞

公立か私立か悩むのは親で
騒音をのがれて音のない不安
教養満点靴の向き変えただけ
一步前進二歩後退年はとりたくないもんだ
欠け皿と雖も重要文化財
駐車禁止ここは便利な一等地

松原市 谷垣史好

年月や友だちでなし恋でなし
男可愛やおんなの香に噓せて

時代遅れの頑固また良し栗おこし
お湯が出る暮しノラにはなれませぬ
咳をする職人がいる散髪屋
私個人の元号はまだ昭和

平田市 久家代仕男

煤払いお大師さまも春を待ち
帰省客なかに長湯が居て困る
涙雨一月七日降り止まず

還暦を迎え分家も墓地を買い
気ごろの襷は覗けぬ内視鏡
点灯で無理に産ませた卵の値

八尾市 高杉鬼遊

平成の世へ退院をしたいのち
仏にもつぶてにもなる石ひとつ
長生きはするものでない消費税
いつわりを愉しく踊る舞踏会
酒呑みが死んで酒やを悲しませ

内閣も変わらず富士に雪がふり

今治市

矢野佳雲

会いたいというメモが来る雪しきり

さよならが厭でまたねという別れ

どんな縁なのか絡んで風が落ち

すねている盃一つ差し向い

ご近所へ配る上げ底買うてくる

名人に仕事があつてまだ死ねぬ

西条市

片上明水

冬の道どう歩いても長いこと

折角の犬小屋犬が寝てくれず

週刊誌真面目な人が載っている

待っているようなコーヒーの飲み具合

仕合せは雑煮が旨い夫婦箸

刑務所の近くに住んで塀に慣れ

弘前市

波多野五楽庵

昭和から平成となる妻の咳

乗り換えて乗り換えてゆく雪なまり

山門をくぐると愚痴が軽くなる

生真面目でいつも割愛されている

玄関の前で足踏みする不義理

訛りにも雪にも馴れて来た赴任

岡山県

嘉数兆代賀

思い違いばかりが溜る土踏まず

文字盤の上を歩いて来た疲れ

いちまいの枯葉と語る刻独り

片チビの靴がいちばん足にあう

木洩れ陽にひたすら春の彩さがす

美しく惚けたく今日も辞書をくる

京都市

山本規不風

全快の余生にまぶしい梅日和

感動の話続いて眠くなる

エジプトへ荷物持ちます孫娘

成人式の娘がズラリ電車と酔うている

忘れたい恋城ヶ島の水仙に

無一物春待つ意気を枯葎

竹原市

小島蘭幸

蛇の舌可愛いと思うことにする

男言葉ふつと淋しい眼をするよ

平成元年その朝も髭剃っている

平和公園でのひらに鳩飛んでくる

だしぬけにオウムが恐いことを言う

風の中にときどき我を置く

倉敷市

野田素身郎

昭和終焉くしくも我は定年に

送別会の数人望に比例する

三ヶ日だけはにぎわう妻の里

例年どおり留守番となる三ヶ日

観光客あふれ屑籠もあふれ

あの娘どこの娘息子の嫁にどうだろう

兵庫県

遠山可住

悪友がずらり並んだ保証人

酒ぐせが出るころ妻が横に居る
一週間ほど畳の上で寝て死なん
黒を着る視線へ勝ったなと思う
木枯しへ出て行く恋が炎えている
雑草という草はなしみんな春

藤井寺市

吉岡美房

美辞麗句そこまで言えは嘘になる
適材適所君でなけりやという左遷
異口同音二度とないよう努力する
天地神明悪い奴ほどよく誓う
行雲流水とほける時に言う言葉
明鏡止水だからきれいなわけじゃない

大阪市

西出楓楽

削り節調子を合わせ過ぎないか
何よりの便利ポストに近く住む
自信ないからブランドで身を飾る
専業主婦能なしという訳でない
幸福の絵は淡彩で描いておく
消費税実施へアルミ貨を貯める

米子市

林荒介

時刻表遠い別れに辿りつく
線香の長さを想う去年今年
一族のくらしの中に雪が降る
吊り橋を渡るあなたを見えています
少しずつ嘘を宥していて仲間
ローソクと長い話をして更ける

青春も戦野も夢幻昭和消ゆ
波瀾万丈昭和を送る涙雨

尼崎市

春城 武庫坊

昭和終焉亡き戦友が遠くなる
ハナハトも遠く七色雲かすむ
平成に余生をかける火を燃やす
大正を大事に抱いて妻と往く

島根県

西村早苗

一刀彫の熊がほしくて蝦夷の旅
着替える巫女がなかなか出て来ない
唇をぬり替えずに逢える駅
物音へふっと動いた犬の耳
さみしがり屋の影がいつでも付いて来る
裏口で猫も開くのを待っていた

米子市

林瑞枝

恩を抱く帯しめ直すわが影よ
朧月赤いキツネがコンと鳴く
十指みな揃うて知恵の輪がとけぬ
フランス人の遊びごころかエスカルゴ
七人の湯気立ちのぼるわが夕餉
三男坊は土筆よ風を見て伸びる

八尾市

宮西弥生

一人は限りなくたのしシクラメン
独身貴族の末席にいますお母さん
川柳家の秘書にはこないリクルート
ラッシュタイムにしがみついているくらし

頰杖でみる亡母の写真は笑わない
最終のバスを見送る星月夜

和歌山市 西山 幸

せりなずなごきようはこべら天子の計

自肅自肅のリズムで粥が煮えている

平成元年きのうと同じ靴を履く

吊皮も心細くて揺れるのか

速達が走り疲れた顔で着く

春を待つところがポットの湯にもある

富田林市 藤田 泰子

覚えてるけれど軍歌は唄わない

寒いから殊更赤く寒椿

一瞬を輝き果てるシャボン玉

透明な童心が好きラムネ玉

仏とも蛇ともみえる三面鏡

胸底で蛇一匹を飼ひ馴らす

尼崎市 春城 年代

ふるさとはいずこにもある冬の音

気楽なのもひとり淋しいのも独り

七彩の葉に浸る身を宥め

冬来れば春の待たる命乞い

迎春の何やら花芽動き出す

冬というきびしさ遠く正チャン帽

(前月分) 八尾市 高杉 鬼遊

正義とは力なきものまつりごと

入院も死亡届もこの判だ
他人より軽い病いの雑居部屋

面会に高槻銘菓冬ごもり

六尺のベッドにさらす二十四時

また生きる気になり蛇が木にのぼる

桜井市 岩本 雀踊子

単身赴任現代風の島流し

出る杭になるので補聴器を外す

はげましてくれる話の裏の裏

平行線の話へ寒くなる背筋

余命表婆さん一緒に死にたがり

岡山県 土居 耕花

怒らすと天の岩戸に妻籠る

頻尿が駅の近道知っている

味噌桶の蓋をきちんとして唄う

燃えて居たこともあります紙おむつ

片道の切符で暮れの金が発つ

大阪市 江城 修史

歳ひとつ重ねた老いの坂けわし

腎不全命の灯りゆれ動く

洗いざらい話せる友の居る幸よ

ふり向けば背中ばかりの街は冬

バイク乗る妻へ寒波よ居座るな

伊丹市 檜谷 寿馬

三代を生きのびて来た指の骨

追憶のビデオで落ちる特攻機

新春をこま切れにして来る賀状

ステッキを抱いて有馬の湯舟かな

もう一人伏兵が居た蛇の穴

堺市 中川 滋 雀

使いようで切れる鋏に使われる

エンピツの芯が尖っている無策

半分は聞かせるように襖越し

インターホン断り上手になつてくる

ホルモンの香と鶴橋で待ち合わせ

大阪市 津 守 柳 伸

美しいはなしが好きな社会鍋

激動の昭和見事な回顧録

情けない話はしない籠の鳥

ターリンが欲しいと思う五十肩

あの人も一人住んでる長電話

倉敷市 稲 田 豊 作

祖父健在孫を諭すに論語抄

趣味多忙父は小言を言い忘れ

諍いを避けて中間色えらぶ

諦めただけを悟りと褒められて

逃げ足の早さお札はもう居ない

倉吉市 奥 谷 弘 朗

知らんでも知ったかぶりの出来る芸

何をくよくよ人間灰になるだけさ

いざと言う時に伝統ものを言う

野心家の能弁なのが気にかかり

古里に大臣が出た祝いの酒

島根県 堀 江 正 朗

大空へ閉じた瞳も春を染め

人なみにもらい咳こむ春の風邪

遠耳で捉えた春の走る音

片付ける音聞きながら寝てしまひ

夢の花音と音との結び目に

奈良市 宮 口 笛 生

コーヒーのむ時間の余裕持っている

悪かったと絶対いわぬ妻の業

気短かは正月来ても癒らない

酒うまし胃袋切つたのも忘れ

倅せな証拠に妻が太りだす

松原市 玉 置 重 人

煙草吸うぐらい気兼ねをしなさんな

白旗を掲げずに済んだみそかそば

味気ない時計すこしも狂わない

涙雨十日戎も喪に服す

気にかかるま冬の蓐赤すぎる

堺市 高 橋 千 万 子

元旦をまたスタートと捨てていず

反響のない神様の鈴が冴え

結論を知ってる話ミカンむく

使ひ捨て等はようせん針と糸
半年も待った予定が喪に消され

豊中市

安藤 寿美子

一族に政治家はなし屠蘇きげん

鐘落かすほどの蛇にはなれません

寒の雨しずかに昭和過ぎて行く

元号がまだなじまない寒見舞

香典の額を電話で相談し

大阪市

河井 庸 佑

肩の荷を下ろす辞令を受けてくる

春だより日本は長いなと思ふ

両方の顔立つ案を持って来る

相撲には勝って勝負に負けた評

和を保つためとひとこと肚に止め

高槻市

辻 白 溪子

この土地に老いて余生に悔いが無い

エリートを養子に望んだのが誤算

肩書が取れると親戚まで来ない

来賓にされて落ち着かないリボン

矢面にすぐ立ちたがるお人好し

美禰市

安平次 弘 道

店員のセンスに任す試着室

原点に政治倫理は朽ちていた

千羽目の鶴へ重たい期待感

レモンティー大人の恋はせつがちで

致死量を盛るから喜劇続かない

笠岡市

松 本 忠 三

お雑煮へ入歯が持っていかれそう

一円をみんなどうしているだろう

合席もこっちと同じカレーにし

口裏を合わせておいただけのこと

人のこと言う暇があり捗らず

和歌山市

牛 尾 緑 良

盃の良いのがあって酒にする

均等法妻のグラスは手強いぞ

酒の席鬼も仏も寄ってくる

うつむいて飲む酒がある男たち

あの頃の話が好きなの父の酒

岸和田市

植 山 武 助

マスコミを入院という名で逃げる

口だけが元気になって老いて行く

老妻がだまって美容院から帰り

シルバースhirt素直に受ける外はなし

無茶苦茶に無理を言いたい空きっ腹

京都市

松 川 杜 的

身を以て婦唱夫随をしています

お互いに七十点位それでよし

フルムーンで来なはれと酸ヶ湯から

内宮外宮千木の違いをガイドから

人生いろいろONがあるからOFFがある

京都市 都倉求芽

嫌われていても役割果たす蛇
フィクションだから気軽にのめり込み
煙のほかに公害も出た玉手箱
球根は何にも言わず春を待つ
双六の上りに檣山聳えてる

和歌山市 堀端三男

紫煙ゆらゆら頭の中を空にして
表情に喜怒哀楽のない美人
幸か不幸か矢面の味まだ知らず
長電話かけて自由のない話
筆太に家内安全と書く護摩木

名古屋市 越村枯梢

外れくじことさら寒い二月空
老体の部品を探す古物市
トンチンカン日毎度を増す老いの冬
死に神にど忘れされて長寿惚け
半分は嘘です自伝書いている

米子市 小西雄々

言い勝って雪の白さへ懺悔する
人生の重荷に耐えた甲羅干す
千羽目の鶴に希望の陽を貰う
愛されてから神様が胸に棲む
点滴のリズムに乗って満を持す

島根県 小砂白汀

尼師を憶う

師はきつと今あのあたり雲の峰
背伸びして届かずつくばっても着かず
悪人が居らねば善人只の人
鯉跳ねる音もサーピス旅の宿
四捨五入しても知恵の輪はずれない

島根県 柿原秀子

元旦の音音みんな新しい
お互いの無事を喜ぶ筆の跡
百円も真心募金の箱へ入れ
正月の空に見付けた飛行雲
さっぱりと慰め言葉出ぬわたし

西宮市 林はつ絵

平成と聞く甘栗をむきながら
感情は方程式で解かれない
落ち着けば宿命という言葉あり
古い皿ことさら毀すことはない
人ならば思い違いの傷を持つ

大阪市 西森花村

買い食いをせぬからワニの奇麗な歯
明日がある男にやはり金は無
大口をたたいたことはワニに無い
老人の話に胸が痛む暮
生命保険止めたら死ぬぞとおどかさ

今治市 越智一水

一条の光へ身も心も燃やし
世のさわぎカエルは向きを変えて聞き

働いた汗へ嬉しい風が吹き

秋紅葉初老の妻と手をつなぐ

貧しさがゆえに平気で嘘が言え

鳥取県

川崎秋女

よくぞまあ六度迎えた蛇の初春

初夢が良すぎて裏のうら案ず

暖冬の蠟梅がもうしゃべり出す

昨日から猫が一匹姿消す

花の種どっさり貯めて春を待つ

和歌山市

福本英子

平成元年派手に茶碗の割れる音

はつきりと決めた怖い右左

いたずらに放った矢から火傷負う

一の矢を躲してばかりいる男

恋一途親の意見は明日聞く

松江市

恒松叮紅

天皇の喪へ臘梅が咲き香る

天皇の喪へ値上りをする白い菊

たった二人居てチャネルがくい違い

夫の忌それから化粧又はじめ

心底を見抜かれている掘炬燵

松江市

柳楽鶴丸

天皇も友も奪った憎い癌

自肅ムード貧乏人に寝正月

カレンダーが十二単でおめでとう

露天風呂で妻とおがんだ初日の出

一気のみしました牛乳です

松江市

舟木与根一

はこ舟の視界良好初明り

格式を捨てては居ない大時計

孫できた話聞いている福寿草

わだつみの挽歌ながれて昭和逝く

昭和史の終章やはり雨になる

和歌山市

若宮武雄

万感がこもごも昭和最後の夜

平成に変えて秒針事もなげ

平成をせめて五年を生きる欲

平成の初日はなんとバカ陽気

自肅ムードなど何のその事故現場

和歌山市

内芝登志代

春浅く陛下を偲ぶ大相撲

初場所へ陛下を悼む涙雨

昭和の世へきつちり区切り初句会

仏手柑活けてほのぼの亡父偲ぶ

寒中に律義に咲く花いとしくて

豊中市

田中正坊

むらさきの雲たなびきて昭和逝く

昭和史の真ん中へんにある亀裂

にんげんはすぐ決めたがる敵味方
平成も疑惑は消えぬリクルート
総理まず我が冠を正すべし

唐津市 田口虹汀

矢面に立つと度胸がついて来る
サラリーを待つ母さんの薄化粧
底辺に住んで涙の味を知り
初夢は慣れた我が家の四畳半
踏み絵には怖じぬが踏めぬ墓の石

唐津市 久保正敏

初陽浴び丹の神殿は丹を極め
ファミコンを歳入にして子の年始
好きでない女にボトル減らされる
女いま蛇になりきる舞扇
建売りに住んで夫婦も規格品

唐津市 仁部四郎

生活の知恵だと嘘を日に一つ
生活の知恵激突の特売日
生活の知恵で会議に遅刻せぬ
生活の知恵だとクジは買わぬ主義
生活の知恵で親子のベアルック

唐津市 浜本義美

初日影浜に吊せしうたせ網
ダム満ちて逆さに眠る冬木立
出初式気焰の水へ虹の橋

音立てて噛む沢庵の旨そうな
地の平和天に成る日の朝ぼらけ

唐津市 浜本ちよ

どんぐりの背比べ同士牙をむき
保護色にわたしの好みありやしない
三ヶ日けんかの相手せず笑おう
焚火の輪固い話に輪が崩れ
糠床に冬越す用意して安堵

米子市 石垣花子

子ばなれのせりふは巧く言うつもり
職人の腕は銭の話せぬ
吹く風に女は度胸決めて行く
潮どきとばかり昭和と逝った叔母
地球からいつか人間こぼれそう

米子市 田中亜弥

一日一ついつかは実る種をまく
物語みんな化石となつてゆく
口堅いポストが好きで入れている
わたくしの好みにあわぬミス小町
盗人のいない島ですよく眠れ

米子市 菅井とも子

初詣嫁に貰った帯を締め
いい顔になろうと笑顔絶やさない
ストップの酒が胃に滲む三ヶ日
遠慮した賀状返事に追われてる

平成に変わる舞台の裏を見た

米子市

寺 沢 みどり

七草粥の温みに溶けた初春の風邪
年玉の期待へ孫の膝揃う

不用品捨てて押入れ間延びする

コート着て中身は問わぬ急ぎ足
遺されて一人で渡る丸木橋

米子市

青 戸 田 鶴

雲の峰永い旅路をおえられて
飄々と茜の空を歩きませ

試着室まだまだ年はかくせそう
忘れたい事は忘れてワイン酌む

生きてゆく一年毎が重くなり

米子市

政 岡 日枝子

針葉樹よ父を狙わないでおくれ
紙芝居どこにも父が出て来ない

父に持たせる仏の像は出来ている

みぞおちを彫ると涙がたまっている
気合いを入れて男の顔を取り戻す

米子市

沢 田 千 春

ろう梅が咲いて我が家に亡母が来る
カーテンの陽にあこがれる冬の鉢

太郎の家に花のカーテンつきました

夕風にとけて懺悔がしたくなる

カリンの実きざめば味方ふえたよう

松原市 佐藤 藤子

鍋料理この娘もやがて嫁にゆく
故郷へ帰る飛行機だから乗る

ニコニコと復讐されているらしい

青空が広がる父の墓ぬくし

人を愛して人を憎んでもどり橋

大阪市

北

勝 美

飽食へ自愛の箸を軽く置く
価値観へ思いめぐらす祝箸

脱皮してもやっぱり蛇は蛇である

這い上りヤゴはスリムになる蜻蛉

悲しみの雨か半旗に降りそそぎ

岡山市

川

端

柳

子

祝箸一族揃うあたたかさ

大見得をきったものというひとり

男一匹止まり木で飼う腹の虫

結ばれたあの日の汽笛なつかしい

八起目のダルマが勲章さげている

奈良市

天

正

千

梢

ローマ法王のブライバシーも目のあたり

旅人はいいとこだけを見て帰り

白居易の詩そのままに日は流れ

正直者だろうはだして歩いてる

解決策持っているから吠えている

島根県

堀

江

芳

子

春はいいアと爪切る独りごと
心眼の恐さ優しさ先を読む
故里の春のせてくる京訛り
ご機嫌でピント外れた相を打ち
戦首にあの日昭和も幕を閉ず

出雲市 園山 多賀子

愛憎の業が降り積む雪しきり
煙草の輪憶い巡らす事多し
生き伸びてまた自画像に皺を足す
千六本姑の手元は狂わない
生地のまま無器用なりに生きてます

大和高田市 岸本 豊平次

経済紙読んでるOLいるラッシュ
禁煙のホームで来ない待ち合わせ
暖冬を梅の蕾は信じない
し残しが有る様な気の大晦日
冷凍庫レンジがあつて四季がない

姫路市 人見 翠 記

傘寿にもう手のとどく平成の春
失敗を素直に認めたその笑顔
文学が哲学の道に導かれ
心平なれば心眼自ら開く
植替えて今年も咲いたシクラメン

大阪市 大塚 節子

新人頼他生の縁も切り捨てて

平成元年富士は雲間を見えかくれ
特急通過ホームの雪も持つて行き
白鳥も項をたれた二重橋
お茶よりも酒が所望と米寿なり

高石市 浅野 房子

夜来雨晴れて山茶花の華やかさ
矢面に立つと見えてきた裏表
やすらぎの家でなかった嫁ぎ先
世が世ならそんな愚痴もきいてあげ
唯一の味方小猫を手なずける

箕面市 坪田 紅葉

カーネーションもう一ヶ月も咲きつづけ
大根を煮る香いする億ションで
言い過ぎをあやまる気持さらに無し
気にしてた宅急便を隣から
ディナーショー真つ赤なバラの夢に酔う

寝屋川市 岸野 あやめ

長かった昭和のおわる朝の霜
福寿草初日の晴を信じてる
個性ある賀状殆ど妻のもの
予防線張った相手がまだ上手
畳み皺男に老いが貼りついて

八尾市 宮崎 シマ子

せめて写経今日一日を喪に服す
片っぱだけ乗ると動かないシーソー

拾われて子猫この冬暖かい
冬には冬の寒さが欲しい福寿草
金銀の襷紗で娘取りに来る

富田林市 田形美緒

注連を飾りて拝む蛇の穴
苦勞して神武綏靖覺えたが
三角に膨れたい日もシャボン玉
玉乗りのピエロ哀しい顔はせず
数珠玉の音は私の懺悔かも

宇部市 平田実男

失敗の手術刃となったメス
ドイツ語の解る患者の不仕合わせ
内孫へやはり傾くヤジロベー
仕合わせは孫と入った湯が溢れ
年寄りの知恵は救急車に勝り

守口市 羽原静歩

かおり幼稚園卒園式(二句)

揚げ雲雀九十三名卒園す
卒園の眼鏡の底に光るもの
神様も売上税に眼をまわし
南無大師石手は春の香を焚き(松山回顧)
骨董屋明治の顔で出して来る

羽曳野市 榎本吐来

帰郷子のもうかすがいになりはせず
外れかけた釦が落ちぬくされ縁

六十に花の出会いがあつてよし
冬枯れに潜むポプラのエネルギー
キャスターにちよっぴり暮しの垢を嗅ぐ

和歌山市 神平狂虎

夜行列車に揺られていったのは影か
散り際を念うところは風花す
太鼓打つや遠い景色を見るように
闇の奥負けた同士の羽根の音
窓硝子の水滴ほどの嫉妬かな

仙台市 川村映輝

老人は達者なだけで自慢でき
孫の帯締めに上京する夫婦
心はずむ時老婆女に見え
無為徒食ゲートボールしています
蟬螂の斧牛歩で抵抗す

鳥取県 土橋螢

わたくしの昭和が渦を巻いている
黒装束で平成に改まる
カーテンを閉めて二日も寝正月
剃刀を啜えて障子貼るおんな
離農届と婚姻届に印を押す

大阪市 黒田真砂

春を待つ想いにゆれるイヤリング
倅せな気分正月娘と出かけ
中流の笑顔で屠蘇の兎小屋

新年へ張り切り過ぎた割烹着
想い出を袋につめたまま嫁ぐ

西宮市

西口 いわゑ

やがて咲く約束のある庭のばら

寒はたん大事な人を見送りぬ

暖かい炬燵に思慮を奪われる

文鎮に胸の乱れを論される

ロボットは普通の顔でいくさする

寝屋川市

稲葉冬葉

閑僚の貌を肴に飲んでいる

河が流れて豊かな国の消費税

味いまいちの勘定書を覗きこむ

一蓮托生切り札は時効なり

フルムーン妻は味方の顔で見る

高知県

赤川菊野

ジーパンで花の六十路を闊歩する

人間をキャンセルしたい日の茜

テリトリーだんだん狭くなって冬

中国のつばへ日本の新春を分け

望郷の涙か古都は霧にぬれ(西安)

大阪市

本間満津子

悲しい報セラジオに向い正座する

瀬の速さ歳の功では渡れない

老化という曲者煽ててごまかして

済まんすまんとおんぶされだっこされ

寿の一字幸せ祈る筆

大阪市 神夏磯典子

体中深呼吸したお元日

ばあちゃんの精魂黒豆光ってる

ちぐはぐな計算孫のお年玉

雨模様春の花屋に足止める

耳朵の果報ダイヤのイヤリング

五所川原市

加藤彩人

県下一は雪だけ過疎へ今日も降る

吹雪く夜の話還らぬ父のこと

雪は愛街を柔和な貌にする

街つつむ雪に津軽の歌がある

豪雪へ日銭をかせぐ軍手はく

守口市

森川まさお

地を擦ってまだ上りたい破れ風

無住寺のあわれ掃除が行届き

鯖の道風が背中に突きささる

奥の間の甚平の社長が帰さない

洗いもの手伝い話がまだ残る

鳥取県

松下たつみ

酔うてまた忘れる傘を買うてくる

真つすくな道を横ぎる寒い風

吸殻の乱れ淋しい人と知る

追伸にアメ玉一つ入れてあり

身を退いた人が大きく見えてくる

和歌山市 桜井千秀

戸惑えばはしやぎ通してみてもよし
例えばの話は人を食うてくる

痘痕でもえくぼは若いうちのこと

警官の前は走らないように

切腹もいいなと思う花吹雪

熊本市 永田俊子

平成元年早く馴れぬと先がない
時代急変聞き耳立てる羅漢さま

初日拌んで一日善人それもよし

「脊々服膺」首相にも悲しい過去がある

快復期そろそろ母が叱り出す

大阪市 古川美津枝

かくされた笑顔に出あう追悼号

師の病い快方ときく百八つ

頭髮に父が気にする春の風

触れてみよ落ちなんたの一人言

元年へ誓うことない大あくび

尼崎市 奥山美智子

ご受章の報らせ塔社は日本晴れ
戦争と平和語って昭和閉ず

平成元年うちの息子が満はたち

降り止まぬ雨と話している独り

ちよつとした話あれこれつけたがり

羽曳野市 田中隆二

心にもないこと言うて年を越し
話すこと少なくなつた置炬燵

ライバルに見せてはならぬあばら骨

付合ひの下手な男へワンカップ

冬の章温い言葉を探して

鳥取県 林露杖

恩大赦許すなテロ犯政治犯

安楽死ふつと掠める寝正月

会長のよびな昭和とともに終え

経済大国わが家に棲んだ貧乏神

機嫌とる訳じゃないのに貧乏神

松原市 北野久子

七草に想い出すことまた一つ

初化粧おにし疲れは見せずおく

お元旦おどけて夫の肩を揉む

惚けんようたまに嫉妬させてみる

妻が居てきつちり薬飲んで

出雲市 吉岡きみえ

鯛やきがつっても好きで意地悪で

月とあそぶ女は利発で面白いで

アレルギー人の噂に病んでいる

ここからは有刺鉄線おんな道

大好きで唄っています四季の唄

宝塚市 丸山よし津

受賞した感激亡母とわかち合う

花満開子の退院の日も決まる

機械オンチに矢鱈に増える電子音

貧しかったのもそんなに遠くない昔

有り余る物に囲まれ思案する

西宮市 奥田みつ子

初日記今年の表紙濃むらさき

ひとり言増えて独りの年暮れる

ゴブラン織ホテルのロビー昼静か

ホテルまで何も喋らずきた二人

掌中の玉が時々する謀反

奈良県 長谷川春蘭

傘寿までのんびり行こう隠居部屋

手術はや一年経ちて事なきや

息災に夫婦老いゆく福寿草

父と子の表札並ぶ注連飾

巻きくせを直して掛ける新暦

竹原市 森井菁居

城一つ持ち木枯しに負けられぬ

切り詰めたプランへ招待状が来る

平均で良し団らんがある暮し

反抗期母のタクトが気に要らぬ

西暦で明ける我が家のカレンダー

高槻市 河瀬芳子

哀しいことに昨日のことが浮かばない

ぬるま湯の中で思想書読んでいる

まな板のくぼみがノラを呼び戻す

人間が好きで疵つくことばかり

冷やかしと知らずに毛皮着せにくる

寝屋川市 江口度

初日の出クレオパトラと宿に居る

保険屋がまつ先に来るボヤ見舞い

印籠があればと思う負けている

不運な噂オバタリアンのアンテナに

寝屋川市 柴田英壬子

新婚のお写真真光る増刊号

万両の朱へ平成を言い聞かす

福娘ことしは烏帽子つけもせて

花博を楽しむ一次前売券

東大阪市 森下愛論

据膳の旅に女は羽根のぼし

退屈な鏡の顔へ語りかけ

独り居の正月仏壇へまた愚痴り

躓いた石で戸閉り思い出し

七尾市 松高秀峰

姑さんも鬼一匹を飼っている

使い捨てカイロに近い粗大ゴミ

大根の甘さおでんの母の味

母さんが笑うと和む夕餉です

倉吉市 渡辺独歩

一年の任期で大臣なにを成す

土曜閉庁働きすぎの鱗とり
スタミナが煮えこぼれますチャンコ鍋
余暇時代セカンドハウスに農家買う

鳥取市 両川 洋々

礼智信俺には酒があれば良い
中流のサイフへ下血まだつづく
蛇の道はへびさ不倫の酒に酔う
へび年の熟女とならば契ろうか

鳥取県 森田 熊生

てきとうになやんで腹がすいてくる
一日がとっても長い二日酔い
雑草の芽に傷心を笑われる
銘柄はどうあれ祝い酒という

東大阪市 崎山 美子

急いでるのに名古屋帯だだとこね
急いでる時おしゃべりと鉢合せ
落葉たきふと焼芋を思いだす
手ばなした株が高値を更新し

寝屋川市 宮尾 あいき

明治大正昭和を生きて喜寿もすぎ
ふり返る我が人生に足跡がない
白鷺が私の頭上を舞うてゆく
ママ無口おしゃべりばばとうまが合い

玉野市 小谷 仙山

七十五歳肩へ平成のしかかり

収支計合わす雑費をかりて来る
妻と子と私と信号喰いちがい
丸まると仔犬ふとらせ病みあがり

和歌山県 寺田 裕美

子にゆずる肩の力も雑巾も
ふた組の話ごっちゃに聞く車窓
てんしるちしる黙って涙を拭いておく
水仙の威厳へ無口な風になる

神戸市 仲 どんたく

薄味の人生だった香を聴く
酔眼へ紫色の時が過ぎ
ステンドグラス映えて懺悔の時包む
罪少しまざる青春総括す

鳥取県 森田 布堂

大地震から変心のゴルバチョフ
議事堂で男まさりの紅一点
初もうで帰りの事故が多過ぎる
責任のない質問で突く急所

岸和田市 原 さよ子

添え書きの句心豊かにしてくる
初詣で氏神さまは後になり
負けて勝つ教え孫に論しとく
余生なお情熱燃やす趣味を持つ

神戸市 山口 美穂

山茶花は風もないのはらはらと

水仙の香りは小さな自己主張

叔母逝きぬかくれて老母の背が泣く
他人様にわからぬ事です家の中

岸和田市 古野 ひで

会葬の涙涙の列にいる

幸せに酔い痴れているこのこわさ
釣り好きの亡父の魚拓に光りあて
片隅に愛の言葉のある賀状

加賀市 細呂木 魯 木

祝いの場祖母も歌えるわらべ歌

行きずりのドラマ求めた独り旅

人柱の話へ若者不審がり

男意地度胸の見せ場へ見栄をはり

大阪市 藤 田 頂留子

昭和句会川柳塔でしめくくり

平成の句始めいざよい会へ行く

新しい御代さがけて梅匂う

えらいこっちゃ裏目になった思いやり

羽咋市 三 宅 ろ 亭

冬小雨衝いて弔意の傘の列

義理だてはほどほどにして世を渡る

小波を立てて妻との朝の膳

朝刊の大見出しで世は変わる

岸和田市 清 野 こう

激動の生涯み霊安らかに

病床の恩師に逢えぬもどかしさ

夫病み友の情が身にしみる

母の背の温もり素直な子に育ち

松山市 谷 信 夫

おこぜ鍋食べたつもりで年忘れ

やさしい灯ばかりではない街の夜

人の為プラスになれた些事うれし

生かされて生きて笑顔でお元日

町田市 竹 内 紫 鍔

昭和史にある大小のカッコ閉じ

サイレンが鳴った慶事の語りどき

平成の幕明け肅と満員車

物故者の一人学帽にて別れ

大阪市 吐 田 公 一

まだ明治頭ごなしに叱る父

しきたりに耐えた女の座りだこ

仏壇の亡夫へ告げ口してる姑

マンションに住んで隣はまだ知らず

倉吉市 渡 辺 菩 句

君もリングの丸かじり出来ないんだね

オットット轢き殺されるとこだった

不機嫌のお鉢こっちへ回って来

夕暮れの橋は悲しい色やねん

鳥取県 新 家 完 司

生活のまんなかへんに酒がある

ぶたまんが旨いこの世を捨てられず
夜があけて正月らしい海になる
すいとんの中に昭和が浮いている

唐津市 筒井朴竜

一坪の菜園グルメ夢を蒔く
勤労の汗も裏目に豊作田
尻餅を搗けど離さぬ大根引き
吹き晒す櫟の枝へ大根干す

大田市 藤田軒太楼

世直しへ頑老の愚痴組みこまれ
高齢の歩幅に明日の幸が見え
脱皮した蛇は過去をふり向かず
初耳ということにして聞いてやり

羽曳野市 佐野白水

自衛団の拍子木は木枯しに消され
自粛自粛飾りもうやーめた
長生きへ一病いつまで付いて来る
世帯荒れの手で天理のおさすりを

出雲市 板垣夢酔

青くとも主張の種をしかと抱く
ポケットの拳を出せばもめたはず
ロボットよ労災保険などいかが
ストレス解消そんなパートだつてある

やしろべえはらはらさせて悦に入り
大阪府 坂口公子

涙腺の弱さへ一言足りぬまま
物欲もないが私め女です
組の上でも弱音吐けぬだろう

和泉市 西岡洛酔

けたたまし電話は悲しい音でした
ストレスの虫も干そうか小春日よ
一坪の城主でいまだ満を持す
孫からの便り余命の妥協する

高槻市 川島諷云児

口ほどにないと思っていた誤算
ぬるま湯に馴れて視界が狭くなる
有耶無耶を納得しない腹の虫
背信の日から狂った鳩時計

静岡市 渥美弧秀

初春の雨かなしく沁みる独り酒
詩と音楽暮しに生きて豊かな日
今生の想い出たしか詩と楽
省略の言葉が生きている夫婦

松原市 小池しげお

聞き捨てにならぬトイレの独り言
ストレスが溜り玉葱芽をふかす
一線があり友情を白紙にす
綿菓子の値に驚いたポチ袋

許すとは言わずチャンス与えられ
岡山市 井上柳五郎

ポケ上手老いのずるさの処生術
木もれ陽ゆらく後になり先になり
マイペース七十路の坂年男

姫路市

大原葉香

残り福などある筈がない老後

頭右もう答えない兵の墓

煙草吸うテレビにつられ煙草吸う

街角でポケットティッシュ又もらい

藤井寺市

福元みのる

執念は持つべきものよ残り福

そこまでもきたか男のイヤリング

均等法妻が定年申し出る

徒歩五分駅へ走れと言うのだな

八尾市

驚見章

吉日開店十三日の金曜日

シャネル五番妻に用なき小抽斗

熱爛がよし煮凝りのまろやかさ

父祖の歟継いで悔いなき千枚田

八尾市

山下美津留

文無しになると息子は帰省する

食い詰めて刑務所志願あばれてる

精勤に行くのは呑み屋だけになる

義理猪口を受けていやみが言いだせず

鳥取県

中原みさ子

家主不在猫は大きな欠伸する

受け継いだ厨でいつも泣かされる
あなたもおとこ綺麗な花を剪りにゆく
不都合は記憶にないというお酒

鳥取県

羽津川公乃

ほどほどに本音で生きる吹き溜まり

心ない言葉を受けて皿洗う

激動の昭和史重い冬の声

裸木が叫び冬野が広くなる

黒石市

相馬一花

見合いの席仲人だけが惚れている

運転中油断のならぬ美女と猫

女房も娘も今は髭がある

ガラガラを持って訪ねろ養老院

大阪市

北山悟郎

十字架の義肢が軽いぞ初詣で

正月は御無沙汰の道ばかり行く

人生を×と○とで暮せたら

戦争風化僕の足跡消えて行く

広島県

藤解静風

負けとこかいずれお世話になる身ゆえ

内証やで死ぬまでゼニは離すなや

止めなはれわしらの時代はもう過ぎた

もう無理はできない父のあばら骨

弘前市

眞喜内實

雪積りようやく寝つくりんこの樹

専業主婦眼に見えぬ事ばかりして
ありがたいこと程雪と降り積れ
雪ダルマ今年は鬼の貌にせん

河内長野市 井上喜醉

ぐつと飲む一杯が燃え喉仏
ドライブも楽し高原の道しるべ
天皇の美談テレビの通夜が更け
平成がどうあれ無休の発車ベル

吹田市 園田文子

道祖神ちらつく雪の道しるべ
あとをつぐ親父の海にある気合
初恋の手旗信号愛を告げ
あアそう陛下の笑みが見られない

和歌山市 青枝鉄治

寒椿乙女心の彩で咲き
エリートのはきは知らない父の靴
天狗にも時には邪魔な高い鼻
頂点を守る男の胃腸薬

東京都 吉川一郎

一年の早さに合わせ父母老いる
大盛りのりんごとみかん語り部に
これ幸い自粛ムードでだす中止
慶弔に消費の愚痴が入っている

米子市 川上より子

雪解水走るな母の喪があげぬ

母の手型囲みおり喪の正月
畑打てばどこにも母の宿根草
わたくしの祈りとしての冬の鉄

羽曳野市 吉川寿美

折り鶴の数をかぞえて百日余
ボーダーライン何処に引こうかキミとボク
わたくしがわたしに負けている甘さ
赤鬼青鬼人間模様織りなして

守口市 結城君子

お互いの仕草を笑い合うて老い
貧という無上の贈物もある
待針を待たせ過ぎたか抜けている
毛糸あむ人も下車駅知っている

海南市 三宅保州

寝たきりも何はともあれ長寿国
要るわけもないのに捨てぬ花名刺
ありがたや酒も煙草も旨すぎる
御先祖のぬくもりがある自在鉤

高槻市 竹内花代子

亡き夫が師匠で覚えた般若経
病名が二つ増え古稀へのりかかり
天皇崩御七草粥の胸痛む
胃カメラを待つ間隣へ予備知識

岡山県 山本玉恵

横丁の旦那で今は生き字引

一番良い場所を知ってる猫に負け
野心もう消えてしまった紙おしめ
ときめきと不安隣のあいた席

堺市 柿花 紀美女
秘書の名でもらった甘い柿の種

雑字を溜めて老いの薬とし
わからない事ばかり増え日向ぼこ
老姉妹生家の仏間で父母の事

有田市 松井 かなめ

憂さ晴らす手段無茶苦茶喰べ
洗っているのか生きているのか長い風呂
若いと言われ眼鏡使えず矯めて読む
兎小屋でよいこの空気と青い空

鳥取県 江原 とみお

お天気やの父が自転車拭いている
姉さんの希望かけ値が多すぎる
駅長の帽子が威張らなくなった
昭和史をとじる茜を見えています

高知県 小澤 幸泉

さりげなく昭和の御代を語りつき
商魂はここにもあった街の旗
子をしかり反省しきりまたしかり
休日の酒と料理と雨の午後

富田林市 松本 今日子

ナナハンで走ると世間ちがうらし

親として程々の所がむつかしい
下校時笛吹く子供は習いたて
注連縄をはずしてせめて喪の心

大阪市 井上 白峰
飲み足らぬ顔へご飯を勧められ

妥協した泪を捨てに風の街
例えばの話を少し惚けて聴く
魔法瓶孤独を詰めて旅に出る

大阪市 大野 武太

新春の墓参に海の見える丘
手でないゼロがならんだ分譲地
ご崩御も商機にがさぬ出版社
さようなら古い昭和の上衣ぬぐ

弘前市 斉藤 昴

仔牛まだ親を離れず春三日
都市計画りんご畑に來た樵
この人と話が尽きぬ冬牡丹
天皇崩御一木一草悲しけり

和歌山市 山川 克子

長いものには巻かれろなんて処生術
クリニック首が回らん言うてくる
留守の娘の引き出し開けた咎を抱く
気の長い男で振られた事知らず

境港市 細木 歳栄

荒波へやはり水鳥身をゆだね

抱負などと大それたもの持たず
バラの赤想い染めたは春の頃
ああもはや不倫も出来ぬ片羽鳥

鳥取県 さえき や え

神仏を味方に春の雪を踏む
年金ぐらし歩幅を変えるのがこわい
雨ふりにイワシが獲れて困ります
はるかなる峰に昭和の名残り雪

倉吉市 淡路 ゆり子

寒の水いっぱい吞んで力瘤
席順を間違えてから肩が懲り
付添も風邪をもらった待合室
やさしさが嘘を言わせる見舞客

米子市 金山 夕子

童謡のチャイムが鳴ると澄む空気
ひとひらの雪に手紙の落ちる音
散ることを覚悟で春を待つ椿
はるかな橋に心やすらぐ弁当よ

竹原市 岩本 笑子

受話器持ち変えて税務署のことを聞き
人生いろいろと妻の長い長い風呂
所詮カエル前にしか飛べぬものを
ポインセチア少年の死へ燃えつきる

大阪市 渡部 さと美

旧家から障子が消えて姑が逝き

食べに来て遠慮するからややこしい
ていねいに煮出し取る人信じよう
特売のついでに梅林見てまわり

柳井市 弘津 柳慶

激動の昭和終日テレビへ感無量
屠蘇機嫌許せ墓詣りは後日
おじいちゃんに飲ましちや駄目よくどいから
正月の飾りは父にまかせきり

和歌山市 垂井 千寿子

中国の旅 (三句)

悠久の歴史をせわしいツアーする
シャッターの瞬間絵心持つ山河
万里の長城趣きの無い人込みで
お化粧も薄くナースに朝が来る

諫早市 原田メイシユン

年玉へあの手この手の孫の知恵
文明が空缶とビニールをもてあまし
常人が見れば手話の手品めき

岸和田市 芳地 狸村

二人三脚ひとり失くして曼珠沙華
三代を生きて自信が出る老後
プラットで吸殻掃除の金帽子

岸和田市 島崎 富志子

年女私も六十路の坂をゆく
遊びましょ孫から電話でさそわれる

在りし日のお姿うかぶ工場視察（昭和天皇崩御）

和歌山市 福井桂香

幸福哉平成元年初登山

古いこと言うなよ昨日はもう昭和

冬薔薇己が身分を知りながら

弘前市 小寺花峯

昨日のことは忘れよ雪が降る

指切りの話に月が丸くなる

正面で受け止められた変化球

茨木市 堀良江

一年の計一つだけ言えぬこと

七福神詣でに欲のない友と

松の内ショーウインドーに雛の段

大阪市 板東倫子

通夜の客それぞれ仮面つけて来る

出て行けばよいそんなに日本が嫌いなら

ロボットがニヒルに笑う科学展

出雲市 園山良子

七光知らぬ息子の千枚田

出雲弁なら通訳になりましたよ

禁煙がつらい男の三ヶ日

鳥取県 土橋はるお

生き伸びた歯がおめでたい音を出す

雪しんしん煮豆こととおめでとつ

父さんの帽子が隣から届く

土壇場の女が怖いことを言う

独身の貴族は新春を椰子の島

口笛が自然に吹ける春の土手

静岡市 永倉僕川

口喧嘩妻は不貞寝の癖がつき

好き嫌い明治の話したくなる

石一つ置いて庭師の目が燃える

静岡市 安本晃授

春炬燵五合で不足と言うコップ

時々は仏に背く矢を放つ

甘んじて手押車の弾む父

鳥取県 乾喜与志

洗い髪見せても乱れ髪は見せぬ

四代を生きて耳朶ややふくれ

かま首をあげて巳の年パトロール

豊中市 上田登志実

よき友を得た幸せを思う夜

人の名が急に浮かばぬもどかしさ

名も欲しいお金も欲しいお歴々

寝屋川市 堀江光子

もうと思ひまたとも思ひ繰る暦

失言にこりて減らした酒の量

風のたより健気に生きていると聞く

米子市 小村てい子

水神さんを飾ってからの酒に酔う
続編は遊び心を書き入れる
どれくらい眠ったことか鶴いち羽

豊中市

一瀬 福一

欠点を教えてやれば向き直り
誠実に貧に耐えてるかけ茶碗
さこちなく女が笑うサングラス

岡山県

岩道 博友

控え目な付合い隣が電話する
シャッターを半分降ろしてまだ儲け
金儲けする靴自分で朝磨く

奈良県

宮川 古都路

宗教に感動させるかイエスの画
雪の朝一顧不動に百の足
木簡が古代を替える墨の跡

姫路市

丁坪 サワ子

祖母囲み火鉢で焼いた餅の味
才女ぶる妻へ夫は脇見する
聞き下手の鴉はいつも独りばち

島根県

松本文子

伴奏を大根下しですり下す
修羅の舞 人は喜劇にしてしまふ
名曲も雑音となる繁華街

寝屋川市

平松 かすみ

福願う石切 野崎 妙見宮

天秤にかけた昔もありました
満月は夢みる女にしてくれる

吹田市

栗谷 春子

無口の兄トランプばかり切っていた
こんなかわいい沓を見るときは青丹よし
落人になるなら平家そう思う

静岡市

蘭田 獏 沓

団欒は炬燵の中で足喧嘩
蹴らないで 臨月の嫁ひとりごと
幾重にも山赤々と年が明け

米子市

光井 玲子

吹雪く夜は母子で長あい話など

兄との別れ

古里を恋うて他国で兄は逝く
夕映えの棺見送る冬木立

和歌山市

細川 稚代

又一つ知恵をもらった囲炉裏ばた
人一人葬る噂流れ出す
バーゲンの毛皮つまんで見る勇氣

大阪市

宮下 とし

年の暮ひたすら磨く換気扇
福寿草皇室の明日がしのばれる
餅すんで福神漬が恋しゅうて

富田林市

片岡 智恵子

ほどほどの風に揺れてる造花の意地

野ボタンに寂しいところ問うてみる
極楽とんぼが服を着たよな叔父が逝き

大阪市 富岡温子

母に礼始めて言えた式の朝
嫁が来て洋風料理のあるおせち
年玉を頂く側になつて老い

大阪市 町田達子

下町の情が少し路地の初春
充電のつもりの旅で風邪を引き
激動の昭和史テレビ ラジオから

出雲市 久谷まこと

役付きになつてネクタイ地味にする
言い訳は誰も聞こえぬふりをする
枯れた花客を迎える無人駅

枚方市 二宮山久

ライバルの予言など信じない
連休のつかれ出てきた日の遅刻
女の背中丸くなくても芸達者

川西市 松本ただし

贅沢な苦言を親はしてくれる
手の届かぬ所で息子背伸びする
ここだけの話洩らした九官鳥

広島県 田村新造

デパートへ春の七草採りにゆく
月見酒月の出ぬ間にできあがり

仕手株にちようちんつけて肩すかし

岡山県 花田たけ志

空想が曲つて消える年の角
うるおいに洩れてうそぶく一たむろ
余命まだ御用納めをせずに暮れ

姫路市 中塚遊峰

お上手に乗せられているお年より
師走坂病む身に急ぐ風ばかり
亡母笑うて同じ事する昨日今日

竹原市 石原淑子

温室のスイートピーに詩が無い
核家族同じテレビを観る安堵
冬の陽へ想いは尽きぬシクラメン

茨木市 井上森生

平成元年玉砂利の音新たなる
点々滴下この一病を友として
ヤマタイの自説肴に酒を酌む

和歌山市 後藤正子

忘れないためにはぐつすりと睡る
濡れた翼を焚火にかざす命なり
薄化粧した夕空に見とれている

和歌山県 天満三千代

指切りの指の痛みがなおらない
古ぼけた軸の出番だ迎春だ
平成元年昭和のままの野良着着る

島根県 石田 清泉

昭和史のドラマ三枚目の役下りる
この白髪冷たい過去を秘めており
戦争と平和わが足跡の消えぬまま

島根県 松本 はるみ

美しい嘘もありたる後日談
致死量にいつかはとどく米も食む
人一人死んでゆつくり本を読み

島根県 北川 民子

同情が無情に聞こえる言葉じり
辞書をひくこの眼鏡あのメガネ
古稀なんか僕は知らない口クロ台

竹原市 信本 博子

それなりに春を抱いている花芽
モーニングサービス食べてる一人席
逢いたくて往つたり来たり遠回り

倉敷市 田辺 灸六

暮おろす一月七日なみだ雨
老いの口癖みんな元氣か風邪ひくな
母の手の細さを握る愛握る

出雲市 石倉 芙佐子

雪女思いこがれた果てのこと
陽炎になる日は告げぬ花水
水引でたった一度の恋結ぶ

豊中市 辻川 慶子

風向きが変れば陽気な奴風
風上げも羽根つきもなし街暮れる
音のない風呂母さんと呼んでみる

出雲市 小玉 満江

あと五分温いふとんが引き止める
勤めから帰れば待ってた障子張り
よどみなく「戦友」歌う二度童子

出雲市 竹治 ちかし

ライバルが父と映つた子の瞳
母の陽を浴びた布団がくれる夢
もう九時とまだ九時という同じ屋根

岡山県 二宗 吟平

よいこらさ手すりを杖に愛宕さま
湯かげんに沈んで母の海おもう
集金が留守をねらつたように来る

大阪市 中西 兼治郎

浪曲の三味線陰でひく音色
釣船の即席料理海をくみ
自販機のまたも稼いだ音をたて

西宮市 瀬尾 六郎太

世のさまは適者生存すばりだな
雪もよし月よし花よし大八洲
くどくどと原点訓す創業者

大阪市 寺井 東雲

天めざす子供心の風糸

ドライバー ラジオが時に子守歌

和歌山市

山田 高夫

来るこない来る花びらが嘘をつく
風船の気ままを許す空がある

岡山市

池田 半仙

お雑煮が大好き齢を笑われる

算盤を度外視します母の愛

河内長野市

植村 喜代

手鏡へ写されし月十三夜(陛下)

厄年にしてはならない事をする

西宮市

藤村 宏子

母の壺のぞく気のするりんごジャム

コマーシャルのないテレビなり昭和逝く

鳥取県

谷口 次男

わたくしの上司社長の言いなりだ

何となく顔出しているPTA

島根県

藤原 鈴江

我が影をふめばいいよ月白し

棘さえも恐れぬ蝶の恋ごころ

大阪市

松尾 柳右子

忘年会風邪持ち帰り年を越え

平成に棚上げされたリクルート

高知市

北川 竹萌

我慢した交通事故の後遺症

スケジュール混んで嘘は言わずすみ

その先が聞き度い補聴器かけ直し
年頭の誓い去年もおととしも

岡山市

矢内 寿恵子

遊んでた頃の踊りが飯の種
生き延びる為に切り札取ってある

箕面市

椎江 清芳

無農薬みかんの器量ほめられず

吹田市

茂見 よ志子

ライバルを持たぬ主義です伸びられぬ

兵庫県

都里 遊光

平成の朝も哀しい涙雨

行く雲になれず許せず鳥育ち

富田林市

新開 千代子

独り居にぼちぼちなれて少し肥え

丸も角も自分の中にひそんでる

鳥取県

津村 八重子

四ツ目の紋私の城下町

水槽の魚は荒波夢にきく

鳥取県

田村 きみ子

腕時計俺に似たのか休むくせ

少しでも好きな女と傘の中

岡山市

直原 七面山

灯を消して月を愛で

ぬるま湯に馴れて呆け

自選集

藤井明朗

平成元年 初心にかえり詩探る

協調と忍耐 平成の道しるべ

明治 大正 昭和 平成生き抜く幸せ

感謝報恩職があり詩に生き

四〇年「むらくも」の夢花ひらく

月原宵明

天皇の崩御山茶花炎え過ぎる

昭和との別れ七草粥すすり

リクルート知らぬ無職の骨が鳴る

山茶花が花芯を見せて寒に入る

職の無い男焚火の始末する

工藤甲吉

げんまんを政治倫理はすぐ忘れ

百八つの鐘殷殷と暦果つ

元日は白一色に明けて暮れ

釈迦の手のほかに女の手にもり
さつきまで跳ねていたのが皿の上

野村太茂津

命なりけり平成元年春迎う

懷を刺す窮鳥もいた小さい痕

老耄のころも春は春の彩

人間ばんざい養生訓を囁かれ

闘志燃ゆ父の叱咤が耳底に

有働芳仙

牛歩戦術見ていた牛が笑い出し

長距離でもう一度愛の念を押し

一粒の豆残さず女よく喋り

「福は内 鬼は外」と鬼が蒔き

正座して沈む昭和の陽を惜しむ

本田恵二朗

その過去を引きずる音がまだ消えず

大正は霞み明治はおぼろなり

お互いの心を酒で洗い合い

あすのある男同士のうまが合い

孫用の気前のよさを別に持ち

遠出する気持になった春の風

使い捨てされた夫を大事にし

句文集発刊

みんなして祝うてくれる有難さ

句文集こどものように待っている

跡継ぎがなくても残る句文集

平成の文字嘴へ輪の如し

恩赦誤算まだ麦飯がつきまとう

安逸の老後へ楽な道はなし

敗残兵でした四十五年前

ボランティア私の好きな外来語

ひれ伏しはしないが天皇様崩御

咳一つ黙禱を終って出

憲法を皆さんとおっしゃった

世は平成 軍旗に誓ったのは昔

黒川紫香

過去は過去平成と大書して

妻入院す（網膜剝離）

妻の寝息を確かめてから眼をつむる（入院前後）

成功率8割の手術と聞いている寒さ

絶対安静四日を過ぎて眉ひらく

娘達帰って独りの夜の深みゆく

こわれそうな玉を抱くように正月の仮退院

米澤 暁明

本棚のどれも半分読んだ本

帰郷した祭りあの娘はもういない

不届と思う司会のしゃべりすぎ

自民党候補も負ける時は負け

裸体画へうっとり少し距離おいて

水粉 千翁

乱されぬ呼吸のわかる丸木橋

思い出を握る拳にして温い

秒針の世紀を創る足取りよ

しんがりというたのしさのわかる亀

任されておく胸三寸を持っている

藤村 女

すらすらと細筆嘘もうまく書き

正本 水客

上品な女の嘘が胃にたまる

心から許せる迄の長い修羅

打ち水ヘネオンまたたく宗右衛門町

粉雪舞うひとときざんげの数珠を操る

八木千代

寒くなるとほんきになって穴を掘る

雪に散りたくて山茶花咲きました

裸木の実をよくよくの執念か

劇中劇 神はいつでもひょっこりと

許されてばかり暦へお辞儀する

金井文秋

働かせ過ぎを働き過ぎと言う

男を選ぶ基準としての父がある

一言でいうならあんだ甲斐性なし

霊界の話確かめようがない

音が大きいな補聴器を買いなはれ

小林由多香

枕木をはがれ思い出だけ走る

酒ぐせを知っているから誘わない

残業の無駄とも思う灯がともり

祝宴の名残り家中酒くさい

土壇場でまた悪知恵に泣かされる

小出智子

鏡の中の私に今日も礼を言う

大根よお前何処から来たのかい

シルバーシートの前でしつかり立っている

夜はことんと眠る幸せだと思っ

杖を突くようになってても片思い

児島与呂志

ござっぱりしたいとしよりにて候

気おくれの歩幅覗いた歳の功

根来寺の春を知らせる桜桃花

躓いたところから上手に操り返し

三月の風に出合うた曲り角

阿萬萬的

飛鳥散策見知らぬ人とうまが合い

甘樫の丘野はおだやかに見えるけど

安らぎのはずの古墳がまた掘られ

何でもが商売になる古代食

冬の飛鳥路 石は喋らぬ霜柱

橘高薫風

高橋操子さんを悼む(二句)

仏の掌ほどに大きい手でありし

漢字にて慈姑と書けず昭和逝く

内裏雛平成の代を見ておわし

川柳太平記 (130)

川柳の群像

片山雲雀

東野 大八

雲雀・本名片山忠次郎、明治二十六年二月八日福井県勝山市生れ。京大卒。大正六年大阪商船入社。同十年大阪府で弁護士開業。大阪弁護士会では司法委員長・司法修習委員長一水会幹事長は二期勤めた。

中学二年生の頃、短歌に手をそめ、柴笛のペンネームで「十六のいといとわかきわれなればものみななべて美し恋し」の思春期の歌などを作り、往時の女流歌人矢沢孝子に師事。京大に進んだ頃に川柳に関心を持ち、大正八年五月「番傘」同人に推された。

中学は府立市岡中学校で、同級生に直木實の本尊で知られる直木三十五がいた。

「かれの本名は植村宗一という。しかし、中学時代にかれの本名を呼ぶのは、教室で先

生が指名する時ぐらいのもので、クラスの連中はみんなかれを「タコ」というあだ名で呼んでいた。丸刈のかれの頭がタコ入道そっくりに長かったからである。そのあだ名をかれ自身が甘んじて受けて、自分でもノートの表紙やその他の書いたものに「蛸」と自署していた。そんな無邪気なところがクラスの者に愛されていた。（中略）タコの文章は早くて悪達者な方であった。決して名文とは言えぬと当時の私はけいべつしていた。同じ文学好きでも、当時、わたしはよくはやった青少年文学投書雑誌に、小品文や短歌を投書していたし、たまには賞をもらったりしたこともあったが、タコはそんなことをしなかったし、また、実際にできなかったと思っている（昭

47・11瓦版）市岡中学の五年間にこんな初恋もあった。

「雲雀先生と朋友直木三十五氏との間に、『京町堀小町』といわれたお嬢さん（京町堀三丁目のお寺のイトはん）をめぐるラブロマンスが出て来た」（松谷政俊）

「京町堀小町をめぐるロマンスについて後日談をお伺いした。『私の方が優勢で、まちがいなかった苦なのに、ある日突然手の平を返すように直木にさらわれてしまった』と昨日の事のように笑っておられた。五十年前に亡くなった直木氏に冥府で再会しておられるかもしれない」（同氏悼文）

大正十五年頃には、番傘発行兼編集印刷人にもなっている。その頃の作（五葉句評）

○言いあてた歳から実は三つ上 雲雀

○食べてきた先はいわない泊り客 〃

昭和28年発足のよみうり川柳友の会（33年よみうり瓦版の会）を岸本水府から引き継いで二代目会長となり、昭和41年「川柳瓦版」を創刊。めまぐるしい世情を反映した鮮度の高い時事川柳の振興をめざした。

○全国で落ちてうれしのが落ちる 雲雀

○わいせつは実は裁判所も困り 〃

昭和49年12月日本川柳協会が発足した。推

されて初代理事長となり、本部を片山法律事務所のある大阪ビル六〇八号室に置いた。雲雀はかねがね大阪だけでも柳界の横の連携がまず大切だと、昭和45年に在阪有力六柳社を

糾合して大阪川柳クラブを結成した。これが日川協発足のいわば大きな側因となったようだ。日川協の創立総会開催の時点の参加申し込みは計百七十五社。当日の総会の席上で新任のこの初代理事長は「ひろく一般社会人の声にも深く耳を傾けて『人間の詩、社会の詩、風俗の詩』といわれる川柳が、本協会を通じて固く結ばれ、人生にうるおいを与え、清新で優雅の趣きを加える文芸として行くよう懸命の努力を誓うものである」と力強く挨拶した。

昭和53年第十五回大陸川柳同窓会が九州博多で開かれた。「片山雲雀先生も来るんやで」と世話人代表の大井正夫は大喜び。そこまではよかったが、なんと正夫は、青竜刀・雲雀・大八共選を貼り出してしまった。困った筆者へ青竜刀が「選は雲雀に一任だ」と言ってくれた。三人揃って選者席へ向う途中、こんどは雲雀理事長は筆者の耳許で「青竜刀さん、あんな人だから彼に任せよう」とタメを押された。三人揃って椅子に着くなり、雲雀理事

長は開口一番、「ゆうべ飲みすぎて選どころやない」と言って大あくびを一つ。飲んべの青竜刀は、急所をつかれて黙って句箋を繰り出した。

日川協創立総会のその後の懇親会で、筆者は「先生は小唄はお得意でしょう?」と大井正夫の下手な都々逸のあとをうけて言う。「やりさびぐらいしかできんよ。唄は端唄が好きで七十の齡からはじめたが、生れつきの音痴で恥ずかしい」とニコニコ顔。

日川協初代理事長の雲雀は、高齢にも拘らず五年間にわたって尽力し、弁護士片山忠次郎として立派な日川協会則も仕上げていた。

昭和53年番傘を揺るがした内紛にも、持前の大久保彦左式にズバズバと歯に衣をきせずの仲介役を果たし、番傘の重鎮としての貫禄を示した。それが番傘創立七十年記念大会の祝辞の中でも示され、言うべきことはキチンとケジメをつけるといった気魄に溢れていた。

「こんどの『番傘』のトラブルはまことに遺憾であった。密接な間柄にもかかわらず、書留で抗議文を送るという堅苦しいことは、なが年の私の川柳生活でも夢にも考えず、また経験もないことであった。それにもかかわらず、何がそうさせたか、それはひとつの柳誌

を持っているものが、他の柳誌から川柳の上の不当な非難を受けた場合、年来の友情という理由で黙止されるべきものではなく、やはり公人としての態度をとることはやむを得ないと考えたからである。」(昭47・7瓦版後記)

雲雀が水府に傾倒していたことは「結局は名句を残せ」(昭46・8瓦版)の一文に尽きている。水府もまた、雲雀への信頼は深かった。

「先生は全くの無口、お世辞が下手というより無愛想、そして滅多に人を褒めることのない社交嫌いで人の好き嫌いのはげしい個性的なお人でした。(略)先生は本当に心のやさしい照れ屋の寂しがりで、孤独な人でしたが、人が集まってきたわいている様子を見られるのが好きでした。」(磯崎比値子悼文)

雲雀は先妻静子夫人と50代で死別、実弟は早逝、長男は戦病死、肉身的には孤独であったことに法律家という物堅い立場に伴い、他人からは近より難い人と見られたようだ。それでいて根は民謡や小唄・落語などをこよなく愛した粹人であった。昭和57年2月6日心不全のため死去。享年八十九。

○法の目と別には是非々論が生き 反省

★今回は「泉 淳夫」

(市句)

誹風柳多留廿六篇研究 (四十丁)

676 ア、永イ日だと杓子が物を言イ

大屋 四宿の中の第一、品川の飯盛を詠んだ句。春日遅々、昏れなんとして昏れない春も過ぎんとする午後、品川宿の飯盛女が杉戸かなにかにもたれかかって、欠伸半分に「エエ全く永い日だねえ、まだ昏れまで小半時もあるよ」などと誰にいうともなく言っている図物を言うはずもない杓子が物を言ったところからちよつとトボケた柳味。

八木 異説。正月ののどかな世界である。「杓子が物を言イ」は「貝杓子を持った札者の供」が言つ、ということであろつ。

石田成 杓子を年礼の供として擬人化した用例見当りません。

多田 礎賛。「杓子」はやはり品川と思ひます。

677 むかしから湯殿ハ智恵の出ぬ所

大屋 句意はこのまま、便所は知恵の浮ぶ所なのだが。

分別ハかうか湯殿ハ無分別
分別は雪隠湯殿無ふん別

八木 この句は全く同じ形で先行吟あり。

『増補誹諧童の的』に出ている。
多田 賛。

678 琴糸を喰切り鼠飛上り

大屋 琴・三味線の糸は、細い絹糸をより合せて蛹で固める。

琴糸を鼠が喰切るといふような事が實際あるかどうか知らないが、とにかく琴糸を喰い切ったとたん、ビョーンと音をたてたので、鼠がびつくりして飛び上ったというだけの句。

石田 晋 娘が弾かなくなった琴を立てかけておいたのを――。

多田 賛。そのままの句。

679 留守中ハ長く御世話しらぬ也

大屋 六郎・八木 敬一・鈴木 黄
石田 晋一・南 得二・小野 真孝
本多 正範・石田 成佳・多田 光

故岡田 甫

大屋 亭主が長い旅から帰って来て、隣近所に長々留守中あれこれとお世話になりまして、と礼をいつて廻る。ところが亭主の留守中に女房が不義密通をはたらいていた。知らぬは亭主ばかりなり、という句。

旅の留守一ちの道具をぬすまれる

明八信 3

旅の留守たのんでいしゆ不和に成り

明六礼 4

八木 賛。

旅の留守別条たつた一ッあり

二六 27

多田 賛。

680 むてへ売れねへと桃売つみ直し

大屋 「むてへ」は無体で、本来はないがしろにする、無理なこと、はなはだしい、の意だが、少しも、全然の意もあり、本句の場合には後者である。

句意は、桃売りが「ちエツまるつきり売れねえや」とブツクさいいながら桃を積みなおしている写生句。

小野 賛。桃は痛みやすく、すぐ表皮の色が変ってそれと判るので、そつと積み直すのであろう。

多田 賛。

681 つつばまり次第にかふる御輿かき

大屋 「つつばまる」は空墳の字をあてて、はまりこむの意。「かふる」はいろいろな意味があるが、身にひきうつる、背負いこむの意であらう。

御祭礼で御輿が出た。町内の若い衆がおおぜい寄つてたかつて景気よく御輿をかつぐわけだが、全員が昇ぎ手になるわけでなく、周りに寄りたかつて景気をつける連中も何人かいる。

しばらく練りあるくうちに、昇ぎ手の一人がヒョイと肩を抜いて出る。その空いたところ、どこでもかまわずサツと肩がわりの者がつっぱまわつていつて昇ぎ出す。そういう御輿かきの写生句。

小野 神輿をかつぎたいのだが、大勢つかまつていてなかなか入る余地が無い。一寸した隙間が出来てさつとその中に這入り込み、すぐさまへはまり次第に「わつしよいわつしよいと勢いよくかつぎ出す。そんなお祭好きないなせな男を詠んだ状況とみたい。

多田 〓よくわかりません。ほんとうの御輿かきでなくて象徴かとも思います。

682 菅笠にあてかつて売ルすいかつら

大屋 本句は、「忍冬売り」を詠んだもので、夏の日中売りあるくので、葉が萎れたり、花がしぼまぬ配慮から、菅笠で覆つて売り歩く様子を詠んだものであろう。

多田 賛。

683 相模屋の髯来てハ死く

大屋 江戸時代の店舗は、その主人の出身地を屋号とするものが多い。相模屋ならさしずめ相模出身者があるじ。とすれば、その娘は多淫の代名詞となっている相模女。そこへ来た髯はたちまちに精を吸いとられて短命にきまつている。女房にイヤだと言えない髯の立場の弱さよ——。

女房のきけん取りくよわるなり

明元礼 3

南 賛。

ごほりくくと相模屋の髯ハやせ

八六 36

多田 賛。



黒川紫香選

今治市 野村京子

熊本市 宇野昭代

指切りで酔わしておいてそれつきり
雪しきり恋の痛手の深きこと
憎らしい男へ急ぐハイヒール
速達にします返事ほしいから
あせらずに待とう割符がきつと合う

八尾市 高杉千歩

子の城にとても優しい灯がともる
肩の荷を降ろしひさびさ離あそび
みかんむくひと月ぶりの春炬燵
鬼さんの歩巾に合わす深呼吸
添え書きにお礼ひとこと春の蝶

名古屋市 藤井高子

冬の絵にいぶきを呉れた寒椿
トリックとは気付かず蝶は翔びたがり
ポケットには明るい夢だけ詰めておこ
そつとひとりで聴くのは亡母の子守唄
横文字でカルテは怖い顔をする

仕入れ値をのぞいてみたい値下げ札
年頃へそろそろ家計の話など
定退の夫の机を配置変え
石垣の隙間に春を待つ生命
理想から外れたけれど日々好日

富田林市 池森子

不器用な人が結んでくれた夢
折りたたむほどに小さくなった夢
あなたにかけた吊橋が渡れない
あたたかいギャグを聞いている十二月
強情な風には吹かれてるやなぎ

富山市 舟渡杏花

言訳を考えながら脱ぐコート
冗談が下手で美人に遠くいる
愛に触れる妻の暗示へひっかかり
終章を他人の花が迷わせる
両方を立てる役目のおかめ面

広島市 流 奈美子

昭和史の夏を閉ざす雨しとど
相席で聞いた話にドラマあり
まわり道した横町で会う情け
顔色を読んで言葉を明日にする
一日を静かに洗う般若経

静岡市 沢 田 き ん

追伸へ胸ときめかす再会日
何もかも流して浸る湯の煙
ライバルの仄めく言葉気にかかり
大好きな人と出逢った日の笑顔
正直に書けない時もある日記

熊本県 大 川 幸 子

深入りはしたくないけど目撃者
成り行きにまかせています四畳半
どこからが余命でしょうか忙しい
試供品つまんで昼食間に合わせ
男女の垣根まだ取れてない職場

鳥取県 小 谷 美 っ 千

書初めの手漉き半紙の白さかな
おふくろの味を探して母になる
はいはいととても便利な妻がいる
虚と実の間で肩の力抜け
南天の実を啄んで春を待つ

西宮市 秋 元 て る

サルピヤの友誼賓館静まれり（中国の旅）

山茶花の咲く奥まったホテル選る

裾についた草の実払う仕草若し
車洗うあたり小春日犬と子等
歯車の噛み合う頃に歯がこぼれ

吹田市 井 上 照 子

寝てテレビ起きてテレビの床の姑
私にも出番はあった野のすみれ
紛糾の中で人間模様みる

奉加帳達筆続き書きしるる
模様変えしても沈んだまま暮れる

尼崎市 山 田 保 蔵

里帰り嫁が布団の準備する
半分の入りでは芸もやりにくい
相談を受けてもボクもカネがない

この塚がこわい話を伝えている
昼下りボロそな話誘われる

長岡京市 木 本 如 洲

消しゴムの答えはいつも平凡で
しあわせを今日も疑う十二月

森の道ひとつの恋を捨ててくる
交差点振りむくことが怖くなる

計の旅やいそぐ夫婦にもどり寒

岡山県 千 原 理 恵

安らぎは山の緑と空の蒼
冗談は言うが心底さびしがり

かつ幅のある人に逢う亡父思慕う

割り算のうまい男の離婚歴
止むを得ず妥協するのは卑怯者

大阪市 上田柳影

あくせくと働いてまだ物足らず
成る様にしか成らぬ生活と甘んじる
欲求不満を晴らしています掃除機で
消しゴムで消せる恋ならそれもよし
平成の朝の日の出は赤赤と

堺市 桜沢あかり

ベテランの慎重論について行く
留守番電話妻はパートに出ています
他所の花がきれいに見える倦怠期
新しい噂はすぐに馳けたがり
インスピレーションを虫のしらせと思う日も

静岡市 三井三津子

底抜けに明るい女酔っている
夢でよかったよ枕が濡れている
実力がついてようやく認められ
思い切り泣いて流してネジを巻き
春風へ久し振りだよいい電話

兵庫県 酒井靖子

動かねば錆つく頭怖くなり
生きている限り喜劇へ目を向ける
倅せな女は過去を喋らない
足跡の一つ一つに謎がある
倅せを封じこめたい赤を着る

久留米市 鶴久 百万両

平成元年俺もフンドシ締めなおす
石頭のあなたに思慕が通じない
婿どのと住む引越しは気が重い
胃カメラを吞めとは医者もヤブかいな
倦怠期でないが無言の日がつづく

和歌山市 田中みね

紫がこよなく似合う思慕のひと
B面に触れて想いが冷めてゆく
子育てに自信過剰が泡を食い
敵はあつぱれ素直に喝采送る席

枚方市 森本節子

晩年になって近づく母の味
黒豆のたき方教えて電話切る
年末をハッスルし過ぎて寝正月
いつになく大地は静か喪にふす日

熊本県 岩切康子

油断した蛇口小声が漏れている
自信消失交友すらも恐ろしき
生真面目は政治家向きで無い噂
あれこれと案練り主婦の座多く取り

尼崎市 森安 夢之助

ちっちゃいちっちゃい電気炬燵と寝ています
すき鍋をつつく箸先よく喋る
相談が終ったらしいお手が鳴る
表向き許したが胃に溜まっている

尼崎市の場 十四郎

落城の哀史を偲ぶ松の枝

坂道がとて苦になる万歩計
影ゆれて春の日差が定まらぬ
素晴らしい夢がひろがる羽布団

大阪市 吐田純子

孫の声テレビ電話が欲しくなり

おみくじの吉へ今年の抱負抱く

にらみ鯛猫もにらんで三ヶ日

酒好きの夫へなじむ妻の酒

鳥取県 山根八重

平成へひとひらの雪冷めたくて

天命か貧乏ばかりするおんな

カーテンをしめても噂聞こえます

弾力の手毬を母の手に返す

東予市 小山悠泉

吐け口のないストレスが胃に溜まる

雪山の怖さも知って山が好き

病院へこんなに軽い母背負う

妻の切り札里へ帰してもらいます

尾崎市 尾宮弘治

来年のパズルを妻と解きほぐす

内定の通知で変る父母の風

ジャンパーを脱いで箸割る牡丹鍋

新妻がハンドル握るハネムーン

守口市 森川春子

崩御されテレビに夜が更けわたり

裾さばき危く見せる太鼓橋

自粛してミナミの夜は夜らしく

肩車したお賽銭届かない

岐阜市 渡辺杏村

転勤をホームの蔭で見送る子

ゴマすりの成果転勤まぬがれる

ばあちゃんのプレゼントですランドセル

残雪でスキー下界は春霞

和歌山市 山口三千子

鬱憤を晴らす茶碗は見当らず

ブランドの服着て自尊心保ち

淋しくて花屋へ蝶になりにゆく

ここからはもう立ち入れぬ子の世界

徳島市 宮武まつ女

点滴の痛みへ埋めるわたしの炎

蛇年へとことん夢を賭けてみる

太り過ぎわたしを責めにくるお酒

振り向いてふり向いてゆく泣き上戸

和歌山市 田中輝子

妥協するという手もある処方箋

よい返事まだ届かない招待状

片道キップ一枚握り恋おんな

ラッシュ抜け母の菩提を弔いに

米子市 新正子

スランプに老眼鏡を変えてみる

不眠症いつも昼寝はしています
手の平の上で安心して踊る
三途まで渡る覚悟が出来て

母

西宮市 松本 一郎

ささやかな暮しをチラシ刺激する

つきあいと弱い心が妥協する

村は静かに寺の鐘から暮れてゆく

マイホーム棟上式の空の青

尼崎市 鈴木 良征

ほろ苦いコーヒーを飲む人妻と

漫画から株のイロハを知りました

揺籃から骨になるまで税に泣き

猿知恵にたけて根回し忘れない

鳥取県 西浦 小鹿

泣いたらあかんきれいなものが呆けてくる

母からの土砂降りの愛受け流す

残業の灯が長くなる町工場

髪切って風の話を知っている

鳥取県 太田 幸枝

お隣のカーテン開いて安堵する

逃げ道は知らぬ存ぜぬ姑の知恵

金運へ蛇の抜けがら探してる

うば桜などと言ってるのは誰だ

和歌山市 前田 美子

となりからかばちや届いて冬至知る

すずめの子窓から話しかけに来る

田舎にもいつの間にやらレストラン
アルバムに残るモンペもなつかしい

米子市 小塩 智加恵

なぐさめの見舞いの嘘がこわくなる

暇そうな神と話をしたくなる

手の中で頑固な夫丸くする

別々で同じドラマを見る夫婦

尼崎市 野瀬 昌子

伝言板二時間待ったと書いてある

雨音を夢に聞いている日曜日

若い気で赤いセーター買いました

バス停に嫌なあいつも待っていた

京都市 木村 たけし

東京の空から帰る十二月

買ひものは妻に従う十二月

罍のある道を知ってる十二月

発車ベル思慕へしっかり手を握る

和歌山市 堀畑 靖子

おふくろの味久々の祝い箸

思慕をはねつける真冬の水鏡

土手の道冬の星座と対話する

西暦ですぐに言えない誕生日

和歌山県 森 三枝子

春を待つ球根一つ植えている

せまくても春夏秋冬めぐる庭

珍客が来て争いの腰が折れ

肩書をとれば笑える席も出来

熊本県 高野宵草

焼却炉今年を燃して大晦日

本番は試し書きほど伸びぬ筆

子の部屋の合鍵母が持ちたがり

CMのない民放がよい崩御

大阪府 亀井円女

亡き母を重ねて拝む野の仏

リクルート腹立ったまま二年越し

裏を読む事も出来ないお人好し

北風を互いにかばう六十路坂

尼崎府 吉永伊三郎

明日に向け靴を揃えてくれた亡父

亭主より粹な男の瞳に出会う

私の前を平気で行く憎い人

鍵束の一つが知っている秘密

貝塚市 池田寿美子

平成に飛躍を祈る春の海

泣きじやくる事も忘れた永い旅

交通費貰うただけを社会鍋

美しいものばかり見る万華鏡

熊本市 北川一進

コーヒーもさめてしまった話好き

古い星も気にする片思い

老い一人公園だけにある安堵

珍しいパパが早起きする休み

大阪府 今西静子

肩書きのない人生で毒気なし

家業とは別養子のつとめ口

見なければよかった渦にまき込まれ

盃に笑いこぼれる喜寿の母

豊中市 滝北博史

亡き母の手紙出てきた大掃除

孫たちへひらかなで書く年賀状

福は内今夜は冷える鬼も内

妻だからたまに夫を叱ります

京都市 小林英子

爽やかに大人を自覚するはたち

大阪の語りべになる渡し舟

本心は笑いたくない片えくぼ

山茶花の紅がまぶしいかくれ宿

豊中市 三宅つえ子

陽だまりの俤せ拾う老いの知恵

這い上る子に母の振る鈴の音

自信過剰がまた正論を遠ざける

ラストには神を許した車椅子

今治市 渡邊伊津志

丸味増す母の背中にある歴史

幸福を信じ南の窓明ける

鶏頭が女盛りの色で咲き

どうしても色鉛筆は削り過ぎ

鳥取県 黒田くに子

せせらぎも海へつらなる夢は持つ
する事がないからテレビ見ています
字の下手な女も持っている硯
言い訳は止そう空が青いから

佐賀市 江口 万亀子

臘梅の香りがさそう散歩道
雪ダルマ私のように丸ぶくれ
総入れ歯磯のアワビに苦勞する
はずしてた障子が立たず四苦八苦

寝屋川市 宮崎 菜月

お隠れになれば陛下もノーネクタイ
球場の隣で霞む広島城
早春のベンチ程よく暖まり
金の要る男のロマンに口はさみ

静岡市 浅子 まつゑ

追伸の二字に書き足す胸の内
百段の中途で気付く身の無謀
さつま諸掘る度戦争聞かされる
うつぶんをたたく太鼓で憂さ晴らし

河内長野市 大西 文次

別れるの別れないのと仲がよい
先手必勝先ず玄関の花を賞め
何やかや言うても白い飯が食え
お見舞に来て欲しい人来てくれず

寝屋川市 河合 時弘

正論を吐いて出世に遠くいる
めろめろになつてしまったのは男
少女から女に変わる耳飾り
老いて子に従わずいる父の椅子

伊丹市 小熊 江美

伝えたい事があるから酒を注ぐ
山の宿湯に入るだけの退屈さ
ちよっとした優しい言葉に救われる
墓だけの里で帰郷も思案する

静岡市 小木 久子

聞く勇氣持たねばならぬ時もある
鍋囲む仕事仲間にある安堵
デパートへ目の保養だけして帰り

尼崎市 木下 義嗣

想い出をのこして今年も暮れて行く
街灯の下で別れの握手する
無人駅一人降りたら発車する

尼崎市 明壁 敏之

お父さんの荷物洗濯物ばかり
お役所へ言えば善処で片づける
コマーシャル見て風邪薬買いに行く

酒田市 永沢 裕子

平成もとつぷり見たい竹を踏み
正座して師の手紙読む几帳面
自己主張過ぎて孤独の歩が速い

和歌山市

森

茜

枝折戸のかほそき誰もうけいれぬ

シクラメン甦らせたのは太陽

そくそくと昭和終る日亡父よ亡母よ

岡山市

河

野

青

銅

真夜中の時計が止まるおもちゃ箱

十円で開運祈願して帰り

豆の蔓育てて少年夢を抱き

兵庫県

森

脇

和

子

はみ出して嬉しい集いの置こたつ

論文をまとめて海が風いで来る

甘党が来て話し込む姑の部屋

八尾市

片

上

英

一

遠くからサーカスの唄聴こえてる

鶏頭は牛のシッポが気にかかる

釣られてもまだ納得がゆかぬハゼ

倉吉市

橋

本

さ

つき

受験受験で青い鳥探す暇がない

亡き父の靴音聞こえて来る日暮れ

若いコーラス覗けばみんな熟年で

熊本県

増

田

一

乗

悪政は護岸工事の砂利を食い

わがいのち余命表では後五年

外に出て無帽に気がつく薄い髪

出雲市

金

森

知

恵子

凍てつく夜眠っただろかかいつぶり

雪の夜春のシヨール編んでます

額縁を抜きたい人形春の夢

大阪市

山

田

妙

子

平成の元旦の朝時計買う

子防線張り巡らせて通信簿

メルヘンの絵を贈ろうか冬の夜は

尼崎市

中

澤

向

西

紙屑のチラシが溜まる十二月

松の内弔旗に街は静かなり

激動の昭和の日記書いておく

寝屋川市

井

上

す

みれ

ゴッホ ピカソいまだ解せず年重ね

リクルート私の家には電話来ず

恙なくゆっくり閉じるコンバクト

鳥取県

西

川

和

子

風化するジゲの生活をメモにする

場違いなジョーク意外に受けている

なるようになると大きな母の尻

島根県

菅

田

か

つ子

騙されて咲いて寒風に曝される

柿ひとつ霜やけの顔でぶら下り

ハンカチの白がことさら目にしみる

岡山市

中

嶋

千

恵子

筋道を立てたばかりに寒い風

平成の春ビカビカの一年生
遊ばれているのだろうかこの人に

高槻市 芦田 静江

寒空を恋うたマネキが落着かず
ワンテンポ言葉を置いて救われる
文化展に興味の多彩が責めてくる

藤井寺市 中島 志洋

墓詣り可愛くなった孫を連れ
年金でちよつと気張った団地びな
白酒に女三人笑いこけ

大阪市 松永 すすむ

「出た」「来た」と自動扉の独り言
寒かったやろうと熱燗ついでやる
角切りに牝鹿までが走ってる

岡山市 土居 ひでの

合掌の片目でにらむ銭の山
ぐい呑みとあの日のロマンに酔う炬燵
平成へ生れる孫の名を選ぶ

奈良県 横井 都姫子

夕焼けをこま切れにしてビルが建つ
お隣もするからしてる溝掃除
昭和史を親子で学ぶ二日間

鳥取市 武田 帆雀

門燈を点して妻が待っていた
野良猫と睨み合っている無職

本論に戻すと弱い傷がある

宇部市 中村 三良

堪忍袋の中で揺れてる自尊心
ひとり旅財布に明日の予定聞く
吹き溜り私語が重なり合うて冬

相生市 中塚 礎石

片意地へ足はそれほどついてこず
風の子になりきってボス一人だけ
アスファルトどんぐりコロコロどこへ行く

茨木市 藤井 正雄

晩酌がきれてはかない妻の留守
若い氣でいるが足腰冷える朝
旅の空星がこんなに多かった

広島県 森川 抜智

鶯が庭でひとこえ春を告げ
幸福の木バックは赤で炎えている
屠蘇祝う前に手を出すお年玉

川西市 田中 喜俊

三ヶ日テレビでスポーツ堪能し
七草が揃わぬ粥で行事すみ
紅白も好みの歌を聞いただけ

静岡市 滝田 たけ志

仲人の口は何れも良い話
追伸に愛の一言添えておく
現実の話としては旨すぎる

大阪市 榎本 落児

大声を出すな補聴器つけてある

広島へ来たのだ牡蠣でも喰っていいこ

砂丘には砂丘に似合う花が咲く

神戸市 石 神 草 風

呼吸をのむ脚線日本人やろか

盃友もなくて月夜をひとり酒

フト見ると犬そっくりの人が連れ

鳥取県 乾 隆 風

落し穴見据えて鍬を洗ってる

暖冬の花が油断をしてしまふ

平成へ昭和の服のボロボロで

枚方市 中 山 おさむ

ゆるい坂頭の中のメモを繰る

交友の広さ集めて遺作展

ジャンパーを無造作に着て春を待つ

静岡市 柳 沢 た ま

いいにくい事は封書へ書いて置く

居所寝起して電話ベルが切れ

昼下り優雅な顔で見るドラマ

藤井寺市 高 田 美代子

ふぐ鍋へ一瞬よぎる明日のこと

ふり向いて余計淋しい句読点

野暮用へミンクのコート着て出かけ

鳥取県 鈴 木 芙 美

カーテンをしめて一人の部屋となる

満天の星座に亡父の影うかぶ

黒幕をたらしめてからの謀りごと

岡山県 松 本 元 江

天皇崩御さめざめと泣く冬の天

そして平成昭和を偲ぶ昭和っ子

住む世界のちがいに思う不幸

岡山県 森 下 正 子

張板に亡母の移り香偲はれる

長風呂を覗けば父子話し合い

六十路過ぎまだまだ女変身す

旭川市 朝 倉 大 柏

愛してるなど安っぽいセリフだな

そのうちにどれか効くだろう薬漬

信号を渡ると酔った歩にもどり

岡山県 大 石 あすなろ

天の声地の声わたしに亡母の声

足を叩いて貧乏ゆすりの癖叱る

矢印にちよっと反骨してみたい

香川県 上 藤 多 織

残照を背なにスタートするあせり

年金の歩幅が狂う消費税

春めいて乱れを正す万歩計

神戸市 岩 田 信 義

ライバルの左遷乾杯高くあげ

白のまま残した今日の日記帳
反骨の血だけ残して父は逝き

愛媛県 八塚 三五島

値の高い品はだんだん奥になる

定退の思い出ばかり専門書

猿知恵と言われても良し生きのびる

新潟県 高野 不二

天井でまだ買う人もいる株価
顔が見えないよさもある電話

犬の餌のCM犬も嬉しそう

島根県 加本 義良

鼻歌の妻のリズムに乗せられる

生きているよろこび初春へ深呼吸

年金をはたいて孫のお年玉

奈良市 米田 恭昌

賑やかな男の背中に見た孤独

年の暮れ子には子なりのせわしなさ

歯車がきしんでいますでも夫婦

羽曳野市 麻野 幽玄

旅土産配って身軽にして帰り

散葉錠剤食前食後と吞み分けて

計の報へ夜行をかけての旅仕度

米子市 服部 朗子

断水に不足をもらった井戸の恩

うまい水金魚はちゃんと知っている

夕暮れのイメージ変えて見る鏡

米子市 門脇 晶子

晴れた日は味方もそばに居てくれる

銀キツネ背のびしたがる長話

糸巻きがころがる早さ年の暮

静岡市 西村 千代

父さんが酔った頃合い見てねだり

年賀状生きている証し古き友

着て脱いで母をまよわす特価品

青森県 荒田 つる

バカがつく程正直で損ばかり

いくばくの余生でせめて杜寺めぐり

二年目も病舎で春を待つあせり

岡山県 牧野 秀香

夢のない過去の夢みる老い枕

政界の黒いコスモスまだ散らず

お雑煮の味忘れてか海外へ

京都市 渡辺 圭坊

冬眠もせずに雑草よく伸びる

チャルメラの響き夜食の欲しい刻

血圧の低い男に霜の朝

青森県 木村 喜衛

田舎でも都会に地方発送承り

戦争を知らずに必勝の鉢巻きを

ボーナスがなくても愚妻の酌があり

紅一点まじって弾む新年会

十和田市 阿部 進

親馬鹿が伸びる子の芽を摘んでいる

ドラの音が友との別れ急きたてる

鳴門市 八木 芳水

政治家も顧問をふやす高齢化

気配りが欲しい夜更けの電話ベル

ゲートボール父のひと日が幸せに

伊丹市 猪原 石莊

ブライダル騒動妻の着る和服

ちっぽけな滝にも名あり案内記

少年のように落ち葉が駆け回り

大阪市 山北 三三三

どことなく子がする仕草父に似る

荒れる日も風の日もある夫婦岩

因習に背いてからの村八分

岡山市 杉本 伊久栄

百円で無病息災手を合せ

お年玉少しアップのポチ袋

ストレスを詰めた袋を持てあまし

吹田市 山本 希久子

心眼を開いてみても読めぬ文字

自己主張強く淋しい帰り道

射程距離近づき過ぎて見失い

兵庫県 円増 貞子

吐く息の白さに気づく朝の庭
曾孫らの笑顔我が家を春にする

娘や孫に見送られて旅の朝

岡山市 江口 有一朗

薔薇真つ赤刺など気にはしていない

豪宅の門札横目で見て通る

春風が遠い昔の影を呼ぶ

流山市 神田 治

末席に座れば見える絵空事

悪口の人さし指はよく腐る

また神に嘘をついてる人間味

兵庫県 奥野 テル

ひとときの余生楽しむ薬風呂

したたかに家運を背負う寡婦の四季

つまりいてふと名案を思いつき

島根県 松本 聖子

孫たちがカゼを土産に置いて去に

年号が変って何も彼も記念

それぞれの味で家々年が明け

岡山市 後安 江山

部屋一ぱい広げて帰省のはしやく顔

ふる里の無口な父の温い顔

水仙の香りただよ初春の部屋

岡山市 後安 ふさえ

胎動に胸ふくらませ縫う産着

なめくじが通れば銀の道がつき
幸せは八十路で夫婦まだ達者

岡山県 福原辰江

美人ではないが傾くあの笑顔
迷いからさめて夜空の光る星
スケートの曲線きれいな曲にのる

静岡市 増田扶美

初詣で足袋の白さも確かめる
旧道に沿って宿場の名残見せ
停年の声はり上げて福は内

静岡市 久保きぬ

弱点を金で補う卑怯者
修理した靴と旅する安堵感
確実に誘導弾の的になり

鳥取県 久野野草

世渡りが下手な女だが人が寄る
親心計れぬ娘に臺が立ち
野晒しの仏に水子の声を聞く

出雲市 高橋きよし

包丁の音で始まる今日の幸
ライバルがいつも気になる胸の奥
奥の手を出すに至らず妥協する

熊本県 立道善太郎

苦勞した亡母の笑顔に掌を合せ
九歳で小坊主になった勝延寺

お父さんお酒をやめてありがと

泉南市 坂根流水

賢人がもつともらしい愚言吐く
煩惱をつつみ比叡にこもり座す
釘付けの法然堂に雪さんげ

寝屋川市 豊福路子

神様は礼金要らぬと言うてはる
自尊心つよい女の影法師

堺市 井上たかし

ジャンケンポン誰かが鬼になる定め
お互いに損したふりでする妥協

岡山県 富坂志重

泣き事は書くまいポストに笑われる
孫が来て張り切りすぎてダウンした

大阪府 川原章久

昭和史は七草粥と共に閉じ
好き嫌い言えた昔の青春譜

兵庫県 倉垣恵美

マスクして少し病人らしくする
天皇崩御ちつとも知らず搾乳す

羽曳野市 福田満洲子

パトカーを呼びたいような走りよう
今年まだ自粛しとこかフルムーン

鳥取県 横山房子

おもちゃ箱あけたらへびがとびだした

字引きにはない知恵老母に教えられ

出雲市

岸 桂子

スイッチで米炊き上がる孤独感

喪の足袋を干すに想いがまたつのる

倉吉市

青 砥 菊 枝

試着して迷い一晩考える

恋人が出来ればきつとやせられる

吹田市

大 沢 宙 宙

目立つかな着たり脱いだり鏡見て

面影を追えば消えゆく夢の中

川西市

野 村 静 雄

古い二人よくまあ洗濯物がある

うらはらに駄々をこねてる仲のよさ

大阪狭山市

桜 井 莊 次

本当に買う気目付きが違います

遺書残すまでに打つ手はあった筈

広島市

名 和 喜 一 郎

学歴がコースを決める入社式

行くよりも羽根をのばして留守居番

鳥取県

木 下 芙 葉

御逝去にありし日遠く回顧する

昔なら家が一軒建つおもちゃ

堺市

近 藤 豊 子

平成元年今朝の新聞カプセルに

「福笑い」外は粉雪かも知れず

抽斗の隅から出さぬ涙壺

一山に盛られ売られていく訣れ

大阪府

尾 崎 黄 紅

すれ違う犬も見ているフアッション

まとまらぬ言訳胸に受話器とる

豊中市

村 上 とく子

親切な誘いも重くなる思案

平成の春にきらめく四方の海

吹田市

山 田 里 子

三ヶ日なす事も無く痴呆症

いつの間に寝たかテレビが欠伸する

唐津市

野 田 旭 恒

巢身赴任だんらんの灯を恋しがり

昨日遊び今日はせわしい締切日

岡山県

伏 見 すみれ

初詣で髪のかたちも見せてくる

ゆとり出来エブロンがけが嫌になる

唐津市

中 村 順 子

お名残は尽きぬ昭和の薄明り

大正琴弾いて昭和よさようなら

鳥取県

伊 吹 富 恵

一度だけ迷って見る悪い趣味

蛇を書き無沙汰を詫びて年賀状

静岡市

三 浦 つ ね

寒菊の薄紫に亡父を見る

初風呂の子の音痴にもつつがなし

大阪市

堀口 欣一

佇めば冬の寒さが只残る

青森県

波 ただお

天皇の長靴姿忘れまい

若ければ僕もなりたいたいバーテンダー

唐津市

入 江 喜久夫

一円玉サイフの隅に小さくいる
寅さんの映画に一年分笑い

藤井寺市

菊 地 繁 男

御年始の帰途は吾が家へ千鳥足

達筆な友の賀状の懐かしく

和歌山県

田 中 隆 積

在米の兄の帰国を待ちわびる

平成をとてもきれいに書いた書家

吹田市

西 岡 豊

流れ矢が心の隙につきささる
偉そうに見えるが本当は悪い人

和歌山県

岩 崎 瑞 穂

歳末の幟の列に妻の供

ひとつ積みふたつ積みして芸の道

大阪市

島 路 太 郎

たまに会う昔話に花が咲き
追伸で会っては言えぬ胸の内

静岡市

大 石 た き

ふれあいを大切にして路地ぐらし

大正を遠しと思いごまめかむ

堺市

神 原 文

くすぶったままの火種をもてあまし
中流と聞いて家計薄くしやみする

鳥取市

萩 原 美 雪

見栄張りの財布はいつも震えてる

咳一つ向うでわたしを呼んでいる

大阪市

豊 田 巡 歩

年の暮市場籠から鯛のぞく
雪こんこ猫が炬燵で眠ってる

河内長野市

岡 崎 実

言うは易し政治倫理のむつかしさ

平成元年決して甘い年でなし

唐津市

浜 本 治 幸

順番で炊事洗濯若夫婦
衣食住足り予言の出番なし

唐津市

福 島 紀 一

通院も薬を貯めて持て余す

リクルート濡れ手に粟の怖さかな
手料理といえどひそかな自慢なり

唐津市

対話する事を憶えた幼稚園
北むいて炎は細くなってくる

とりあえずワイングラスは二つ買っ
どう見ても親子ではない法善寺

年玉も孫の値上げに追いつけず
料理よりカラオケブームの旅の宿

喜寿過ぎて空気のような夫婦仲
学校と親が揉めてる子の嫉

信貴詣で押されて入る暗回廊
首振り虎のぞいた孫が首を振る

足腰の丈夫なうちに四季の花
教会の改築已年輝きて

大物の夢窓際で破れ去り
娘の家出親のリズムが大狂い

ひた走り走り続けた古稀祝う
かばかりの金に君まで君までが

兵庫県 西脇 富美

豊中市 小林 一夫

大阪市 乾 哲静

岸和田市 三輪 通彦

八尾市 向井 しづ子

呉市 岡田 寿美礼

鳥取市 岩原 喬水

豊中市 みき わきみ

寝屋川市 北岡 波留吉

嵐にも掛けず渡る夫婦橋
平和ですリズムに乗った夫婦ごま

同郷というだけへ妻がやさしすぎ
大正に生まれ元号また変る

何のそのやる気が弱気ぶっ飛ばす
待ち兼ねて一寸芽を出し雪に萎え

峯寺からゆく年惜しむ除夜の鐘
正月は暖冬出雲大社へ家族連れ

お年始にゆれるたもとの梅の柄
糸電話真面目な顔して母と子と

味噌の匂いの消えた白い家
長電話鍋から煙出はじめる

白馬に乗られた陛下の夢を見る
仁王さん八百歳のドックかな

散歩道赤信号で犬も待ち
長電話小銭なくてもカード出し

初釜の妻のお点前ほれなおす

橿原市 西本 保夫

東大阪市 大平 太一郎

島根県 児玉 幸子

静岡市 宇佐美 寿美

静岡市 青柳 金吾

奈良市 井上 大

豊中市 額田 明吉

富田林市 加藤 ミツエ

独り者行くあてもなし寝正月

泉佐野市

真崎浪速子

リクルートこんな漫画になる大臣

蔭口が本物となるハネムーン

静岡市

大村正雄

無理すれば後から苦勞ついてくる

先人の教え頷く歳になり

大阪市

清水絹子

弁当箱艱難辛苦無事故免(大退職)

身の丈も親を越えては叱れない

八戸市

島田昭治

帰省の子方言を使う優しさよ

新人類髪と車に精を出し

静岡市

丹羽定次

これしきと飲んだ酒で尻尾出し

派手すぎる広告来るは店仕舞

島根県

岩田三和

原子の灯消して平成喪に服す

ほていさんによく似る人が罪かぶる

高知県

山崎一求

元親もとちか公くやしがつてる本四橋

魚心あつて献金奉り

大和郡山市

渡部トキワ

モチの実に小鳥集合囃し立て

万両が松の根方に赤い顔

差芽する命あろうとなかろうと

泉佐野市

大工静子

四季四季の心変らぬ造花くれ

島根県

今川三津江

七福神かけて床の間春匂う

新元号へ新たな意欲わく

大阪市

平井露芳

寒いのか鯉も寄りそう池のすみ

名の一字つけて元号とはうれし

奈良県

和田萬里

西表いりもと島信号機は教材用

水牛車いのちのせんとく出来ました

島根県

高橋武衛

生かされて妻の手しかと喜寿迎う

正月の孫の笑顔にお年玉

富田林市

浦田トシエ

姑亡くし夫の存在見えて来る

食べて寝て風邪もどうやら峠越す

◆ジュニアの部

枚方市

二宮拱子

太りすぎおもちたちの誘わくに

寒空にたこをおどらす子供達

枚方市

二宮正彦

中学はテストテストでいそがしい

冬休み一日前でもうべんきよう

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

安藤 寿美子

連綿と昨日は今日に続くなり

林 荒介

昭和が平成になっても、昨日が今日になっても、すべてが急に変るはずもなく、昭和の繁栄も公害も税金も引き続き、人は昨日の靴を引きずって今日の道を歩いて行きます。

肩の荷がおりたら寒い肩あたり

西出 楓楽

する事が何もなくなくなった日と思うと、誰しも慄然とします。男のリタイヤのみならず、女も介護の後の日など、「荷下し病」になりそうです。そんな時、川柳があるのは何という幸せでしょうか。

冬至かなストンと話打ち切らせ

高橋 千万子

「わあ、もうまっ暗やわ。えらいこっちゃ」外を見やってそそくさと立つ。聞きたくない話からさっと身をかわす様子を、上五の切字で実にうまく表現されています。

券売機邪慳な音で釣を出し

大塚 節子

初期の頃に「券売機ときにたまげた釣をくれ」という誰方かの句がありました。アリガトウゴザイマスなど余計な事を言う券売機もありますが、全く可愛げがありませんよね。頼るのは耳 聞き違ひしても耳

堀江 正朗

私ごときにこの句の鑑賞などおこがましいのですが、そのビーンと張りつめた感覚の世界に打たれてしまいます。

何度でも教えてくれる辞書がある

大原 葉香

さつき言つたやろとか、こないだ教えたやないかととか、辞書は言いません。きちんと辞書をお調べになる習慣に敬意を表します。

胴上げの差し手の中に敵がいる

片上 明水

いつも思うのです。あのままだとずっと落されたらどないするんやと。川柳家はさすがに醒めた目で、敵の存在を見据えていられます。

良し悪しの分かれぬ猫が叱られる

小谷 仙山

猫が無実の罪を着てくれて、コトが丸く治まる事もあり、猫は何でワシが叱られるんやと思っている事でしよう。

満ち足りて帰れば夫の仏頂面

北野 久子

句会か、クラス会か、ショッピングか、はたまたデートか。声を弾ませて「只今！」と帰ればマツタクウ！。主婦の誰もが経験する

事でしょう。気にしない。気にしない。

十二月八日と八月十五日

樫谷 寿馬

昭和の終りにあたって、この句にめぐり会いました。第二次大戦をくぐりぬけて来た我等昭和の語り部としては、この二つの日付を忘れる事は出来ません。

迎春と書いて陽の目を見るハガキ

津守 柳伸

昨年末は、日本中が年賀ハガキを手にして思案にくれました。堂々と「謹賀新年 昭和六十四年元旦」と書かれた方はえらいなあと思いました。

販売機敬語使わぬ子がふえる

政岡 日枝子

「おばちゃん。これ下さい」「百円です。ありがとう。気をつけてね」という風景は少なくなりました。子供もカネ、メシ、ネル、になるのでしょうか。しっかりと躰けてやりましょう。金属バットを覚悟して。

褒められた日はよく回る風車

辻川 慶子

何とも可愛い風車です。傍にあつた方を心得て居られる方がいるのは幸せです。

今年の愚痴こまでにしと存じます

宮尾 あいき

去年の大河ドラマの若尾文子のこのセリフは、流行語になりました。それをうまく使って、一年をしめくくられました。

愛染帖

橘高薫風選

膝の上は女の世界愛を編む

大阪市 小出 智子

たまに逢ったというのに孫の話して
忘れない程に心配させている

川西市 野村 静雄

背徳の甘美に少女憧れる

少年のだからだりと下校する

堺市 井上 たかし

勤めない身に啓蟄はまぶしすぎ
定年に楷書人生まだ続く

米子市 新 正子

見てピタリ当たる易者に用はない
いい妻と言わせる程の悪女です

唐津市 仁部 四郎

点滴に少し疲れた見舞客

引き出しに薬がたまる課長席

和歌山市 寺田 裕美

通帖はないが仕事はたんとある

頰杖に今日の反省重すぎる

寝屋川市 岸 あやめ

流行に試されてます婆ちゃん度
観たつもり食べたつもりは佗しいよ

弘前市 真喜内 實

泣きやめばぱっちり変わる雪景色
万歩計一歩から良いお元日

島根県 堀江 芳子

おおげさにびつくり若さつていいな
健やかに生きていますと鳴る入歯

堺市 山本 半銭

平成がまだよそよそし明け八日
昭和史の自分を悼む涙かも

川西市 松本 ただし

肅々と神去りまして雲深し
紀の川の流れ私の昭和ゆく

和歌山市 堀畑 靖子

気負いなく時平成を刻み出し

青森市 工藤 甲吉

冬蔵し頭の上に北斗星

黒石市 相馬 一花

カンニング頭の悪い子はやらぬ

伊丹市 猪原 石莊

セーターの手首折る時母憶う

奈良市 井上 大

蛇の絵もあり進まぬ年賀状

吹田市 栗原 春子

臘梅の匂い余ってたまる胸

高槻市 河瀬 芳子

相聞歌雲と流れて行った日よ

出雲市 園山 多賀子

空鉄砲射程距離だけ弁える

米子市 石垣 花子

どんぶりこどの子のとこへ流れつこ

名古屋市 越村 枯梢

皿の絵が気に入らぬ紫陽花の変節

笠岡市 松本 忠三

一昔前の話に尾鰭つけ

豊中市 滝北 博史

嫁の靴そろえて妻に叱られる

伊丹市 榎谷 寿馬

静けさは恩赦を待っている男

唐津市 田口 虹汀

島根県 堀江 正朗

どの音も変わり記憶を消していく
常識の違い学んだ音の中

出雲市 板垣 夢酔

よい法話だからこんなに眠くなる
たとえばの話が猫に通じない

米子市 八木 千代

一合を炊いては鳥になる暦

罪を認めたように椿は落ちてしまふ

岡山県 土居 耕花

ブルドックの顔してブルドックが生まれ

般若湯とは水臭いほどけさま

島根県 江原 とみお

平成に命一つをくり越しぬ

カーテンに千夜一夜のシルエツト

豊中市 小林 一夫

七草に苦きものあり昭和逝く

人泣かし己も泣いた昭和逝く

今治市 越智 一水

開ってこそ人間をとり戻し

今治市 越智 一水

煩惱を断つのに刃研いでいる

唐津市 浜本 ちよ

節介は嫌かといって無視もいや

米子市 金山 夕子

近づくポストはいつもいい匂い

西条市 片上 明水

税務署へ杖の長さを替えて行く

大阪市 山田 妙子

割り切ったはずの昭和がついて来る

枚方市 山崎 彩子

新陸下どうぞお越しを初土俵

米子市 菅井 とも子

戦歴が無くてお城が美しい

鳥取市 武田 帆雀

インテリの皮一枚で泳いでる

鳥取市 広本 文子

己のくのに旅に心を弾ませる

鳥取県 さえき やえ

買いかえたメガネ枯葉が美しい

大阪市 榎本 路児

画家の墓終生売れぬ絵を画いた

豊中市 三宅 つえ子

正論を繰り返す父少し惚け

米子市 林 荒介

髪型は変えた今年を意識する

米子市 小村 てい子

剃り際がとて遙かな山に似る

河内長野市 植村 喜代

ボツボツと本物ほしい十九歳

和歌山市 後藤 正子

あたためていたのに雨の降る子感

西宮市 林 森

皺の中菩薩と悪女棲んでいる

和歌山市 森 乾

塗り足して少し薄めてダークグレイ

鳥取県 島根県 松本 文子

洗い髪見せても乱れ髪は見せぬ

鳥取県 島根県 松本 文子

リクルートよそに百円募金する

倉吉市 淡路 ゆり子

相討ちの刀は部屋に置いて出る

米子市 光井 玲子

生きてゆく夕暮れの海光らせて

高槻市 川島 諷云児

愚痴ばかりこぼす酒なら止め給え

富田林市 松本 今日子

使われる蛇は眠ってもおれず

富田林市 藤田 泰子

冬ごもり紙ヒコキを折るためる

尼崎市 春城 年代

やさしさを思い出してる冬の雨

茨木市 堀 良江

寒牡丹ふくみ初めた日の崩御

弘前市 齊藤 岳

天皇崩御北国も空静か

高槻市 小松 良

髪直し寝耳に水の悼む朝

岸和田市 芳地 狸村

肅肅と笹が売れてる戎さま

奈良県 横井 都姫子

アスファルト落葉が土にかえれない

米子市 政岡 日枝子

はつ絵

茜

薄い羽根寄せ合う冬の林にて

和歌山市 神平 狂虎

風一つ残してトップ引きあげる

兵庫県 倉垣 恵美

うつむいたそら豆の花にならなくて

八尾市 片上 英一

トラトラトラ想い出してる黒い蛇

弘前市 波多野 五楽庵

凡人の顔に仏と鬼が住み

鳥取県 土橋 螢

息切れのその正体は愛なのさ

鳥取県 小砂 白汀

哭いておく人の痛みのわかるほど

堺市 桜沢 あかり

当らない御籤大事にとつてある

香川県 上藤 多織

父の万歳ホールドアップかもしれぬ

広島市 中村 要

蟹はその紅さの故にゆでられる

和歌山市 玉井 豊太

狭い門へ吹雪のようにけしける

西宮市 奥田 みつ子

富士山の見えるホテルで年を越す

鳥取県 西浦 小鹿

一頭の象を机で遊ばせる

倉吉市 奥谷 弘朗

気違いと言えずマニアと言っておく

岡山県 江口 有一朗

ロボットの酷使人間また非情

親達の願いさわがし春の風
米子市 小塩 智加恵

ばあちゃんの精魂黒豆光らせる
大阪市 神夏磯 典子

戦後派も男の厄にさしかかる
大阪市 板東 倫子

肩の力抜いて余生らしくなり
守口市 森川 まさお

どう見ても手ぶらは淋し十二月
平田市 久家 代仕男

さよなら雪止むまでの相手役
米子市 林 瑞枝

あたたかさ相合傘で初詣で
八尾市 向井 しづ子

終点に着いたら仮面はすします
尼崎市 春城 武庫坊

も一人の私を見るよう夫婦劇
堺市 神原 文

春一番孫の襦袢をひるがえす
高槻市 笑 鳴 恵美子

昭和史も七草の夜に閉じられる
宝塚市 丸山 よし津

御心の滲む昭和史振り返る
岡山市 松本 元江

不断着で一日昭和の喪に服す
和歌山市 福本 英子

大散歩させて逃げ道考えろ
和歌山市 山口 三千子

川底で一對になる流し雛
今治市 矢野 佳雲

海南市 三宅 保州

相談欄みんな読んでる覗き趣味
名古屋市中 藤井 高子

たかが拳の中で炸裂してる意地
米子市 田中 亜弥

あの顎は大物になるきつとなる
羽曳野市 田中 隆二

紙コップ黒いものには縁がない
守口市 結城 君子

ローエングリン聞きつつ芋粥たべている
町田市 竹内 紫晴

社名にも活路平成商事など
豊中市 みき わきみ

平成で最早終戦を死語とせん
羽咋市 三宅 ろ亭

筆太に平成日記の八頁
唐津市 中村 順子

燦然と二十歳の顔へ初光り
岡山市 山本 玉恵

赤い靴はいて幸に逢いに行く
大坂府 坂口 公子

はんなりと妊りたるや新春の原
唐津市 浜本 治幸

吉日を選び交通事故に遭う
藤井寺市 高田 美代子

子が巣立ち元のふたりでない寂か
唐津市 筒井 朴竜

爺独り杉枝を打つ山過疎化
枚方市 森本 節子

冬至の湯しみじみ日本のよさ思う
大阪市 大福 留吉

除夜の鐘去年の垢が落ちてゆく

朝の陽にお風呂の窓の眩しさよ
大阪市 北 勝美

黒人の瞳から取り消せない哀愁
和歌山市 山川 克子

棚ぼたのような願かけ初詣で
広島市 名和 喜一郎

大山がはつきり見える別れの日
島根県 榎原 秀子

人を恋う力まだあり髪を刈る
大和郡市 加藤 松次郎

古稀こえて土の香りをいとおしむ
兵庫県 吉田 明

会長を降ろす梯子を掛けている
鳥取県 土橋 はるお

還暦にわたしの生涯満たされる
岡山市 千原 理恵

満二歳私の命を伸ばす孫
寝屋川市 宮尾 あいき

懸命に走り振り返つてもう
和歌山市 田中 輝子

投句先 千560 豊中市中松塚三丁目13-15

橋高薫風苑(ハガキに3句)

NHK川柳からのお知らせ

NHK「ふれあいラジオセンタ
ー」の3月の川柳選評は、センバ
ツ高校野球放送のため中止の予定
です。

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

佐藤 藤子

お茶漬というもてなしの温い味

今西 静子

お茶漬でもてなされたとおつては、急に親近感と、信頼が生まれようというもの。お茶漬を食べる間柄とは、生涯にそうたくさんあるものではない。いつまでもよいお友達でいるのではないでしょうか。

とんぼ帰りにしても故郷いいもんね

豊田 巡歩

思わず「いいもんですね」と共鳴してしまふ。だから毎年繰り返す、民族の大移動。ふる里へ、ふる里へと向うのです。故郷への思いが、ふつふつと伝わってきます。

不謹慎な笑いを溜めている木魚

桜沢 あかり

ごく内輪だけの法事の席なのでしょう。些細なことがあって笑いを堪えている。そんな時の木魚は、殊更生真面目に聞えます。悲喜こもごも、なぜかほつとする一句です。

異常なという診察が頼りない

高野 宵草

長いあいだ待たされて、診察時間の何と短いことか。自覚症状があるから、辛抱して待ったのである。もう少し私の訴えをとりあげて、丁寧に診てくれてよきそうなものであると、不安より不満が残るのです。

為になる話ちつともおもしろない

大西 文次

おもしろないとさりと云つてのけられたところに、この句の味がある。それなら聴かなければよいのに、作者はなぜかいいそと出掛ける。誰に勧められたわけでもないのに。

あまりにも突然すぎてNOと言う

横井 都姫子

あまりにも突然だから、本音または反対の言葉をつい言ってしまうことがある。しまったと思うが後の祭。どうしようかと気は揉めるが、現実が酷しい。

愛してるなんてうつつかり妻に言う

青柳 金吾

照れていらつしやるが、このうつつかりは、喜びも悲しみも幾年月重ねての「うつつかり」なのです。夫婦の有りようを深く感じます。

少し危うい結婚なれど好き同士

田中 輝子

好き同士ならばお互いに牽制し、悲喜劇を繰り返してやってくことでしよう。そして前句のように、「うつつかり」愛してると言える

夫婦になれるのだと思うのです。

後継ぎを生んで嫁さん強くなり

阿部 進

なよなよとしていては、命を生み育むことはできません。ましてや後継ぎを生んだのです。打って變つて、自信に満ちあふれ、頼もしく強くなってゆかれるのでしょうか。

特色はなしスマイルで勝負する

堀端 靖子

謙遜していらつしやいますが、スマイルこそ女の武器です。その心意気に脱帽します。弁解をするなど母は目でおさえ

山口 三千子

苦勞性の母、いつも父の言うなりになっているように見えますが、なぜか事は母の思惑通りに進むのです。母に任せておきましょう。水に流そう平気で言えるのは男

高杉 千歩

そうなんですすね。苦しんで、傷を抱いて生きてゆくのはいつも女なのです。男と女の違いをうまく表現されています。

びび割れた指でこの世を渡り抜く

足立 由美子

一人の女性の厳しい生き方が、よく表現されていると思います。

良い便り郵便箱を拭いて待つ

富坂 志重

郵便箱を拭いて待つのは、女ごころ。春の便りが待ち遠しい。

尚香のむ

小出智子選

亡母の年越えて形見の肌ざわり

福の神に今年も暗示かけられる

子供等よ打出の小槌もう空だ

こんないい月夜に私独りとは

晴着きる女に年はないのなり

故里の一本杉はもう他人

洗濯がしたくてちよつと輪を抜ける

せめてバラ一輪買つて年を越す

この街がやさしく見える朝の窓

一月七日父と一日お茶を飲む

泣き虫を叩き出してるコンパクト

定年退職もう待つこともない暮し

冷静を装う両手ひざに置く

ひさびさの団欒冬陽賜りて

バカになる水を一杯のんで出る

今年もよろしく掃除機洗濯機

俤せのおつりはもらわれないことに

泣き事を書いたらポスト笑うだろ

土壇場で背中をポンと叩かれる

岡山県 矢内寿恵子

米子市 茂理 高代

西宮市 西口いわゑ

松原市 佐藤 藤子

大阪市 西出 楓楽

西宮市 林 はつ絵

大阪市 鍛原 千里

米子市 川上より子

寝屋川市 平松かすみ

大阪市 鈴木 節子

和歌山市 堀畑 靖子

和歌山市 森 茜

鳥取県 さえきやえ

大阪市 神夏磯典子

堺市 神原 文

岡山県 富坂 志重

和歌山市 坂部紀久子

振り袖を着せる母の手はずんでる

間違いはどのあたりから枯れはじむ

ワイシャツの口紅妻に無視される

辛抱という字が褪せてくる恐さ

夢売りと夢買いが居る新春の景

白羽の矢 神のジョークとお受けする

庇うてくれるカーテン一枚吊つてある

釣り合いの上手にとれたつるし柿

ネオンつけたら早く帰って来るかしら

三箇日ダイエツトなど忘れとこ

ひび破れのうちに補修をしておこう

弾まない毬に酸素を足しましょう

七草粥ふうふう昭和終ります

昭和一桁やっぱり古い疵を持つ

定年が夫と妻で噛み合わず

あやふやな答が返る昼の月

昭和史の一隅に有る鳩の墓

一つずつ諦めながら年をとり

たくあんの重石に堪えた味になり

振り袖を黒のスーツにした自粛

家建てて粗大ゴミとは言わせない

定刻に犬が知らせている散歩

朝の陽になつとくのいく靴をはく

石女のかなしみあなたわかるかい

迷うまい残り時間が惜しいから

大阪市 山田 妙子

尼崎市 春城 年代

寝屋川市 岸野あやめ

大阪市 稲本 凡子

大阪市 町田 達子

香川県 上藤 多織

名古屋 藤井 高子

高槻市 河瀬 芳子

米子市 新 正子

倉吉市 青砥 菊枝

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 福本 英子

和歌山市 寺田 裕美

和歌山市 細川 稚代

東京都 吉川 一美

高槻市 笠嶋恵美子

堺市 小西 小雪

大阪市 島村美津子

青森県 富士 トキ

吹田市 茂見よ志子

岡山県 丸山 光子

大阪市 松尾柳右子

米子市 沢田 千春

鳥取県 川崎 秋女

米子市 光井 玲子

合格の電話鼓膜が破れそう

こみ上げる熱さは生きてゆく証

虚礼廃止ひとりぼっちの祝い箸

借りている句集を写す三箇日

夢を追うひたすら旅のひとり言

蒼天にわたしの椅子が空けてある

雑巾を濯ぐ両手をたいせつに

うかつにも渦巻く中に居た私

立て結び悲しい過去を偲ばせる

二尺ざし母の喜び知っている

その時は蛇にもなります火の女

帰らない息子の分も雑煮炊く

外孫は外でどんぐり拾って来る

木守柿かこつ言葉は未だ聞かぬ

紙吹雪うれしい事もたまにくる

オカリナの音には父もふりかえる

ありがとう老母のまるい背に甘え

一幅の画なり冬田に鶴あそぶ

平成の世明け産声たのもし

幸せになれるでしょうか花の私語

一面の雪許せない人がいる

欲張れば今の幸せ逃げそう

米寿尚踊り納める舞い扇

窓際の席まで声は届かない

素直になりたくて白足袋を履く

西宮市 奥田みつ子

和歌山市 後藤 正子

大阪市 津守 柳伸

羽曳野市 福田満洲子

貝塚市 池田寿美子

米子市 林 瑞枝

和歌山市 西山 幸

和歌山市 砂山千枝子

富田林市 片岡智恵子

宝塚市 丸山よし津

和歌山市 田中 みね

和歌山市 山口三千子

和歌山市 松井かなめ

守口市 結城 君子

米子市 青戸 田鶴

米子市 政岡日枝子

八尾市 宮西 弥生

藤井寺市 高田美代子

大阪市 古川美津枝

寝屋川市 稲葉 冬葉

奈良県 横井都姫子

和歌山市 前田 美子

姫路市 中塚 遊峰

茨木市 堀 良江

寝屋川市 井上すみれ

ひとつ家に狐と狸住んでいる

それにしても美しい絵が何故書けぬ

隙間からやとと出た芽をいとおしむ

古備前の花瓶で花がかしこまり

初日の出雲かきわけて掻き分けて

悪いとこだけを巳年のせいにされ

ちよつと耳貸して重荷を背負わされ

春なのにまだ風邪引きがなおらない

スーパへ行く友達をまた替える

家計簿を上手に締めて淋しすぎ

友の手が一番温い失意の日

孫達の顔が重なるお正月

ゴシックの一句目、亡きお母様の年を越してから、出して見る形見は

亡母の生き方と、自分の生き方を思い合わせて、一層、懐しさを感じる

ものでしょう。二句目、そう言えば親とは、何時も打ち出の小槌をもつ

てもいえるように思われているのかもしれない。「空だ」がともりアル

な表現。三句目、晴れ着を着る時女は、年のことなど考えたりしない。

和服のよく似合う作者。四句目、久しく帰らない故里も代替りして、周

囲の環境も少しずつ都会化されてゆく。親しんだ一本杉でさえ、もう他

人だと感じたという。五句目、てきばきと物事を処理される作者。ちよ

つと輪を抜けたとはこの方のセンス。六句目、独り暮らしのお正月。一輪

のバラへの思い入れが深い七句目、多忙な生活の中で、朝の窓を開くと

き、この街に生きる幸せを思うのです。

◇

ハガキに雑詠3句。毎月10日締切。

投句先 〒544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出智子

米子市 小塩智加恵

島根県 松本 文子

吹田市 井上 照子

岡山県 山本 玉恵

岡山県 伏見すみれ

大阪市 板東 倫子

大阪市 本間満津子

和歌山県 田中 輝子

堺市 山本 半銭

岡山県 福原 悦子

和歌山市 古久保和子

島根県 喜島 ノブ

私と昭和

—昭和をどう生きたか—

◇同人アンケート◇

大日本に戻すな

奥谷弘朗

「まさかそんな事が……」、私は思わず心の内でそうつぶやいた。「大日本」という言葉聞いたからである。

それは一月七日、悲しみのうちにも厳かに今は亡き天皇の崩御を告げる内閣官房長官の

談話をじっと聞き入っていた時の事である。「大日本」はすでに過去のものとして、完全に消え去ったものと思っていただけに、一瞬、「まさか」と感じたのである。

あるいは私の聞き違いであったかもしれない。そもそも考えた翌日の新聞には、明らかに「大日本国璽」と「大」の字が活字になって載っていた。

私には、思いもかけぬ出来事に思えたのである。それが国の中枢にいる人の発言であるだけに、なおショックであった。私も国民の一人として、亡き天皇の崩御を悲しみ、お悼み申し上げる心に変わりはないが、悲しみの中から「大日本」が再び姿を現わした事が、私には信じられなかったのである。

思えば日清戦役から始まった我が国の侵略政策は、ついに第二次世界大戦をも引き起こしてしまった。誘因がなんであったかは、私のような者にはよく分らないが、その中に「大日本帝国」であるという潜在意識があったのではと私には思われてならない。小さな島国の日本が、これ見よがしの頭の上に大の字をくっつけて、自ら「大日本帝国」と称し振る舞った思い上がり、他を顧みようとしなかったおごりこそが、災の基ではなかったかと私は考えるのである。

「もう二度と大日本にはなりたくない」と思う気持でいっぱいですので、あえて「ペン」とらせてもらいました。

父の尻尾

林 荒介

物心ついたのが満洲事変の最中、中国山脈の山あいだで役人の子として生まれた。玩具の鉄砲を担いで、二十数戸の部落の一軒一軒を「出征することになりました。錢別を下さい」と、挨拶をして回り、おひねりや駄菓子を買った記憶がある。厳格な父だったが、この時は叱られた記憶は無い。小学校三、四年生の頃から、各町村で募集された開拓団の人を伴い、父は満洲に渡るようになっていた。

どうか自分の頭で物考えられるようになった頃は、第二次世界大戦もたけなわ。籍は学校にあっても勤労働員、勉強どころではなかった。そして敗戦。大日本帝国が崩壊し大和以来の制度は変革されてしまった。父もまた、敗戦後、半年も経ぬ中に職を辞めた。小作に出していた僅かの田畑を返してもらい、俄か百姓に変身、気難しかった父が急に好々爺になり、家人を慌てさせた。時には妙にふさいだりしていた。ソ連の参戦もあり、満洲の情報は乏しく、開拓団の皆様を気に病んでいた。そんな父も贖罪の中に脳軟化症と果てた。

国体は変革されたが、自己を主張すれば、体制から弾き出される。公務員・教員を経て自営に至った。やっと軌道に乗った頃、川柳と出会い、本音で話せる仲間も出来た。

残留孤児の報道に心を痛めながら、父の尻尾を引き摺り、昭和を見据えて生きようと思ふ昨今である。改元されたが、どつぷりと昭和の中に浸っている。

生き抜く川柳

堀江 正朗

冷たい雨の降りしきる中を芳子に手を引かれ、バスを乗りついで戦災者・遺族らの詰めかける会場へ到着した。果傷痍軍人代表として、ご巡幸の陛下をお迎えした昭和二十二年十一月二十九日の事である。号令をするまで頭を上げぬよう指示があり、靴音が近づいてきた時、「陛下、私は三人の息子を捧げましたが、陛下を拝し、思う事はございませぬ」「ああそう」との一声に、思わずお顔を見上げていた……と、あとで芳子が話してくれ

た。
昭和八年現役入隊、ハルピン方面警備、十二年七月応召し、神戸の備後屋で三日ほどお世話になり、出港、黄河・済南・台児莊激戦と慰問袋の一つにも会えず、凍てつく前線へ

前線へと。

十三年一月、徐州戦で両眼負傷し、手当もままならず、戦友に励まされて背囊を掴んで前進。三月十五日、大阪陸軍病院に収容の後、各地軍病院を転々。十七年、東京失明傷痍軍人寮で川上三太郎師と出会い、川柳開眼の道を授かった。

松江日赤で看護訓練に当たっていた芳子の父の關係で三人の子に恵まれ、臍げながら父親の実感を得たが、戦は人間の総てを、文明は人心を奪う。別れの駅で汽車を追った母の顔も、自分の顔も、人間の顔さえ忘却の彼方に。

東条英機直筆「誠」は、正夫の青春を、両眼を失った筆舌に尽くせぬ無念な昭和史でもある。栗・薫風両先生、塔社の方々に支えられ、正朗は生き抜く川柳、生き抜かねばならぬ明日に向って限らない希望を抱いて妻と歩むのだ。

川柳・音楽と私

渥美 弧 秀

昭和四十七年度始め、人身事故の入院生活から五月になって学校へ出勤しはじめたら机上に

校長先生へ 三の一 佐藤成美
校長先生 おけがはなおりしましたか。三年

生になってから、校長先生の顔を一度も見ないのでさみしいです。二年生の時、私たちが勉強していると窓から校長先生が見て廻ってくれました。でもこの頃廻ってこないの何でか変です。早く廻って来て下さい。早く私たちといっしょに歌を歌って下さい。(後略)
昭和五十八年五月、日本教育音楽協会から表彰状と堅琴の金バッジをいただく。

「あなたは終始一貫音楽教育に尽瘁しわが国の音楽教育の進展に貢献した功績はまことに偉大であります。よって……」
今は亡き日本教育音楽協会会長、小出浩平氏は、「コイノボリの作者で、明仁天皇が学習院時代の音楽教授でした。

詩と音楽 生き甲斐となり古希弾む

川柳と出会って七年目になる。「人間」を詠む定型詩に私の生活は弾みを持つ。現在は会館・老人センターで川柳の勉強と音楽指導をしている。雅名・表彰向けのしないように、川柳と音楽に精進している私です。

音楽に詩もよし 老いの道忙し
自分史の終幕満ちた詩と楽

燃えつきた青春

吉川 寿 美

「ほしがりません勝つまでは」を公言業に、

錦の御旗の下、本当に神風が吹いて竹槍に藁草履で勝ると信じ、必死に戦いぬいてきた私たちにとって、戦友のように切り離せない昭和の御世。学徒動員の名で狩り出され、大和撫子の一員として軍需工場に配属、そして本土空襲。機銃掃射に命からがら逃げのび、一人二人と櫛の歯が抜けるように、級友が死んで行った悪夢の毎日。これが私たちの青春でした。

そして敗戦という大きな節目を迎え、人類破滅からは免れたものの、一八〇度の転換。無条件降伏という惨めな状態から一気に高度成長の道へ突っ走り、世界の経済大国に躍り出た昭和。一口に言えば、戦争と革命の時代だったと思います。昭和は中ほどに血塗られた大きな傷を抱いたまま、歴史の幕を閉じました。そして私たちの青春は、この動乱の中で燃えつきたと思います。

天皇ご重態の報に接した時、もうお楽にして差し上げたいと思い、今しばらく平和な昭和の御世を共に生きて頂きたいとの気持ちがいまぜになり、天皇と亡父がだぶってしまふ毎日でした。

テレビで流された神宮一人から人間天皇までのエピソード、今まで知らなかった陛下のご苦衷の数々に涙したのは、私だけでなかったと思います。奇しくも昭和の御世の終りと私の定年が同じで、私たちの時代は終わったのだとひとしお深い思いで迎えた平成元年でこ

ざいました。大きな犠牲で手にしたデモクラシーを大切に、いつまでも平和な御世でありますように……。

私の昭和

米澤 暁明

はじめて教壇に立ったのは昭和四年二十一歳で、不況が続く、昭和六年は一年間、月給一割寄付の時代であった。ところが、上海事変、支那事変を経て太平洋戦争に突入、きびしい戦時体制がしかれた。

学童疎開はない地方であったが、学童も鎌を持って稲刈り、いも掘り、炭焼きなど「勝つため」の毎日が続き、食糧難に堪えながら教師は空襲下にさらされ、戦闘帽、巻き脚絆姿の毎日であった。

一生は短かくてよし九段坂

靖国の君が浮かんだ盆おどり

こんな拙吟を吐いたりもしたが、戦況は日に悪化、アッツ島玉砕から尾を引くように、米国の沖縄上陸作戦は、ついで広島、長崎への原爆が玉音放送となって終戦となった。

国民の不安はさらに続いたが、新憲法が生まれ、教育は六・三・三・四制となり、その実施の昭和二十二年四月繰り上り校長に任ぜられた。

民主主義校長さん草を引きの時代となり、日教組が生まれた。(後脱退)日の丸を七つの海が待つ講話が生まれ、次第に世は落ち着きを取り戻した。

下着から替えこ会釈を賜る日全国からの校長が宮城内で「お言葉」を賜った。四十一年退職、川柳は無論のこと、教育界・公民館・職業訓練校・文化協会・自治会・史談会などの副会長や役員となり、現在八十歳、菩提寺や鎮守の建てかえに力をそいでいる。

心の旅路

林 はつ絵

昭和天皇ご即位の大典を祝う旗行列へ旧制高等女学校二年生で加わった私にとつて、昭和は私の人生の殆どと言えます。

昭和の激動と私の心も長い旅をしました。高女の教育方針は「良妻賢母」。婦人参政権のない国の良妻とは、黙って家と夫に従えです。

「女、子供」は家の事に口出しできず、ろくに知らされません。同級生がある時、「こんなに失業などと騒いでいるのに、私の家では誰も働いていない。兄も姉も学資が要るのに、どこに収入があるのか心配でならぬ」とふさぎ込むので、私が自分の家には一粒も入らぬ

年貢米のことなど、この大地主の娘に聞かせて慰めたものです。プロレタリア文学が隆盛し、共産党の大檢舉があつたりしたが、社会について考えようとせず、否、考えることを許されず、戦争へと突入して行きました。

戦争中は一億一心。私は国民学校へ勤めていましたが、担任学級の生徒と勤労働員で行つていた工場で空襲警報を受けた時、生徒の安全しか考えず、その時、出征兵士の心境でお国のために死ねる自分を発見しました。

終戦の八月十五日。放心とはあの時のことです。それから天皇も神から人となられ、私もやっと自分に正直にものを考えられるようになりました。この自由の中で初めて青い鳥と出逢えたと思います。この青い鳥と平成の旅に行くことを嬉しく思っております。

老人の戯言

有 働 芳 仙

戦争が始まり、日本が暗黒時代に突入した頃、僕は胸をやられており、南方の炎熱下では死期を早めると聞いていたので、自ら軍属として自殺の希望で志願し、幸い第五師団司令部傍受班に配属された。これが僕の生命を引き延ばすことになろうとは思わなかった。

椰子の木蔭の掘立小屋の一室に米国人の捕

虜一人と濠州人一人、それにチーフ一人と僕四名で終戦まで同じ釜の飯を食つて過した。

その頃が今なつかしい思い出になっている。日本の敗色が日増しに濃くなつて行き、「大坂當段々嘘が多くなり」つづつた事が、傍受の無線で分り始めた。神風も沖縄戦の時、功を奏しなかった。そして遂に終戦の報が入つてくるや、捕虜の二人は「センソウオワツタオワツタ」と小踊りして抱き合つて喜んだ姿は印象深く、国境を越えた人類平和への憧れの心が胸にじーんときた。班長は二人をぶんなぐつて制したけれど、日本人としては敗戦の打撃と悲しみはそれ位では気がおさまらなかつただろう。僕はその時の捕虜の青い瞳の優しい輝きを忘れない。

その事があつた翌日、陛下の「しのびがたきを忍び」の詔勅が下り、全身の力が抜けて行くのを感じたのは、日本人誰しもであつた。捕虜は戦勝国のお客様となり、僕たちがキャンプに強制収容されて待遇は逆になり、インドネシアの現地民が自動小銃を抱えて、我々を監視する立場に置かれた。

現在の日本は、終戦後四十年余を経過している。しかし、まだ戦後はそここで息づいている。飽食日本、経済大国と言われている。僕にはピンと来ない。海外旅行者は毎年増える一方であるが、全くレジャー目的で、結構な人達にしか映らない。何か日本に大事なものが忘れ去られつつあるような不安を感じて

いる。これでもいいのだろうか、外国人の方が思っている感じである。「平成」、内平らかに外成るや否や。地平らかに天成るや否や。老骨の戯言であれかし。

歴史の進歩と天皇

田 中 隆 二

手と足をもいだ丸太にしてかへし

有名な鶴彬の句である。私が川柳を始めたまもなくこの句に接し、深い感銘をうけた。

昭和二十年の終戦の時、私は十五歳であつた。戦前の皇国史観にもとづく天皇制教育で、天皇を神と崇拜し、侵略戦争を聖戦として信じて疑わなかつた私は、少年兵を志願した。あと一年、終戦がおくれていたらどうなつていたかわからない。大阪の空襲で家が焼かれ、焼土の中で八月十五日をむかえた。

戦後、自由と民主主義の息吹の中で多感な青年時代をむかえて、私の社会と天皇に対する見方も一変した。文学・哲学・社会科学などの書をむさばるように読んだ。そうした中で、民主主義の思想を我がものにする事ができた。

昭和という時代は、人類の歴史上最大の惨禍をもたらした。戦争で何百万の人間が殺され、その頂点に、ヒロシマ、ナガサキがあつ

た。天皇の死去に際して、異常な天皇賛美の報道が行われたが、それは歴史の進歩に逆行するものである。長崎市長も言われているように、天皇の戦争責任の歴史的事実を蔽い隠すことはできない。

平成という新しい時代が、天皇を国民支配の道具にするのではなく、「主権在民」の民主主義のいつその発展の時代になることを願っている。

天皇の美化は許さぬ兵の墓

隆二

川柳陶冶と私

久家代仕男

大正九年農家の長男に生れ、昭和十一年学校を卒業する間は、我儘と横暴で手のつけられない悪童でした。卒業と同時に村の青年団に入団、昭和十五年の秋に明治神宮国民体育大会に県代表として参加。同年十二月現役兵として電信五連隊に入営、翌年十二月北京の連隊本部で大東亜戦争を迎え、中支に転進中に終戦、岳陽で捕虜生活を終え、二十一年五月復員。父は戦時中翼賛村長のため追放。その秋、周囲の反対を押し切り、意中の女性と結婚。ほどなく農地解放になりました。

昭和二十三年秋に島根食糧事務所に奉職。

二十四年初夏の頃、職場川柳の講師として尼先生をお迎えして知遇を得、昭和二十六年から『川柳雑誌』に投句を始めました。昭和三十四年父が逝き、三十八年秋に愛妻が死亡。この頃の私は職場にあっても、生来の短気と強引直行さで、一匹狼として随分、敬遠もされていました。

引き続きの不幸から私の生き方に反省、粹がつてみても、人生は流れに逆らって生きてもゆけないと非を悟り、川柳陶冶を本気で考える大きな私の転機となりました。昭和五十六年春農水省職員を定退、以前にも増して尼先生の薫陶を受ける機会に恵まれ、六十三年四月尼先生ご逝去の後を引継ぎ、現在に至っています。

戦後史の私は、川柳によって開眼し、川柳を通して私の生きざまの方向づけをして頂いたことは、得難い尊い体験でありました。元号は平成に変わろうとも、私の礎は激動の昭和の試練にあったことは論をまたないところであります。

酔っぱらい操縦士

寺井東雲

九七式艦上攻撃機操縦専修の修了証書を頂

いて訓練飛行を終り、対潜哨戒基地の千葉県館山航空隊へ配属されました。間もなく九〇三空となり、第七御前特別攻撃隊員となりましたが、平常は船団護衛、対潜哨戒の任務についていました。

ある時、飛行中に小便したくなりました。小便袋は常時、飛行靴に入っていますが、飛行服にジャケット、落下傘バンドも締めつけており、なかなかホースが出てきません。やっと袋一杯におシッコして、小便袋を外へ投げました。その瞬間、後席の機長から伝声管で鼓膜も裂けんばかりの大声で「バカヤロー」。慌てて振り返ると、何と袋が機長に当たって顔が小便まみれでした。

また、昭和十九年二月十一日のこと、紀元節で祝盃を挙げ、相当、酒が回った頃、「寺井、出発するぞ」と声がかかりました。昨夜見た搭乗割には私の名はなかったのにと腹を立てながら、操縦席へ乗り込みました。ところが、伝声管が機体の底に巻きついて上つてきません。無理矢理引く張ると、ドスンと大きな音がして対潜用爆弾（二五〇キロ）が落下しました。そして飛び立って三十分ほど経つと、睡魔におそわれました。その度に機が傾き、機長が怒鳴って私を起こします。とうとう翼を折りたたむ棒で頭を叩くという始末でしたが、この酔っぱらい操縦士はどうにか生き延びて、今日に至っています。

1989年

川柳塔社新年会

1月15日・大成閣

平成と年号が変つて一週間、連日のぐずついた空も今日はすっかり晴れ上り、暖い陽ざしの中、大成閣五階の会場は午前十一時に準備完了。受付で八十八翁、坂本仙吉郎氏の句集『ふたり旅』が出席者に贈呈される。壇上には、昨年の叙勲で榎主幹が授与された「木杯一組台付」が燦とかがやく例年にない風景。午後一時、柳宏子さんの司会で開会。

榎主幹から私の叙勲、紫香副主幹の受賞と喜びの言葉が重なるご挨拶、薫風副主幹から八十歳から川柳を始められた坂本仙吉郎さんの作句への熱情と句集『ふたり旅』についての紹介があり、兼題の披露と進み、司会が天笑さんと交代、懇親宴にうつる。

まず東野大八先生の音頭で乾盃、ついで恩賜の木杯での回し飲み一同感激、諒閣中のこととてカラオケは中止してマイクだけで十番の唄が続いて会場をわかせる。自粛ムー

ドで恒例の万歳三唱は中止したが、新しい世代への夢と抱負を抱いてそれぞれ成人の日の雑踏の流れに乗って家路についた (武)

出席者―榎・大八・太茂津・白漢子・諷云

児・幸・藤子・武庫坊・年代・智子・登志実
薫風・笛生・紫香・はつ絵・柳宏子・いわゑ
君子・みつ子・シマ子・光子・東雲・寿恵子
熊生・理恵・妻子・玉恵・しげお・螢・吐来
凡九郎・千秀・鉄治・みね・由多香・トメ子
兼治郎・五楽庵・三男・登志代・千尋子・千
万子・冬葉・美津枝・みさ子・諷人・完司・
雄々・形水・萬的・史好・一二三・寿美子・
寿美・楓楽・敏・射月芳・弥生・正坊・洋敏
恭昌・すすむ・雀踊子・藻介・弘朗・規不風
英子・さと美・メ女・久子・天笑・月子・美
智子

「福」

小林 由多香 選

手の届くあたりで福が待っている 智子
手に持てる福袋さえあればよい はつ絵
福笑い顔も空気があたたかい 射月芳
逆境に友情という福貰う 光子
福娘掛声のない笹を売る 東雲
一姫二太郎産んだ娘は福の耳 敏
福袋軽い重いを打算する 冬葉
中流は福の神さんかて中流 シマ子
欲のないおんなへ福が舞いこんだ みさ子
ほとほと福持っている豆をいる 熊生

てのひらにのせる小さい福がある
その内に行くよと福は何時も言う
ユーモアがとっても好きな福の神
福の神招ふ入口は開けてある

雀踊子
凡九郎
正坊
幸

暇だから君の幸福度をはかる
お多福の面はいらない私です
福は内 鬼もこのころ弱くなり
えべっさんの目にこの顔もお人好し

諷人
寿美子
藤子
吐来

タクト振る妻福の神かも知れぬ
幸福をシェアせとよむ腕の中
福の神決して不意に来てくれぬ
どの顔も福笹下げて満ち足りる

三男
柳宏子
紫香
登志実

福娘がまだまだ若く見せている
福娘にプロポーズして笑われる
聞き上手な女の耳が福々し
一家団欒小さな福を抱きしめる

萬的
三男
鉄治
雄々

福引の特賞旅で風を引き
災いを福に転じた母の知恵
福つかむまでの男にあるいくさ
禍を福にしたくて鶴を折る

一二三
鉄治
雄々
楓楽

福耳と添うてせいぜい食べるだけ
お多福の鼻には勝てる自負がある
福男だからちよこちよこ奪われる
残り福だよと晩婚祝われる

千秀
諷云
久子
天笑

春の街残り福でも探そうか
お多福の面に涙は溜めておく
増えてきた白髪を福と信じよう
七福神女一人がもててはる

月子
妻子
武庫坊
由多香

「ありがとう」 西山 幸選

ありがとうの一言が招ぶ春の風
 ありがとう言えばうなずく石地蔵
 ありがとう今年も雑煮食べる倅
 やさしい妻を出雲の神よありがとう
 おかしい僕が言ったら有難う
 謝々が素直に言えて旅終る
 ありがとう声にならないお立酒
 有難い話に少しし落ちがある
 悪友がいて生きてゐるありがとう
 ありがとうその一言で報われる
 ありがとうきれいな過去にくれる
 ありがとうやと痛みが去りました
 今日を無事生きて夕日よりありがとう
 二人目は花子神様ありがとう
 ありがとうだけはきっちり兄に教え
 こんな良い柳友よ句会よりありがとう
 こんな俺ようまあ妻は居てくれる
 洗濯物が乾くお日さま有難う
 激動を生きた陛下のアリガトウ
 綻びに気付く糸針ありがとう
 ありがとう言つた数だけ磨かれる
 蘭磨きのブラシへ今日もありがとう
 ありがとう何度聞いてもいい響き
 ありがとう素直に言えた歯が白い
 まっすぐに育つ娘達よありがとう
 寝たきりの目が言っているありがとう
 心から言うありがとうではないが

恭昌 射月芳 千万子 凡九郎 武庫坊 妻来 吐来 藤子 智子 久子 寿美 正坊 寿美子 凡九郎 史好 恭昌 形水 楓 月子 三男 由多香 兼治郎 年

川柳塔社新年
 会に参加して

東野 大八

有難や賜杯の屠蘇の酔心地

栗

一月十五日、川柳塔社恒例の新年会に久し
 ぶりに出席して、西尾某先生から右の御染筆
 を頂いた。このあと、豊明殿で拝受された立
 派な下賜の木杯で、御酒を頂いた。

あすき色の美しい木杯の漆塗りのなかに、
 燦然と十六花弁の菊の御紋章が揺れていた。

ありがとう今日も日記にこの五文字
 合格通知空に大きくありがとう
 ありがとうすなおに言える歳となり
 嫁はんには何時かは言おうありがとう
 金要らぬ茶の接待が有難い
 嫁ぐ娘が小さな声でありがとう
 誰も彼もにお礼言いたい退院日
 柩から出て叫びたいありがとう
 鍵穴の中でありがとうが溢る
 こんな私選んでくれてありがとう
 有難う陛下も好き有難う
 ありがとうそのひと言で心足る

君子 藤子 白漢子 英子 天笑 諷人 正坊 栗 美智子

ハワイでも行こか苦勞をかけたよね
 余り何度も言うこ薄れるありがとう
 ありがとう言えば返ってくる笑顔
 日本語過去も未来もありがとう
 ありがとう言えば餅もありがとう
 日本語で一番好きなありがとう
 有難うただありがとう八十歳
 妻だから声に出さないありがとう
 人間の丸みが出来たありがとう
 ついて来るわたしの影よありがとう
 真心をたくさんもらいありがとう
 生涯にいくたび言えるありがとう

登志実 年 代 三 太茂津 理 恵 敏 すすむ 螢 熊生 はつ絵 智子 幸

元旦から天皇様なみに、体調不良で三日間も
 臥床して、猛烈な咳のため酒を断っていた私
 の胃の腑にしみる初めての屠蘇が、この有難
 くも御下賜の木杯の美酒であつたわけだ。

木杯受章の榮に浴された某先生に、御祝辞
 をころから述べられたという、責を果たし
 た席だけに、先生の御作の酔心地の句とともに、
 まことに格別な爽涼の気分であつた。

また関西柳界で、カクシヤクたる八十翁で
 御活躍の黒川紫香先生に、尼崎市文化功労賞
 受賞への御祝辞を述べたことも、望外の喜び
 であつた。この両先生のの祝いの集いが、今
 年中に催される由、ころから御盛況を祈る
 や切である。

さらにもう一つ、川柳塔あおもりを代表し
 て、はるばるみちのくの弘前から遠路参加さ

れた波多野五楽庵さんに再会できたことも、錦上花を添える喜びであった。

十和田湖よみな酒になれ旅人へ 路郎
の麻生路郎先生、お壮年なりし頃の名句を想いうかべ、ひと手をとり合ったことである。好漢ますますみちのくの雪や風にめげず健在なれと心の底で強く祈った。そのあとこころ優しきわが川柳塔連の同志の人々の多幸逢春もあわせ祈念した次第である。
みなさん、どうもありがとう。



川柳塔社新年会—左から五楽庵さん・栞主幹・大八先生

新年会に出席

した津軽衆

波多野 五楽庵

心齋橋そこを左に曲って数十歩、わりと馴れているはずの大阪も、一步曲ると知らない街の顔になる。大成閣・大成閣と探して歩く姿はまさしくお上りさんのでもあった（私を映したショーウィンドーがそう言うのである）。

やっと見つけた川柳塔新年会場の看板にホッとしながら四階へ、西山幸さん、紫香さんのお顔を見たとなん、ああよかったと安堵の胸をさすっている他愛なさである。

席がきまつているからと案内されたのは最上席、しかも栞先生のお隣という。先生に御挨拶申し上げてお名前を拜見したら驚いた。栞先生を筆頭に、薫風さん、大八さん、藻介さん、紫香さん、太茂津さん、由多香さんと日頃、尊敬申し上げる川柳塔首脳のお顔がずらーり。思わず尻こみする。

三年ぶりの大八さんは、五楽庵が来るというから美濃加茂から出て来たとお言葉に、あたたかい手を握りながら感激もひとしおなものがある。栞先生のお心のこもった、しか

もユーモアあふれる御挨拶にはじまり、先生が叙勲の御紋章付木杯でいただいたお酒のおいしかったこと、お酒をみたと底に画かれた銀の御紋が浮き上ったように見えるすばらしい三重ねの御盃であった。

大八さんに津軽の人達は酒が強いんだから、とおだてられているうちに朝から食べていなかった胃袋が急に酔いはじめてくる。その胃袋が大八さんを親類の叔父さんと思いはじめて来たから大変である。昔、佳木斯に住んでいた伯父との御縁があるにしてもまことに図々しい胃袋でありました。酔った勢いで弥三郎節まで唄って、大八さんと藻介さんから句を頂戴した。

弥三郎節心齋橋も聴いている 大八
弥三郎節をうたえば雪も晴れ 藻介
そればかりでない。栞先生、薫風さんはじめお顔を知らない皆様まであたたかいお言葉を分けて下さる。これが川柳塔のすばらしい友情なんだと思っている内に、涙がつまってくる。還暦になると泣く戸内になって来るものなのだろうか。皆様に誘われて夜の街へ立った津軽衆は、七月の栞先生叙勲お祝いに他の津軽衆と一緒にきつと来るんだ、と心にきめているのでした。

五月号発表の課題吟「切る」の選者は
辻白溪子氏に変更します。
(編集部)

頭

城角鶏生選

頭数揃うて旅に心飛ぶ 英美子
頭数揃えに誘う草野球 一乗
懐も頭も痛い子の受験 通彦
二次会へ頭割りしている幹事 小鹿
人形の頭を撫でて独り言 博子
頭一つ出すどんぐりに運が向き 可住
頭より体が覚えていての強み 重人
深々と頭を下げて今に見ろ 正敏
公園で頭隠したかくれんぼ 高敏
獅子頭あたまを噛んで厄を取り 高明
大正を古い頭と孫笑う 喬水
切り替えのおそい明治の石頭 テル
脳細胞少し淋しい物忘れ 慶子
頭数揃えて文殊の知恵をだし 青銅
頭数だけは揃えて来た抗議 たつみ
ライバルへ頭一つ出た靴の減り 久
頭の中に消えては宿る思慕のひと みね
石頭唯我独尊耳貸さず 遊光
留守番を頼むと犬の頭撫で 清芳
頭だけ下げて心の無い返事 哲静
暗算で頭の病い量られる どんたく
果箱からひなの頭がのぞいてる 静子

春の陽へ頭がのぞく落の臺 勝美
頭ごと鰯を食えと学校医 一花
もう一つ頭をやりたい受験の子 素身郎
頭の話はとつても嫌なベレー帽 しげお
閃光のようひらめきが来た頭脳 早苗
脳天へペリリときいたねり芥子 雀踊子
辻仏ペダル踏みつつ頭下げ 遊峰
頭から及ばぬ恋と投げている 鉄治
頭割りだからしつかり飲んでいる 正子
孫可愛やたとえ頭は悪くとも 倫子
うっかりの言葉が頭にこびりつき 美代子
頭では分っているがだだをこね 文
三代の暖簾を守り頭が低い 雄々
税務署へ下げる頭を刈りに行く 多織
頭から足まで見てる女の目 京子
佳
手毬唄頭の底で蘇る 多賀子
逃げ回る孫の頭へシャボンぬり 新造
先頭に立てば孤独の風に逢う 正坊
混乱の頭に欲しい換気扇 白峰
空っぽの頭で人の愚を悟り 高夫
人
受験期の神は頭痛を訴える 達子
地
頭からかぶった布団の中で泣き 兼治郎
天
夫の機嫌へ話の頭がまだ出せぬ 高子
軸
つめ込んだ頭脳をそつと持ち上げる

触れる

大林曲 hands 選

体験に触れた言葉にある重み 悦子
薄氷小さな靴がそつと触れ 恵美
胃カメラよつとやさしく触れてくれ 保州
胎動に触れてしあわせかみしめる 静子
できるなら私の鼓動に触れてみて 素身郎
涙腺に触れると女らしくなる 三五島
触れてみたい花は高嶺で届かない サワ子
触れるまで二重底だと気がつかず 美代子
新しい命にふれた母子草 公一
路のとう土の温みに触れている 小鹿
お通夜の話遺産にふれてくる 満津子
友情のぬくさ古傷には触れぬ 重人
手で触れる距離が心をなごませる 智加恵
琴線に触れる恩師の思いやり 暁明
触れられてのちのひそかなもの思い あやめ
母の背の温もりそつと触れてみる 弘朗
雪を割る春の息吹きに触れてみる どんたく
情なしの風が古傷触れに来る 遊光
正論を吐いて上司の勘に触れ 一乗
触れないであげる私と同じ傷 京子
人情に触れると弱い涙壺 知恵子
本物に触れていのちをいとおしむ 可住

仏の目に触れて抜け出た長い闇
 典子
 さりげなく触れて本心確かめる
 白漢子
 今更に触れてはならぬ蝶の過去
 テル
 そのことに触れると貝になる女
 正坊
 触れ合いがとても嬉しいおじぎ草
 佳雲
 意地悪い風古疵に触れたがり
 柳五郎
 いい酒になって本音に触れてくる
 芳水
 ポツクリと友逝き触れる白き花
 軒太楼
 本當の答に触れた影法師
 雀踊子
 弥陀の掌に触れてひととき愛を知る
 雄々
 ブライバシーに触れてはならぬ夕鴉
 宵明
 触れないで下さい完熟しています
 美子
 一線をひいて触れない花の芯
 純子
 素晴らしい触れ合いでした愛でした
 正敏
 住
 お互いの誤植に触れて笑い合い
 ちよ
 エンゼルの寝顔にそっと触れてみる
 倫子
 愛の手に触れると鈴はよく響く
 多織
 仏像に触れると消える罪ひとつ
 清芳
 古傷に触れるわたしの絵をはずす
 和子
 触れた手に仄かに燃えて来る命
 玉恵
 地
 好きだから触れたい胸のふくらみに
 螢
 天
 一寸触れぬくみの残るパンを買う
 文
 軸
 欠点に触れず互角のお付き合い

座
る

平田実男選

子と対話座れば同じ目の高さ
 早苗
 モウシマセンと畏まってる膝小僧
 寿美
 座に合った人が座って恙なし
 元江
 流行のズボンで膝が耐えきれぬ
 満津子
 香を焚く仏間へ孫も来て座り
 和子
 窓際に座って人の心見え
 良
 一笑にふして座してる太っ腹
 軒太楼
 正月の妻は座っておれませぬ
 理恵
 床を背に座る男の太い眉
 智加恵
 栄転の椅子へ左遷が来て座り
 悠泉
 好きな時好きな所で猫座り
 良江
 また座り直し女の長話
 宵明
 聞くことが上手な母の座りだこ
 螢
 正座して平成を記す日記帖
 都姫子
 母と娘が座れば話長くなる
 螢
 大仏が座っているから落ちつける
 辰江
 疑惑撒き針の筵に座る羽目
 高夫
 福助の正座のれんは色褪せず
 寿美子
 安泰は祖父が上座にいてくれる
 辰江
 許すことはかりに慣れた座りだこ
 正坊
 ロボットの座ったあとに温みなく
 呼風
 リビングに座り自分の顔になる
 正坊

最後まで味方の顔で座ってる蘭正子
 座る場が温くならない母の席 ちかし
 君が代が鳴れば座っておれぬ主義 高明
 ドッコイショ立つも座るも一言言 英美子
 税務署の座り心地の悪い椅子 博子
 末席に座れば見える人の糸 治
 代議士の椅子に座ると眠くなる 雄々
 なでられる高さで座る石仏 京子
 座ブトンが深く意見をのべそこね 克子
 母さんのそばへ座ると何時も春 テル
 頂天に座って疼く古い傷 鉄治
 座らせて酒の肴にさてあわて さと美
 内緒話と一緒に座る好奇心 緑良
 編棒がせわしく座ったまま返事 知恵子
 座ってばかりいると胎児がノックする はるお
 住
 笹竹の前に座った日の惑い 高明
 雛壇に座ると出来ぬかくれんば 正敏
 すし混ぜるそばに亡母が来て座る 多織
 頂天に座ってからの孤独感 山久
 座ろうか立とうか震度3の揺れ 美代子
 人
 出稼ぎの父の座ぶとん干して待つ蘭正子
 地
 老夫婦他人のように座ってる 敦子
 天
 老婆の座る間のない息子の帰省 白峰
 軸
 まだ座るところが決まらぬ婿養子

初歩教室

題 — 卒業

阿 萬 萬 的

今月の課題「卒業」に対して、皆さん方の大学生への見方がこんな風になっていると、学生さんからの反論が厳しく来るかも知れませんが、

学卒と思えぬ誤字の公文書

誤字当て字卒業証書が泣いている 志 重

卒業とは名ばかりの大学生 真 一

(卒業とは名ばかりの大学生の文字)

学卒がこんなクイズも字も知らぬ 保 夫

(卒業へまだ常識にうといまま)

卒業が出来ないかもと電話くる 敬

マンガ本卒業せずに持ち歩く

アルバイト馴れた頃には卒業期 照 子

麻雀も習い大学卒業す

(麻雀パチンコプロ級大学卒業す)

ロボットが卒業証書持つて行く 隆 雄

ロボットが卒業論文書いている 富 恵

(ロボットが卒論まとめて書いてくれ)

そして、こんなこともあります。

学生結婚卒業待たずに子供出来

(学生結婚卒業待たずに子を孕み)

卒業と一緒に嫁を連れて来る

卒業を待つて一粒種が嫁く

卒業を待つて卒業の日取決め

(卒業を待つてたようにする卒業式)

卒業に肩荷おろした親と子と

兎に角も卒業しての話なり

卒業を待つ親心子は知らず

卒業を済ませ身に合うスーツない

ネクタイで卒業式の晴れの顔

(スーツとネクタイ卒業式の晴れの顔)

田を売ったことは卒業まで言わぬ

巣立ちゆく新車と共に卒業生

(卒業早々クルマ新車に買い替える)

卒業をしたがやっぱりカネオクレ

卒業の晴着最後のすね嚙じり

女子大卒晴着へ親の手を借りる

こんな事をあんまり書くとかられるかも。

そこで卒業式のことなど振り返って

卒業式祝辞祝電通り過ぎ

母さんのおしゃれ気になる卒業式

(卒業式母のおしゃれを気にして)

卒業式涙も見せぬ現代っ子

卒業式涙の乙女右左

露 芳

遊 光

み ね

一 乗

芳 水

照 子

織

松次郎

しんじ

正 子

三津江

多 織

芳 枝

勝 美

和 子

志 重

美 子

ミツエ

(女生徒だけが泣いて卒業式終る)

卒業式涙拭くのは母ばかり

親だけが泣いて卒業式終る

娘卒業母も弁当作り終え

卒業生晴着の肩へ花吹雪

女子大の卒業式は明治調

学舎が小さく見えて卒業す

卒業をしたら色っぽく匂いたつ

(卒業したらとたんに色っぽく匂う)

卒業に呉れた釦の謎解けず

卒業は日記に書いたさようなら

卒業で少女のような夢のあと

(卒業で少女の夢ともさようなら)

カブセルを埋めて卒業百年後

(卒業記念のカブセル未来を語り合い)

ともあれ女子大の卒業証書は嫁入道具で

披露宴卒業校で見直され

どこ卒でも花嫁修業出来ればね

嫁入りへ卒業証書の顔がきき

さて卒業をしてみと、

卒業まで内定通知気にかかる

卒業をしても帰らぬ子の進路

大卒も人生道の一里塚

(卒業は人生街道一里塚)

卒業の名簿が商社から電話

(卒業名簿で早々D・M届けられ)

菊 枝

多 織

喜代子

三津江

金 吾

金 吾

好 笑

信義

正 子

美美子

章 久

太一郎

登 代

喜 園

美 子

三千子

喜与志

美 子

美 子

美 子

美 子

美 子

美 子

美 子

美 子

ライセンス又一つ増え卒業す

良三

(ライセンスが増えた丈です卒業す)

卒業証書いろいろと持つ不倖せ

つえ子

運命線卒業からの岐れ道

信義

屋台曳く大学卒のいい親爺

繁男

(大卒で社会へ背を向け曳く屋台)

ここらならず親の意のまま卒業す

すみれ

(親の意のまま卒業しました一人っ子)

卒業して社会人になってみると

二次会も卒業生で顔が利き

太一郎

(二次会へ卒業同期の顔が利き)

卒業の訓示は今も胸に抱く

静子

反抗期卒業生の柱傷

章久

卒業の記念樹見上げて同窓会

和子

(卒業記念の樹へ同窓の顔を寄せ)

禿白髪卒業記念影もなし

しづ子

(卒業写真に面影がない禿白髪)

卒業写真半分鬼籍の友惚ぶ

サワ子

さて卒業にもいろいろありまして

敬

女もつ卒業したと枯れすすき

露芳

お色気は卒業仕事は孫の守り

治

もう男は卒業したわ大ジョッキ

円女

(男はんは卒業したと言う女将)

衝動買そろそろ卒業いたします

圭坊

また、遊びの方でも

極道の卒業高い授業料

極道を卒業して夫黄昏れる

サワ子

飲む打つ買うみな卒業の丸い背な

みね

ギャンブルももう卒業の年になり

信一

年金の暮して遊びはもう卒業

保夫

(年金暮しよきなく卒業した遊び)

多織

入院で卒業出来た酒たばこ

義

嫁と姑の仲の卒業も、やがて歳月が解決してくれて

嫁の座を卒業している暦

芳枝

(嫁の座を卒業しました指の荒れ)

姑へ気兼ね遠慮は卒業し

艶子

もめ事も卒業しました嫁姑

義

子育ての卒業の頃にはいろいろと

小鹿

果離れの噛まれた傷を忘れない

英美子

子育てを卒業をして病い知り

方子

(子育てでも卒業そここ痛み出し)

時弘

卒業のない主婦の座で子を案じ

老人大学

子の卒業待つて老後の設計図

遊峰

そして今、カルチャー時代です

遊光

も花ざかりで

一乗

息子の理解もあつて老大大卒業し

好笑

老大の卒業淋しい春の雪

宛先

(老人大学卒業春はまだ寒く)

趣味講座卒業せぬままもう五年

阿萬

人生は卒業がない夢航路

萬

ここでもろもろの卒業ですが、

バソコンは卒業したと笑われる

ダン吉

(この齡でバソコン卒業笑われる)

甲子園の星卒業はスター並み

金吾

(スター並みに甲子園の星卒業す)

職人に卒業ないと日々励み

繁男

(職人に卒業はない指の皺)

ロックもつ卒業したのか静かなり

義

小中高卒業で変るお年玉

勝美

卒業証書自前で渡いた和紙の里

勝美

そして、最後は老後を楽しく

とく子

(喜怒哀楽卒業しましたフルムーン)

明吉

古稀迎えそろばん卒業遍路旅

富恵

(社会学卒業遍路の旅に出る)

世渡りは卒業しました喜寿の春

職

人生の卒業忘れた高齢化

最後の句としてはちと淋し過ぎましたかね

ではまた、来月を期待しています。

題「坂」

3月10日締切(5月号発表)

ハガキに5句以内

4月10日締切(6月号発表)

宛先 千588 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬 萬

「傘」

阿萬 萬

宛先 千588 泉佐野市中庄一〇八一—九九

阿萬 萬

阿萬 萬

阿萬 萬

阿萬 萬

阿萬 萬

阿萬 萬

阿萬 萬

阿萬 萬

阿萬 萬

阿萬 萬

阿萬 萬



高橋操子さんを悼む

平成元年1月29日 歿

告別式 1月31日

貞徳院慈温操薫大姉位

弔 辞

西 尾 栗

謹んで、平成元年春まだ浅き今日、川柳塔参事、岸和田文化協会顧問、岸和田川柳会会長、故高橋操子さんの御霊前に悲しい別れの言葉を申し上げます。

あなたは、肝っ玉母さん、岸和田の大姉御、親分、女傑、女丈夫とあらゆる賛辞をもって川柳界の皆さんから慕われてきた、ものわかりのよいおばさまでありました。

あなたは昭和六年九月に始めて川柳界に入り、五十有八年の長きにわたり、我が国川柳界につくされた功績の数々は、枚挙にいとまありません。

昭和五十一年岸和田市久米田寺に、ちっぼけな善意でもよし心満つ

の女性として、関西で初めての句碑を建立されました。

同五十三年十一月句集『千亀利』を発刊され、同五十八年六月十五日より五日間、市民ギャラリーで、操子川柳作品展を開催され、売上金の内百五十万円を文化会館建築費の一部に寄贈され、五万三千石の岸和田城下の文化発展に貢献されました。

また昭和六十二年第二句集『万年青』を上梓されましたが、まことにユニークな句集で自分自身の句は兎も角、岸せん新田同人七十名の句も載せられ、尚その上に岸和田文化祭川柳大会の出席者四百五十余名の句も採録されるという広い心の句集でありました。

曾ての句碑の句
ちっぼけな善意でもよき心満つ
を表に

大地の恵み太陽と握手する
という句を裏打ちした、あなたの広大無辺の温かい心は、永遠に我等川柳人の胸の奥深く

生きていくことでしよう。

あなたの御霊の前に、こうして佇つていても、誰彼の別なく、好き嫌いなく、常に温かい手をさしのべて、岸和田弁丸出しで、ニコニコ話される庶民性豊かな「そのことは、わたいにまかしときんかいな」という声なきこえてくるようです。

あなたの代表句

お身ぬぐい大佛さまのお手に乗る

という句がございますが、いよいよ今度は、

如来さんのお手に乗られることになりました。何回かの生命の峠を越えてこられた、あなたの不屈の精神を、この世に施されたあなたの陰徳はきつと、極楽浄土への長い道を坦々と展けていることと思います。

そこには、路郎先生を初め沢山な川柳人がおられることでしょう。

「わたいも、来たんやして」と、気さくに句座に待つて、楽しい句作に耽れることでしよう。では、操子さん、やすらかに眠り

下さい。さようなら、もう一度さようなら。
お浄土は梅一輪のあたたかさ

操子会長の思い出

植山武助

「おばちゃん」「武さん」と呼び合いながら三十七年間、親子、姉弟のようにつき合って頂いていた。亡くなったなんて、人間一度は亡くなるとは決まっています、この人だけは……と思っていた。実に不思議な本心に夢のような気持。

二十八日、悲報を受け、病院へ駆けつける。ベッドで寝ておられる姿は眠っているよう。

「おばちゃん、おばちゃん」と顔をさすりながら呼んでみたが……。

土生町の実家へ帰って、何時もの場所の床へ寝かされた。悲しみがまた溢れ出た。今後家へ訪ねても、あのにこやかな顔に接する事が出来ないと思うと悲しい。

生前の操子さんは、岸和田市文化協会の副会長として長らく文化に貢献され、現在は顧問として後輩への協力をされていた。また賑やかな事が好きで、沢山の友達と混じり、笑いが何時も絶えなかった程です。そして気前のよさ、面倒見のよさは、誰もがご承知の事と思います。

食べるものにしても、見るものにしても、自身がやってみてよかった事は、私達にも味わせてくれる。ある所の食事がおいしかったと思ったら私達や話された方達を連れて食べさせてくれ、おいしい菓子などがあればそれを沢山買ひ込んで分けてくれる。何時もこんな具合でした。ドライブが好きで、娘さんの幸代さんの車でよく一緒に貰ったものです。歩く事がちよつと困難でしたから、車ではならぼんな所までも出掛けられた。そして帰りはおいしいものを、馳走になって帰る事など度々であった。物事を頼んでも「よっしゃ」と軽く胸を叩いてくれ、嫌と言う事を知らないお人でした。思えばつきない色々な事柄、大黒柱を失った私達の今後はまっ暗です。お通夜の三十日、家から葬儀場の寺への途中、回り道して句碑のある久米田寺へ寄って来ました。暖い午後、句碑の前で柩を開け、「おばちゃん句碑やで」と頬を撫でながら呼んでみた。今にも笑い出し、話しかけるような暖い顔にまた涙が出る。

「貞徳院慈温操薫大姉位」となられた。

これからの「きしせん」、おばちゃんの居られた時のように華々しくは行けないまでも続けて行く事はおばちゃんへの恩に報ゆることだとして、頑張りたいと思いますので、よろしくご支援の程お願いします。

おばちゃんの行く雲の峰は晴 武助

合掌

操子先生を偲んで

原 さよ子

操子先生から「川柳をなさったら」とお誘いを受け、岸和田川柳会へ出席させて頂くようになったのは、昭和五十四年五月、私が学校を退職してから事です。何も解らない私に解りやすく励ましなら、それはそれは熱心に指導下さり、その熱心さにはただただ頭の下る思いでした。

先生はきつちりしていて、邪まな事は大嫌い、慈母のような温い大きな心で私達を包みお付き合いをすればする程、偉大なお人柄でした。先生は折りあることに、「人間は死ぬまで勉強や。正しい人間の道を歩み、真実の句を作らねば川柳している価値がない」と諭され、ご自身も身をもって実行され、数々の名句を残していられっしやいます。

また「私はご飯より川柳好きやな。川柳のお蔭で生きる力湧いてくるんやで。私から川柳とったら何も残れへん」と根柢から川柳を愛していられっしやいました。

せいたくをしたのと活ける胡蝶蘭
花のいのちへ万障くり合せ

緋もっせん甘酒があり京の梅
の句にあるように、先生は花が大変、お好き

でした。花が咲き出すとじつとしておれず、よく出かけられました。特に京都が好きで、私もよく一緒に過ごして頂きました。先生とのお付き合いは十年足らずでしたが、思い出は尽きません。日がたつにつれて、先生の偉大さが身に沁みております。私達は先生の教えを胸に刻み、力を合せて頑張つて参ります。どうか先生、安らかに眠り下さい。

操子さんへ

藤村 女

操子さんの葬儀へ列席して遠い日の出合を思い、胸のいたみをおぼえながらベンを取る私。操子さんとの出合は、三十数年前にもなります。もうこんな年になったのだと、つくづく胸をしめつけられる思いです。路郎先生ご夫妻の紹介で潮花さんにお目にかかり、潮花さんがお世話をしておられた婦人友の会に入れた頂きました。その時、遠くは四国や岡山から、近くは篠山と大阪、京都から参加した四十数名の友の会で、一番先に紹介されたのが操子さんでした。

月一回の本社句会でお逢いするくらいでしたが、初対面からさっぱりしたお方で、いろいろと家庭のお話や呉服のお店を持つておられることなどをお聞きしました。そう言われ

れば、どこかどっしりとしたお姿に重みを感じさせられました。ご主人を亡くされたばかりの時でしたが、少しも暗い影がなく、川柳のお話を聞かれましたが、その後もお商売や子育ての話で息が合い、私も負けられないと必死でした。また、呉服の展示会の都度、招待状を頂き、大島や紬、八坂帯などを安く頒けて下さり、これからも身につけるたびに操子さんを思い出すことでしょう。

路郎先生亡き後、『川柳雑誌』から『川柳塔』になって友の会も終止符を打ち、みな川柳塔の同人となって今日に至りましたが、操子さんは岸和田川柳会の創立者として励まされたことは、みなさんご承知のとおりです。

いろいろと立派な足跡を残された川柳界の女傑は昨年、路郎實に輝き、いつまでもいつまでも私たちの胸から消えることはないでしょう。操子さんさようなら。

極楽へ旅立つ友へ数珠を繰る

女

別れ

児島 与呂志

操子のおばちゃんと最後に逢ったのは、昭和六十二年の路郎先生一十三回忌・葎乃先生七回忌・生々庵先生一周忌の追悼川柳大会で

した。はるばる高野山まで参加されたおばちゃんとし振り手に手を取り合って話すことは同じ、『川柳雑誌』の頃にお世話になったお礼や昔々のことはかりでした。普賢院での操子さんの句

福寿草しずかに咲いた床の鉢

光明寺の句会の後、たまにお供した南の灯を思いながら、高野山での話が最後のお別れになってしまいました。

十歳の年の差が今でも私には嘘のようで、操子さんはえらいえらいおばちゃんだったのです。私も足が不自由になってから、ふと今度逢う時とは思ってしまいます。『千亀利』から操子さんの句を三句

泣いていては家族みんなが食べませぬ
借金があるから自殺など出来ず

こうやって行けます亡夫に手を合わせ
さよなら、操子のおばちゃん。

幸せを沢山分かち逝き給う

与呂志

くすの木3周年記念句会

とき 3月2日(木)午後1時から

ところ 摂津市総合福祉会館3F和室
宿題 「窓」岩井三恵選・「景色」西

会費 川景子選・「草」森中恵美子選
一般参加費300円



長野文庫氏のご逝去を悼む

月原宵明

川柳塔「自選集」に愛媛から三人が出句している。大洲の米澤曉明氏、今治の長野文庫氏と私で、ともに『川柳雑誌』時代から麻生路郎師との因縁によって今日まで、五十年以上の長いおつきあいである。

その中で最も熱心で勉強家の長野文庫氏が五十七年に脳血栓の大病を克服したにも拘らず、昨年十一月以来の不調から抜け出せずに入院加療中、平成元年一月二十日黎明、腎不全により行年八十六歳を以て幽明境を異にしたことは、誠に悲しみに堪えない。

思えば昭和七年渡辺晩童氏（後川柳雑誌社勤務、現愛媛在住）らと吹揚吟社を創設、翌八年川柳雑誌今治支部を結成し、昭和十年支部二周年記念大会には麻生路郎師を迎え、前田健師の後援を仰ぎ、記念川柳大会を開くなど心に残る初心時代を過ごして以来は、いちずに川柳の道に精進するばかりであった。後に昭和二十四年汐風川柳社創立に当っては主役を勤め、幸いに本業の古書籍店の文学社（年中無休）が今治市のほぼ中央に在った

ため、本社事務所と句会場に提供し、主宰者として朝から晩まで川柳の普及振興と柳人の溜り場としての犠牲を払い、現在の汐風の基礎を培ったのである。

文庫氏は温厚篤実、真実一路の苦勞人で、「イヤ」と「駄目」は生涯口にせず、他人の信頼に応え、働くことと川柳を総てとして、たいていは店の真ん中で何か書くか、読むかしていた。

頼まれると色紙・短冊を気易く書くが、句作に何ら苦勞せず、水の湧く如く、流れる如く、極めて自然に容易に句が生れるようである。そして人情の機微と世相を軽くタッチするなど、苦勞人文庫氏の独壇場であり、水墨画に秀で、個性豊かな絵を苦もなく描いていた。

その昔、中国大陸を放浪した体験があり、大阪で塗料および船具店などの住込店員をしつつ、夜間中学を修学するなど、青春時代の貴重な苦勞が温い文庫調に潜んでいた。

現役作家としての活動のほか、十数年の間

に足繁く各地の図書館へ、更に県内各地の先輩川柳人を訪問し、文字どおり心血を注いで編さんした『愛媛川柳の流れ』全五巻は、昭和四十八年から六十一年にかけて刊行し、極めて貴重な川柳文獻として高く評価され、愛媛柳人の必須の蔵書となり、またこの他句集および句画集五編を精力的に発行された。

昭和三十七年再建された愛媛県川柳文化連盟（会長参議院議員仲川たけし氏）に乞われて副会長に就任して今日に至る長い期間、愛媛県の川柳文化の向上発展に貢献した。

よって如上の種々の功績を認められ、昭和五十八年文部大臣表彰を受けられたが、その榮譽は当人の喜びのみならず、全柳人のよこびにはかならないものである。

県全柳人は文庫氏の川柳功勞に対し、顕彰について考えていたが、偶々汐風川柳社が創立四十年を迎えるに当り、その記念事業として郷里である越智郡菊間町岡岡地区公園に、句碑建立を発表したところ、約四百人の協賛を得て昨年十一月十三日、句碑除幕式を挙行了た。

ふるさとの素顔にこころ洗われる 文庫

桜咲く頃も一度笑顔で見て欲しかった句碑。ご苦勞さんでした。さよなら文庫さん。

合掌

本社
二月
旬会

二月四日（土）午後六時

メンズファッションセンター

二月旬会は、「平成」最初の本社旬会。暖冬の中で珍しく訪れた寒波の中で開かれた。

おはなしは吉岡美房氏。三十五年間の長い警察官生活の一端を述べ、連日の新聞を賑わす警官の非行が、エリートコースから落ちこぼれた三十歳代に集中していることを指摘、オチは「川柳をやっている警官ならあんなことはしなへん」。お知らせは、武庫坊氏から紫香氏の尼崎市文化功労賞受賞記念川柳大会、三男氏から和歌山市民川柳大会について。

月間賞は、しばらくふりで元氣な顔を見せた高杉鬼遊氏が獲得。

(正)

(進行―柳宏子) (受付―みつ子・いわゑ)

(記錄—射月芳・月子)

出席者・笛生・敏・佳秋・杜的・武庫坊・年代・悦郎・柳安子・福本英子・すすむ・憲太郎・千秀・みね・芳子・太茂津・柳伸・勝美・萬の・幸・女・狸村・栞・三男・紫香

しげお 凡九郎・美房 公一 正坊・颯云兒
白溪子・隆二・重人・冬葉・あいき・庸佑・
満津子・典子・タン吉・英一・章久・喜風・
章・柳太郎・射月芳・仙吉・鬼遊・文秋・は
つ絵・楓榮・智子・東雲・恭昌・頂留子・藤
子・昭子・美代子・薰風・度・寿美子・小林
英子・雀踊子・岳人・月子・利武・吐来・史
好・寿子・寿美・美智子・いわゑ・みつ子

席題「比べる」

川島諷云児選

比べないことにしている老いの幸
本當の値打ち比べているクルス
見比べて結局安い方を買う
比べると財布の紐も迷いだす
ヒーナスと妻とを比べたらあかん
またしても高倉健に比べられ
見比べて結局小さい方にする
すれ違ひ一瞬女は見比べる
兄ちゃんと比べられてる通知表
駄馬は駄馬なりにライバル視野に置き
兄姉が秀才ばかりで疎まれる
見比べるとけがついてる子沢山
比べるとみなちよぼちよぼの飲み仲間
ジャンケンで負けた指先見比べる
比べては少し惨めになってゆく
バストヒップを比べ負けたなとおもつ
すれ違つ晴着へチラと射す晴着
意識して身装比べる女の眼
比べたら僕の負けだと知っている

勝美
柳伸
紫香
度
正坊
鬼遊
庸佑
武庫坊
福本英子
柳太郎
寿美郎
雀踊子
重人の
萬代的
年代
幸
芳子
白漢子
隆二

ライバルの指のダイヤを盗み見る
相席のうな重を見てまた迷い

比べものにならない一億からの字

ロボットと人間比べないように

犬と猫どっちがエサ代やすいやろ

姉の例もあると比べる結納金

我慢くらべがまだまだ続く夫婦

比べてもおんなじ最初の柄を選ぶ

比べたらあかん隣は議員さん

お隣の旦那がステキに見える日も

比べたらきつと後悔するだろう

お隣の芝生ばかりへ蝶が行く

本物と一緒に見たら負けになる

岩下志麻と妻を比べたことはない

お隣の亭主と比べないように

すぐ比べる女に欲な業がある

現実とドラマを比べないように

負けるのが嫌で並ばぬことにする

比べるのは止そう自分がみじめに見える

人事課がそろそろ比べだしている

よその嫁はん褒めると機嫌悪い事

見比へるまでもなかつた棒グラフ

席題
卵

松川杜的選

神様もきにいけずな無精卵
 焼くコツがまだ掴めない卵焼き
 石切さんの坂を転がるゆで卵
 酒飲まぬ人が疑う卵酒
 ねぎトロもアワビも飽きたタマゴ巻き
 柳伸
 柳伸
 諷云児
 福本英子
 文秋
 柳伸

榮養はどれだけ違ふ無精卵
疎開地の卵に涙した日記

押入れで金の卵がすねている
どん底の暮して卵ありがたい
たまご焼ひとりの母を恋しがり
卵からかえる広い空だった
立春に一度はたてて見る卵

産卵の涙せつない波のおと
浮世とや四角の卵落ちて
卵もつ子が喜ばぬ年になり
白色レグフオン少し卵を生みすぎる

雑音のなかを転がるゆで卵
血圧に又いらまれた茹卵
目玉焼くずれた朝の無言劇
ライバルに卵のバックで差をつける

バーゲンの目玉にされている卵
生みたての卵かき根からもう
蕎麦より鷹になれよと抱く卵
受験戦争金の卵がしこかれる

レパートリー僕の得意は目玉焼
立春の卵メルヘン秘めている
卵でも食べて元気を出しなはれ
迷い続いて静かに立てる寒卵

むかし昔の卵の値打知ってるか
将来のスター夢みて卵抱く
蛙の卵へ分校の子の眼が揃い
とても温い卵と逢った春の森

産直の卵につめてある民話
かあさんの話がつづくゆで卵

勝美 憲太郎 岳人 昭子 しげお 重人 柳度 柳伸 楓楽 利武 美代子 寿子 重人 寿美 恭昌 射月芳 千女 隆二 太茂津 楓楽 利武 芳子 年子 典子 萬的 悦郎 憲太郎 藤子

たまご焼き幸せそうに食べている
弁当の定位置にある卵焼き
平凡な暮らしが好きな卵焼
王子様が待っていたのは目玉焼

卵に指定席がある冷蔵庫
無精卵きつと謀叛を抱いている
お得意の料理と聞けば目玉焼

兼題「跨ぐ」

吐田公一選

跨いでも跨いでもまだ越せぬ父
もう二度と跨ぐことない家を出る

広域に跨がるホシを追いかける
ライバルを跨いだつもりが先こされ
跨ぐのに高い低いのある敷居
母の海跨いで子等は遠く住む

フルムーン故郷の空を一跨ぎ
この川の幅が二人に跨げない
ひと跨ぎで来たわけでない今の地位
冬銀河あつさり跨ぐ雪女

跨いだらあかん罰当ります飯の種
水溜り跨ぐ若さを羨まれ
島を跨いだ橋が情けを消してゆく
島またぐ橋のドラマと生きのびる

今の幸跨いだ屍忘れまい
戦争を跨いで生きた深い疵
子宝を願う祈りの石跨ぐ
溝ひとつ跨いで消したわだかまり

自立するおんなひとつの溝跨ぐ
生き残るためと跨いで行く他人

月子 庸佑 隆二 冬葉 冬葉 寿美 杜的 荒介 隆二 英一 すすむ 章久 いわゑ 吐来 幸 文秋 度 章久 柳太郎 芳子 柳伸 満津子 芳子 小林英子 みつ子 寿子 頂留子

第12回

鳥取県川柳大会

日時 3月26日(日)午前10時開場
会場 鳥取県岩美郡福部村
鳥取砂丘センター
Tel(0857)22-2111

兼題

(JRR鳥取駅から砂丘センター行バス約15分)
「遙か」 森中恵美子選
「いちご」 長谷川博子選
「頼む」 林 瑞枝選
「カード」 和井 観洋選
「砂」 恒弘 衛山選
「日曜」 小西 雄々選
「無理」 江原とみお選
「味方」 森田 熊生選
「味方」 尾崎 泰山選

席題

当日発表 尾崎 泰山選
各題2句 締切り12時

会費

※昼食は各自お済ませ下さい
出席 一、〇〇〇円(作品集呈)
投句 一、〇〇〇円(3月15日必着)

懇親会費

二、〇〇〇円(希望者のみ)
投句先 千680円 鳥取県岩美郡国府町
宮ノ下二七四一一 宮脇銀嶺方

第12回鳥取県川柳大会実行委員会

鳥取県川柳作家協会

蛇跨ぐわたしの決めた道だから

水たまりまたぐ外なし冬椿

やがて息子が跨いでくれる溝さへえ

Uターン跨ぐ敷居が高すぎる

敷居跨ぐと男いくきの顔になる

跨ぐなと言った敷居で親が待つ

八方美人両方跨いでいる孤独

七転八起ひと山跨ぐ虹に会う

水たまり跨いで虹に逢いに行く

歩道橋またぐと違ふ恋の風

敷居跨いで敵の渦中に入る歩幅

北方四島跨げる位置で待っている

子煩悩に跨がれて跨がれて

子のためになるなら跨ぐ火も水も

敷居跨ぐともう八人目の敵が待つ

愛一途太平洋を一跨ぎ

時を跨いで一本の縄になる

男を跨ぐたびに女は脱皮する

地球儀を跨ぐ若くて長い脚

椰子の実が海を跨いで来る平和

海峡が跨ぐぬ北の父の墓

兼題「瓶」

佐藤藤子選

牛乳瓶に挿してる花は枯れてない

胸こがす想いを溜めている花瓶

溜息を詰める小びんが棚にある

空瓶がゆうべの続き喋りだす

酒の瓶悲しい時も栓を抜く

ヒロシマを無言で語る溶けた瓶

満津子

栗

螢

妻子

いわゑ

章久

昭子

みつ子

正坊

栗

吐来

笛生

薫風

楓楽

武庫坊

敏

荒介

楓楽

瑞枝

狸村

公一

藤子選

妻子

憲太郎

柳伸

月子

いわゑ

芳子

米搗いた瓶の記憶が消えやらぬ

ビー玉が夢を引き出すラムネ瓶

真婦ひとり小瓶ぐらひは空けられる

ボトルにも雅号気安いママだから

まだ一寸残った瓶が棚にある

善意の小銭が貯まる瓶の底

ハンカチで固く包んだ薬瓶

インク瓶書きたいことがまだ書けぬ

宴会の後は淋しきビール瓶

空瓶の底に溜っていた不満

ラムネ瓶昔のことをしやべり出し

そぐわない花瓶があつて落着かず

母ちゃんの夢がふくらむ哺乳瓶

瓶細工の毬にかあさん生きていた

本当は真冬が好きならビール瓶

泣き言をとくときこぼす魔法瓶

化粧瓶いっぱい並べ暮れなすむ

娘のくれたボトル人形が睨んでる

空瓶に菊一輪の無縁仏

薬瓶さげて逢いたい父に逢う

ポケット瓶はなせぬ父の旅ごころ

一升瓶掲げて甚敵来てくれる

菊挿した瓶がトイレをなごませる

奥さんに言えない瓶を買ってくる

花のない花瓶の底に溜る冬

残り香を大事に春を待つ花瓶

空瓶に暮しを少し覗かれる

空瓶が並んで飯場雪続く

快方へ花瓶の水をかえている

重人

武庫坊

千秀

凡九郎

冬葉

利武

みつ子

利武

芳子

しげお

恭昌

正坊

年代

佳秋

楓云児

楓楽

章久

萬代

年代

柳伸

三男

白漢子

満津子

楓楽

憲太郎

柳太郎

武庫坊

隆二

一輪の花を挿したい瓶がある

少年にたちまち還るラムネ瓶

とっておきの瓶をあけさすい話

一輪の野草を飾るくすり瓶

乳液の瓶に呪文をかけている

瓶のふた妻がねじるとすつとあく

香水の瓶に女の自負がある

兼題「住所」

岩本雀踊子選

家建てたらしい住所の字も踊り

いっしょくたにされて迷惑する住所

高血が住所のメモを持っている

名刺には住所入れないことにする

住所不明と賀状が戻る都市砂漠

明治から変らぬ場所です鳥と住む

住所録あゝ一人減り二人減り

新住所教えられない訳がある

お住まいはここかと住民税がくる

うかつにも住所教えて火傷する

北に住み誰も恨まぬ屋根の雪

恩人の住所は暗記していません

節分の鬼には見せぬ住所録

未来図の住所は月の一番地

愛の狩人住所不定の男です

年賀状書くたび住所の変る友

花嫁の実家に同居という知らせ

雪うさぎ今の住所で消えてゆく

ふる里へだんだん遠くなる住所

住所録から恩師が消えて寒に入る

紫香

鬼遊

美代子

鬼遊

智子

度

藤子

月子

憲太郎

耕花

螢

年代

武庫坊

佳秋

隆二

千秀

みね

メ女

重人

幸

いわゑ

敏

典子

あいき

千代

隆二

三男



毎月25日締切厳守。一人一句、雅号を含めて20字まで。
担当・玉置重人

川柳はびきの(前月分)

塩満

敏報

ミナミには芝居パチンコ食い倒れ
毎日の散歩欠かさぬ回復期
散歩道 妻がゆつくり行けと言う
懸命に抵抗すイヤリング
散歩道 孫が見付けた一つ星
終点へ来ても答えがまだ出ない
失恋の悲しさ知ってるイヤリング
三日病むと世間三日の変わりよう
点火せぬ火種を抱いて恋終る
イヤリング 噂話がおもしろい
女です壇輪もつけてるイヤリング
修業僧 観光ガイド板につき
遠い娘の声を聞きたくなる夜長
来客の話に花が咲く夜長

良い話まとりそうなる床の菊
趣味一つ強い味が居る余生
終りです一升ビンの底を見せ
イヤリング 揺れる心も華やかに
かりそめの恋を拾った散歩道
秋雨に恋の終りが見えて来る

蛙 敏報
健 三
ダン吉
志 洋
たけし
シメ子
利 武
淑 子
泰 子
伴 子
悦 子
一 枝
絢 子
キミ子
ケイ子
昇
美津留
胡 村
一 屯
吐 来

フルムーン炎の恋のなれの果て
倉吉川柳会(前月分) 渡辺 敏
足の長い彼が垣根をこえてくる
垣根越し自慢の味が行き来する
お日様はご機嫌布団干しまくる
気象庁空の機嫌で飯を食う
善人の積んだ石垣崩れなう
垣ごしに見るだけの花許されよ
ご機嫌な姑が聞かせる童唄
仲直り出来た垣根を低くする
ボーイ捨ての缶は機嫌の悪い音
年の暮れ俺の財布は紙のよう
青空の高さが人の機嫌とる
ご機嫌で戻ったらしい隣の戸
甘い水探しあぐねた年の暮れ
川柳後案(前月分) 井上柳五郎報
片減りの靴が無言の父の地図
人生はほどほどで良い夫婦独楽
ボケッてでだんだん重くなる火種
気がよくてすぐに火種になる女
やりくり上手な妻の箆筋に種がある
特種に火花を散らす報道陣
水裏の深さへ溜めていた秘訣
円満な秘訣は婦唱夫随です
産み分けの秘訣も知らず子沢山
死火山の威厳 不発のエネルギー
エネルギーが仇となつた足
駅長は汽車を送つてから欠伸
改札に欠伸を一つ置いて去に
乗り越しの欠伸は隣の県へ行き
潤いが欲しくて汽笛聞きにゆく

敏 敏
京 子
さつき
よしえ
康 子
とめ子
寿満湖
秋 草
ゆり子
御 前
次 男
秋 人
柳 風
独 歩
桃 風
博 友
やすえ
義 親
紫 峰
典 子
哲 郎
秋 月
青 銅
敏 路
照 路
吟 平
文 平
草 風

からっぽの心へ潤い老母がくれ
潤いを持たぬ職場の寒い風
潤えば義理も人情も生き返り
翼なら何とかが行けそう虹の橋
愛を知るとても臆病になる翼
天国の母に会いたく翼買う
空想を生きるドラマの余白入れ
七色の世界多情な乙女燃え
空想の空想あなただの彩で舞う
川柳泉尾
襟足に木枯ししみる交差点
苔蒸した石碑民話を語りつき
電話より葉書にしようボケ予防
いわし雲わたしは嫌い走りべべ
産声に母の誓いの尊さよ
神前に誓う言葉に夢も入れ
大空へ誓えば心広くなる
乱れ髪 映画で晶子嘘をつき
ちよっとした風の悪戯乱れ髪
トレッドの噂乱れるシーズンオフ
年の暮れ九千万の夢の列
何もせず暮れてしまった日曜日
燃え尽きて山は静かに暮れていき
新しい明日のために日が暮れる
来年へ夢をもちこず年の暮れ
偶像が一つ崩れて年暮れる
崩し文字パイオに教える歳暮先
戦時で女盛りを棒に振る
美人より可愛い女と言われない
八人目の敵は女の通せんぼ
行列が乱れる闖入者はおんな

進 進
金 吾
たけ志
かずを
美智子
拓 治
柳五郎
浄 美
健 一
敦 子
きよ子
良 子
伴 子
淑 子
白水
トミ子
美南子
途 子
悦 子
あさこ
和 子
美代子
はつ子
三千代
美津子
きよ子
文 子
靖 子
美 子
弘 子

ひかえめに明治の女強く生き
母を越え一人の女として巣立ち
鈴足に女が匂う乱れ髪
美しく老いた女の紅い紐

川柳藤井寺

赤木

和子報

身代りの秘書に大臣手を合わせ
新芽吹く鉢は窓辺の陽をもらい

志洋

今日も無事暮れたと仏に告げて寝る
冬の陽の弱くて解けぬわかまり

スミ

未来像消えて場末の縄のれん
昭和史を閉じて未来を模索する

治子

耐え抜いて忍という字を糧とする
一口が十返ってくる妻に耐え

吸江

掌に僕の未来の地図がある
未来よりこの足元がおぼつかず

美房

木枯しに色増して来る吊し柿
明けの鐘まだそば出来ぬ忙しさ

三郎

寒椿 心に消えぬ影一つ
ホットン灯抱いて耐え抜く胆を決め

作秀

宇宙船 未来は恋の橋渡し
風紋の一つは捨てた恋の傷

昭子

初氷 朝の珈琲濃く淹れる
千本釈迦堂 大根たべに杖ついて

美代子

花芽の未来信じて耐える冬樹林
まだ二歳 未来はみんな君のもの

敦子

除夜の鐘テレビで聞いて老夫婦
言い聞かす言葉に耐えて妥協せず

喜道

木枯しにマフラ編む手も急ピッチ
列があるとにかく並ぶことにする

ふゆ

芸人の端くれ耐えて自負自嘲

信子

初枝

和枝

婦美枝

与呂志

末一

政代

伴子

祐二

赤提灯ここだここだと呼んでいる
下積み耐えてつかんだ今の地位

シマ子

行末はコンピュータが子供産む
地球儀をクルル未来の明と暗

三世

銀行に借りがあるのに歳暮来る
年の暮おでんついで政治談

昭美

ときめきを押さえ待っているベルの音
木枯しは赤いもみじが好きらしい

志洋

忙しいだけで儲けのない特価
紅白の終わりに響く百八つ

スミ

雀にも馬鹿にされてる一人ぼっち
今を耐えれば必ずやって来る夜明け

治子

久世川柳クラブ

二崇

吟平報

打たれても覚悟の針にもある痛み
宅急便おふくろの味連れて来る

山子

もう十年生きのびたいと竹を踏む
夫婦さす傘なら雨に濡れるとも

明子

労ればこんなになに育つ菊の花
井戸堀の政治家遠き夢のゆめ

静人

乱れとぶ噂の中を強く生き
三世帯洗濯 母はたため分け

保恒

愚痴こぼす相手なくとも日々達者
点滴の一つ一つに乘る命

藤江

点滴の落ちる速度が気にかかり
赤ちゃんを泣かせる予防注射の日

雅紅

血管をはすれて痛い注射針
この着物縫った昔がなつかしい

江正

雑巾でも縫うておこうか炬燵守り
勘忍の袋の口を確と縫い

吟山

ほころびを互いに縫うて夫婦もの
愛すると言わず手縫いのプレセント

ひろ平

みゆる

紀子

昌子

寿美子

つお

初代

美佐

よう女

松亭

秀伸

城北川柳会

神夏磯典子報

吉野山 昔を偲ぶ舞扇
許される範囲で独楽の芯が舞う

輝子

波の花舞う海原へ切るシャッター

テルミ

胎動に胸ふくらませ縫う晴着
進歩した医学傷口小さく縫う

ふさえ

出稼ぎを待てる果樹の袋かけ
クリスマス サンタの袋に子笑顔

半仙

賢沢な暮しを嘆くごみ袋
生きたまり母のなさが落ちていた

美恵子

ふきたまり母のなさが落ちていた
薬よりくすりになった見舞客

光心

堪忍袋八年有余の紐ゆるみ

伊久栄

赤絨毯踏みめ主役の音がする
兵馬俑 男はみんないくさ好き

千代女

父として白いページを子に遺す
休耕田 墓石の声を聞き流す

賀平

玄関で妻の微笑がおそろしい
人生に悪友という宝物

つゆ草

自慢にしても風呂敷が大きすぎ
遠くから見ればのどかな柵の中

市郎

生涯を母が語ると深い雪
もたれたらつかい棒の要る男

邦郎

白光子

博子

寿美子

恭太

智子

はつ絵

雪月

佳句地10選 (前月号から)

春城年代選

紅唇が大の男を狂わせる

悔しさをじつと啓耐えている

啓も毒舌幫助の罪と罰

冬の使者白鳥が舞う北の湖

早起きの散歩枯葉が舞って散る

御両家の愚痴を呑み込む御仲人

唇も昔恋人今他人

新春にと育てた千両鳥が食う

ブランドを買うより母の手編み服

天寿まで争いごとをしたく

猿回し猿は正月知らず舞う

我が髪の霜ふりてまだ鬼のすむ

チャンネルの演歌にひたる老い一人

夕急ぐ背に安らぎの灯りあ

出稼ぎの伝言を持つ渡り鳥

山村の流れの如く地唄舞

国会が舞い上ってるリクルート

舞い落ちる紅葉にもある悔いの色

ドライブの車内で啓奪われる

粉雪が舞う日友は別れゆく

舞い納め友の姿を刻んどく

空くじが舞って今年も除夜の鐘

更生を誓うやさしい目に出逢い

イブの灯を消して今年を振り返り

悔いの無い余生舞いたい冬の

手料理の旨い間は無い喧嘩

親も子も哀れや豊かさ故の罪

秘書居らず株券も無い気楽さよ

霜除けへ見事に咲いた寒牡丹

ことごとと母の味噌汁 霜の

霜の朝早起きをする用もなし

ふみ 寿美礼 新一郎 白峰 佐津乃 閑石 登美子 温陽 静子 千恵子 トキワ きくゑ 典子 八重子 秀夫 とみ子 午郎 敏子 みさ子 純一 公一 静歩 達子 ただし 倫子 右近 陽子 ふさ子 満津子

川柳塔きやらばく 政岡日枝子報

蛇の子よ父は龍かもしれないよ
冬眠の蛭じつくり毒を貯め
蛇の通る道にも花は咲いている
藁の蛇森がだんだん遠くなる
恋人になれなままだに蛇いちご
殻を脱ぐ蛇の真顔が見たくなる
大蛇でも酒に命を捨てました
蛇の子よお前も母とはぐれたか
蛇よりも長いものには巻かれよう
その時は蛇になつても渡り切る
不意に立ち上る蛇神の使者かも
理由あつて蛇の形で生きてます
なぜ嫌う蛇もだんだん人嫌い
みよちゃんが見ていて蛇が恐くない
牙が抜け世相にういて蛇とい
いびきの蛇と来世を語ろうか
蛇が悪いイブもアダムも言いました
寒くなると蛇の真似して穴を掘る
抜殻は風に晒して越冬の蛇
ごく普通な水でだれにも好かれてる
傷ついた浮輪は水と遊べない
水底で祭りはやしが鳴りやまぬ
水葬の金魚きれいな虹になれ
タンポポは土橋が渡り切れずいた
吹く風に噂話が立ち止まる
うしろから吹かれてどこへ行く旅か
いつの日か食事しましょう話しましょう
いつからか死んだふりする冬のバラ
つまずいた石にいつかは礼を言う
川越えて今日もポストへ逢いに行く

富美子
花子
いてい子
時子
晶子
みと里
八重子
日枝子
とも子
玲子
朗子
ふみ
亜弥
より子
やえ
瑞枝
正子
千代
荒介
あい子
恵子
千春
一江
智加恵
田鶴
寿々子
夕子
由美子
文世

風も吹かぬに今朝も山茶花散っている
昔話をするのはダムに沈む橋

川柳高知 川竹 松風報

別居中窓から笑う丸い月
親友の別居話が身につまる
別居したわけはお酒に聞いてくれ
別居して他人の顔になってゆく
横顔に惚れて連れ添う四十年
年輪を顔に刻んで母達者
出世欲自分の顔は持ってない
中年の魅力 美貌はもう追わず
新春を迎える髪をセツとする
木枯しと恨気比べの庭掃除
今更にのってしまった口車
秋風が吹いて寂しい愛の曲
残菜を温めなおして妻の昼
東大をすべり友達らしくなり
万歳の中に半分敵がいる
よいかもはないかと電話証券屋
脇役でいい良妻と呼ばれてる
親馬鹿を笑う者には笑わせる

川柳東大阪 森下 愛論報

孫四歳するさ覚えた隠れんぼ
子の絵本狐はずるい役まわり
どنگりの群れからぬけたずるい奴
反対をしたのは弱者ばかりだな
町内に古来の反対聞くゆとり
思いとは反対を引くあみだくじ
反対も割れて鳥合の衆にさされ
反対を素直に聞いて夫婦坂
居こちが良く大学に長くいる

恒子 菊野 稔夫 一求 かず子 佳風 朱坊 とみ子 淳玲 和興 俊重 高和 竹萌 春枝 松風 勝美 孤舟 湖風 章隆 喜風 雅風 晋吾

三分がこんなに長い砂時計
立ち話影が三十五度動き
百歳の先は役所が齢数え

見せまいと涙に潤む目のやり場
涙には弱い男と読まれてる

とても長い紐の先にあるいのち
張り手よりこたえた母のため涙
判一つ押せば物言う紙になり
白紙委任あわてても遅かった
私生活紙屑籠にあげられる

岸和田川柳会

植山

武助報

残り火は水仙の香に負けられぬ
何も彼も疑惑疑惑で暮れる年
癖のある書体に父の顔がある
宅急便送り故郷の声を待つ
情けない我が身を笑う妻の留守
旅一座情けを置いて峠こす
生命線長い花道みぞれ雨
バーゲンで得したように買いあさり

腰曲げた安来踊りの竹人形
まだ茶殻時く母が居る大掃除
岸和田弁出て来て心通じ合う

他人から見てと何でもない事で
一杯の酒で謀反を搞んでおく
賀状書く手もためらいの筆の跡
情の強い妻が日記をつけている
くすりより食事療法すすめられ
叱られた孫の逃げ場は祖母の膝
お祈りをかなえてくれた家原寺
十二月また愚かにも時が過ぎ
酒蔵の活気は杜氏の仕込み唄

庸 佐
覺然坊
百合枝
しんじ
慶三
白兔
頂留子
柳宏子
恒明
雅士

喜久子
すみえ
ことう
狸村
ゆずる
寿美子
加代子
春栄
希久志
浪速子
さよ子
勝晴
一弥
通彦
ダン吉
富志子
武助
みのる
初太郎
白光子

よこしまな愛ためらいの中で燃え
冬枯れの庭に彩添う千両万両
川柳塔からつ佐志教室 浜本

土壇場で消えた男を許せない
カミソリのような男で友がない
墨客は白紙の上を掃くように
夜のママ仮面のようにバック塗る

初詣で髪のかたちも見せてくる
寒月のあり暁と間違えり
減酒して孫らに送るお年玉
初詣で神も徹夜で願ひ聞く
来るべきがきて改元の「平成」年
吉日を選び交通事故に遭い
絆深くおんなの地図は変えられぬ
平成元年一日違いの新しさ

川柳わかやま

牛尾

一つの字を書く筆先が揃わない
矢印を来たのに落とし穴がある
嫁った娘の部屋広々と冷えている
一枚のショールで残り火を庇う
一物も飾るものなしひげをそる
一枚の蔦が散りたわ考える
四捨五入 一になりたぬ靴をはく
涙腺の弱さへ一言足らぬまま
ソロバンを弾くと一が浮いてくる
一人きく太平洋の波の音
火の小指すべて一からやり直す
一言の助言が彼の道を変え
山荘の白一輪の新鮮さ
おはようの声へはぐれたわだかまり
朝の光に落人の里煙立つ

義美報
百万両
ちよ
万亀子
民坊
順子
冬子
喜久夫
紫泉
紀一
治幸
三枝子
義美
緑良報
紫香
桂香
光代
幸
英男
裕美
紀久子
公子
稚代
美枝子
寿子
信子
好笑
武雄
萬的

甘平
ひで

平成の朝浄めの雨静か
矢面に立たせて女よく眠る
矢印をなぞれば亡母に似た運命
矢面に立たせるための秘書である
白羽の矢立って老骨やる気出し
白羽の矢飛んで来そうで身構える
花束の中の一矢が凍らせる
錆びた矢を溜めて昭和の御代閉じる
光陰矢ばつばつ風化のきのこ雲
不覚にもキューピット奴の矢に射られ
キューピットの矢ならいつても飛んで来い
矢表に立つて力量試される
虚勢張る男の隙へ矢は向けぬ
広やかな神の御前へ夢買いに
心だけ広々としてただひとり
視界から陸地が消えて怖くなる
逃亡の川があまりに広すぎて
広々としすぎて目標見失う
バラ一輪ある日女を迷わせる

川柳化粧檣
植村客遊子報

酒追加 我慢はなしの続き聞く
熱いのが御馳走というどん喰う
年頃の娘を持って日が早い
古里の新芽 珍味として届き
正論にクレームつける但し書き
編笠が邪魔な美人も居るおけさ
真っ白にふきん洗って今日終わる
小石にも城を支える顔がある
コーヒーへ右へならえて喋り出し
不器用な男フライングばかりする
念仏を唱えて揺れる耳かざり

柳宏子
信秋
結実
照穂
瑞穂
紀美女
千寿子
英子
忠雄
克子
登志代
大茂津
隆積
三男
豊太
正博
緑良
岳詩
紅月
秋月
越山
葉香
白李
輝月
大鷹
礎石
悲子

風景画見て来た桂林甦る

落葉たき草の香がなつかしい

姑の持つ宝 質草にもならず

正月のフランを風邪が皆こわす

明日の日を信じ夕飼の水入らず

真つ赤な実つけて南天雪の傘

筋道を通したいから意地を張る

泣くまでは待てず乳やる若いママ

電話待ち時計はつきり気にしてる

恩師もう怒ってくれないクラス会

三幸川柳教室 桜井

潮時を待とう弁解抱いて寝る

弁解は右へ習えのりクルート

弁解をすれば他所から煙立ち

弁解をすまされそうでない事態

弁解が上手になって世帯じみ

弁解のとどのつまりは金がない

弁解は部屋に酸素があるうちに

弁解はせぬが無念の喉仏

弁解にまわらぬ口をとがらせる

折詰に弁解させて高軒

ギクシヤクと生きて半ばで油切れ

油汗などは知らぬと秋の空

油切れ屋台で軽く補給する

病名を悟られそうな油汗

油汗枯れて吊橋まだ半は

ゆうゆうと鳶油掲見せにくる

油気が抜けたというが色気あり

油買う金もなかった立志伝

省みりや給油の癖が抜け切れず

とし

みつこ

サワ子

遊光

遊峰

永楽

瑞穂

悟虹

客遊子

千秀報

千枝子

幸子

啓

育子

正好

正夏

朱二

みね

一郎

定枝

昭枝

忠昭

幸子

可笑

千秀

宏

力

隆行

花あぶら失うものが多くなり

ふところにスト忍ばせている団交

調理場で団体客に点をつけ

六三三飛び出す勇気置き忘れ

やつと昏擲うて帰るバスツアー

団体のなんとせわしい旅日記

団体の旅を抜けて月といる

団体の列に紅葉が仲間入り

制服の列とまた会う古都の秋

集合の美学砂丘の風が画く

子宝が団体で来て賀寿の宴

暖かい輪に入りたい赤い羽根

初孫の息あたたかく頬にふれ

初対面どこか波長があいそうな

初春を祝う小雪が松に舞う

最初から無かったことにして別れ

初デートそんな昔もありました

初対面 顔も名刺も角があり

サユリスト自認しててもう初老

川柳塔唐津支部 久保

門燈が見えたら酔いが深くなり

妙薬の一に数えて屠蘇を酌み

煩惱を断つのに刃物探してる

心頭で発した怒り妻有む

喧騒の街を見下すアドバルン

お正月今年はバスが来ぬ

正月や過去と未来の分れ道

松飾り外して昭和の御代惜しむ

静岡市川柳同好会 永倉

古里の味噌汁匂ういい目覚め

芙美子

晏

カツミ

和子

三千子

当代

高夫

良子

靖子

金子

愛子

純子

玉枝

桂香

鉄治

保州

孝子

智水庵

高明

正敏報

四郎

虹江

旭恒

朴竜

幸夫

タミ

正敏

僕川

柳川

ライバルのスランプにまた意欲燃え

振り出しへ戻れば温い風に遇い

酷使して修理の効かぬ手足腰

初雪に単身赴任の身を案じ

孫抱いた妻に按摩をせがまれる

ほんとうの事はバツジをとって言い

七五三の子算聞いてみる

一円も無駄にすると教えられ

気休めに効くか効かぬか飲む甘茶

ぴんぱけの昔の写真捨て切れず

独り居を騙した夜の空つ風

百段の中途で気付く身の無謀

気付くのがいつも遅くて後悔し

仲人は雨も縁起と褒めて言う

参観日うしろ向く子を目で叱り

息抜きの苦の手習い肩が凝り

怒るのも怒られるのも愛のうち

川柳はまでら 井上 喜酔報

一八旅 残月悲しい京の宿

盃の数が重なる旅の宿

行く前に早や疲れたり旅支度

砂と山シルクロードへ旅したい

黄昏のロマンを包む旅の宿

忘却へ優しい旅の隠れ里

誘われ旅で若さを取り戻す

旅先で重いストレス脱ぎ捨てて

一泊二日あつという間の夢の旅

打吹川柳会 江原とみお報

矢張り金か女心が判りかけ

本当のわたしが写る水鏡

雑草と闘い疲れやつと冬

弧秀

晃授

猛士

金吾

紀代志

芳男

正雄

たき

たま

つね

きん

まつ

静代

三津子

久子

千代

房江

たかし

治虫

千流

凡兵

峨峨

源五郎

宙宙

泰平

喜酔

巡歩

蒼流

寿美子

地蔵講代々つづきジゲ栄え
 柏手の二つで決まる願いごと
 門松とツリー立場を話し合い
 会者定難いつか止つていた時計
 此の頃の犬振り向かぬ黍団子
 ワルになり切れなかつた胸算用
 国民の喜ぶことはせぬ政治
 リクルート季節はすれのカブの花
 女子大という酌取りとうまが合い
 美しい夫婦日課にある散歩
 プレーキがきいてマニアにまだ遠い
 大物の秘書はどうまく金もつけ
 近道に大きな犬の放し飼ひ
 心因症わたしはほしい診断書
 語り部として戦の怖さ子へ孫へ
 指先に昔があつて食い違い
 叩かれた悔いからもらう力瘤
 故里を踏めば霜まで温い
 お天氣の都合次第で旗を替へ
 牡丹雪春咲く花をゆり起こす
 手土産の底に野望がうなりおり
 子供会のひょうしき夜の心打つ
 石地蔵何も言わぬ夜がありがたい
 けんたいき鸚鵡の方もけんたいき
 川柳ささやま

吉朗 妻映 雄々 雀踊 宗晃 早苗 節子 善政 温子 柳風 紫泉 正朗 芳子 典子 邦俊 梅朗 三和 弘朗 とみお 可住報 百合子 千代子 法斎 エキオ とみ子 靖子

苦勞かけた子が一番の親思い
 大胆な彩でまとめる母の詩
 手強い姑まとめる嫁のしたたかさ
 論文をまとめて海が風いで来る
 個性ある苗木を母の手がまとめ
 婿養子三年経ては癖を出し
 老いらく波長が合つて愛の鐘
 正直な仲人で話まとまらず
 幸せの塔は苦勞の上に建つ
 子の寝顔 寡婦の苦勞がとけてくる
 子の苦勞見守る母の瞳が温い
 寺の鐘きこえる町に住む安堵
 八尾市民川柳会 飯田 悦郎報
 好かんけとついでに握手するマダム
 集金と言わずそで来て来たもんで
 立つたついでと妻が用事言いすぎる
 出張のついでに降りた無人駅
 君と僕ついでなどあるはずがない
 西成の隅でついでに生きている
 そこに居ただけでついでに叱られる
 御先祖のついでに参る無縁墓地
 買い物ついでに入籍を済ます
 世の流れ笑つて渦に逆らわす
 母と子の生活に春の来た笑い
 お正月孫が笑いをつれて来る
 暖味な笑いで返事延ばされる
 笑わせる舞台の裏は涙つば
 笑わせて別れるイブの街はずれ
 世を渡る七つの笑顔使い分け
 錆つた噂が残る回り椅子
 噂など耳栓をして寡婦の自負

テル 文平 ヒサ子 和子 富美 素水 ゆうや 金之助 貞子 越山 可住 恒明 シマ子 庸佑 幸子 湖風 信治 夕花 美千子 雅風 二三 とみを 雅士 節子 覚然坊 吐来 三男 てる子

噂から本気になっている二人
 噂ではすごい美人にされている
 ティーカップふたつ噂へうとくなる
 だけに社内人事は噂だけ
 僕ただけにだんだん噂つげ
 あなただけあなただつて噂つげ
 メイキャップはがすと謎が透けてくる
 謎解きが下手で話が進まない
 異母姉妹の謎は長らく待つている
 謎のままそつとしいて埴輪の瞳
 ネッシーの姿を風が見たという
 すりガラス謎を少しためて
 掘り返す飛鳥に謎の鈴びびく
 テーブルのメモから謎を生むドラマ
 自慢する訳ではないがと自慢する
 逆立ちをすると自慢が透けて見え
 自慢らしい太鼓に耳鳴りまだ止まず
 自慢の子奪つていった日のいくさ
 さよならの数を自慢にせぬように
 自慢の子その後は聞かぬ落笛
 西宮北口川柳会 松本 一郎報
 なつかしい賀状へ餅がふくれかけ
 八十路越えて趣味に希望の顔の艶
 平成元年の巳歳に遠くなる明治
 手を焼いた子が喜びを持つてくる
 百十まで生きる予定を組んでいる
 来年は金婚というめしの味
 消しゴムのあとに希望が湧いてくる
 恵まれて感激知らぬ子が育ち
 姥ざかりまだまだ捨てぬ希望の火
 激動の昭和史終る寒き雨
 味方にも敵にもしたい人である

山久 重人 月子 朝子 比沙胡 和子 泰 柳宏子 美代子 欣之 一高 宏子 甘平 悦郎 白洋 美幸 律子 一郎報 千世子 嘉矩 春子 宣子 光代 はつ絵 園歩 トミエ 香子 いわゑ

似たもん夫婦大きな福は望まない
 穂やかに時代を告げる春の川
 春近きよこび書から貰う
 夫婦箸揃えて恙なく暮れる
 福もらいお参りしたらスリにあう
 感激は風雪に耐え吹く新芽
 忌が明けて母も笑顔を取り戻す
 感激を一粒の涙飾つて
 正論もよいが傷つく人がいる
 感激へ綴帳ゆくりおりてくる
 冬木立春まで福をあたためる
 何げなく母が話したあの言葉
 喜びに老母の眼鏡はすぐ曇る
 老兵を泣かせる梅が咲いて散る
 面の掌で握手重なる涙つは
 終点まで乗るのか毛糸編み出した
 感激の受賞へ傘寿のえびす顔
 何かある鼻唄まじりの裁ち鉄
 大器晩成希望の花も手に入れて
 明日開く水仙飾り眠ります
 一粒の種に希望をかけすぎる
 乾杯の中で感激ひとり占め
 振り袖がゆくり渡り交差点
 離婚した理由を他人は解きたがる
 紅白は見ない独りて燭をする
 今年こそ糠よろこびに終らせぬ
 街の花屋で春の口上聞いている
 ロボットに感激のないボナス日
 無沙汰の子スキー場から年賀状
 感激もなく無医村に梅が咲く
 感激の涙は熱くなって落ち

年代
 佳秋
 一二三
 美智子
 保蔵
 紀雄
 笑女
 江美
 正坊
 和友
 金太
 萬的
 よし津
 芳子
 英子
 三男
 杜的
 伊三郎
 てる
 メ女
 白漢子
 英子
 風云児
 京童
 圭坊
 恵美子
 柳影
 一郎
 三笑子
 眉水

どの指もいのちを抱いて弾んでる
 感激をかみしめ煙草の輪をふかす
 希望の灯消した灯台などはない
 肩書を外した日から旨いめし
 感激は迷路を抜けた風に逢い
 考えておきます希望消えてゆき
 走馬灯の早さで昭和がかけめぐる
 辻の花屋で菊の残りを嘆かされる
 寒行の僧一列に五条坂
 結ばれた日から希望の積木つむ
 感激の涙は上を向いている
 金持でないから希望湧いてくる
 感激のどよめき去って無に還る
 よろこびを隠しきれないプロポーズ
 記念樹にこめる希望とよろこびと
 はてしない希望の夢はむらさきに
 漫然とよろこべぬことだである
 真打ちの扇子は江戸の火も借りる
 曾孫に浮き足揺らぐ老夫婦
 彼できた日増しに奇麗でない
 年賀はがき郵便局で年を越し
 自己紹介他人行儀年顔になる
 合鍵をもらって感激無いデート
 ポケットのメモに従う市場籠
 晴れやかに初荷の旗が街を行く
 娘の笑顔老いをまさらず下足番
 赤ちゃんも赤ちゃんらしい意地を見せ
 感激へ涙が先に出て困る
 大原川柳社
 娘や孫が帰りゆくり見る賀状
 ほろ酔いも許し給えよ初春の酒

実
 栄
 東角
 正一
 定人
 花村
 美幸
 作二郎
 みつ子
 御前
 勝美
 だし
 桔梢
 みね
 蜜拙
 敬
 善太郎
 高子
 市雄
 六郎太
 陽露子
 保州
 信義
 千秀
 森生
 紫春
 芳仙
 紫香
 妻報
 小林
 玉恵
 みづえ

初賞与孫が土産を買うという
 とぐる巻く蛇に似たよな三ヶ日
 初春の音で尼僧は通りすぎ
 冬眠から覚めるとビール恋しがる
 飛ぶ夢を見て冬眠から覚める蛇
 巳の歳へゆくり冬眠を出来ぬ
 初春の平手に温い神参り
 初光り平和をはこぶ陽が昇る
 ワークプロで羽織袴という賀状
 恙なく家族で祝う屠蘇の膳
 年輪を一つ書き足す春の筆
 歳女陰しい坂に身構える
 ノロノロと今年も昇る老いの坂
 まっ白な家計簿へまずお年玉
 姉妹の晴着うれしい初詣で
 初笑いいっぱい残し娘等帰る
 黒髪の端まで執念蛇となる
 初賞与孫の土産の温いシャツ
 あんた誰そんな変身してみたい
 年の功父が器用に樹を倒す
 にた川柳会
 葉の落ちる柳の道で逢いたいな
 大事故が起きたらしいと茶の間から
 宝くじこつちとみたと振つてみる
 悪知恵が湧いて自分を見失う
 零細な自給農家で生きまなす
 クラス会話は老いの事ばかり
 デートして帰れば猫が媚いて寄る
 彼の山で手まねき父が呼んでいる
 霜の朝の雀はさすが黙り込み

辰子
 宮子
 智泉
 理恵
 元江
 妻江
 悦子
 たけよ
 喜美子
 巴子
 正己
 幸子
 敏子
 睦子
 こふゆ
 寿恵子
 正子
 あすなろ
 耕花
 節子
 ちづ
 弘幸
 重一
 由郎
 忠子
 夢酔
 哲三
 巡歩

さし出した茶わんに嫁の温いお茶
スランブを溜めてマンガを見ている

近頃の日本ゆさぶる株汚染
円差益取り込んでいる人は誰

咳一つなくしんみりと更ける通夜
托鉢の笠の下なる美少年

天高く馬肥ゆる無く雨の秋
夢枕お経連打て目が覚める

天気図の中に明日のプラン組む
古くさいところはあるがいい親父

掘こたつ女四人で花が咲く
お隣は又留守宅急便が来る

私の余白で蛇を飼うている
宛先をポストの前でたしかめる

人柄に鍵のかかった紳士録
甘ざけに清酒加えてあたたまる

鶴よりも優雅な舞いでプロポーズ
古井戸を覗くと深い秋の空

耳掘って嘘ばかり聞く十二月
胸を突く言葉おんが酔っている

京都塔の会

松川

秋を着て帯もきりりと若返る
今日の終りに石焼芋の笛を聞く

息詰めて勝つ女が歩く回り道
息詰めて後姿を追っている

酔い醒めて神妙になる交番所
原稿紙妻の寝息を聞いて書く

息抜きをさせてくれない棒グラフ
すこやかな寝息は母の子守歌

石仏も息をしますフラインダー
息切れのする坂道で過去を捨て

雪代

紫泉

花子

秀子

裕女

晴月

多賀子

登美也

雪子

鉄花人

舞美子

弘朗

愚童

雄々

雀踊子

紫叻

早苗

白李

幸

武庫坊

水客

芳子

飛鳥

階段で息切れをして歳おもう
ミレーの絵この静けさに息をとめ

木守柿遙かな秋陽恋しくて
遙ける日本人に伊勢がある

遙かなる古里思う冬林檎
父母の遙かな昔の世なエピソード

木簡で遙かな昔の世を覗く
古墳から遙か昔の音がする

遙か昔の汚点が今もついてくる
愛憎の影追いかける裁ち鋏

裁ち鋏目出度い日取りへ急かされる
裁層に母の思い出手内職

裁ち鋏祖母が使うと手際よい
娘の晴着裁つ幸せをかみしめる

負けぬ気のおふくらんだった裁ち鋏
高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報

屑拾い万円札を腹に巻き
屑箱に女の吐息すてである

屑野菜いれた豚汁好評で
星屑の綺麗な空がなつかしい

糸屑をとつたら背中叩く妻
母の手にかかると糸屑生え還る

花屑の地に還るとき蝶が翔つ
平家蟹と言われ赤ちや今美人

雪の音聞きつつ蟹の身をせせり
蟹を売る老婆の肩に雪が舞う

蟹の身をせせって爛が冷えてくる
人妻がそつと指輪を外すとき

人妻の帯に一矢秘めておく
人妻のいいところは目目に映り

あとけない顔で人妻嘘みたい

美智子

麗水

英子

紅陽

正坊

求芽

圭坊

佳秋

年代

ただし

白漢子

文子

紫香

榮

のり子

美智子

人妻と隣席しますバスツアー
人妻の噂のれんで煮えている

憂い顔した人妻とすれ違つ
人妻が鏡を拭いて出るパート

猫の好きな人妻が買うカレンダー
この道を小旗埋めめた過去がある

年金の持つ白旗に染みがある
行幸へ旗振った日の遠い雲

風向きを見て白旗を掲げておく
人情が絡んで反旗振りにくい

手旗振る踏切番がいる故郷
旗色のいい方につく小判鯨

星条旗に守られてきた幸不幸
日章旗遠慮しがちな揚り様

君が代のリズムへ日の丸素直なり
定年がくれば古里恋しがり

能面の笑みが哀しく舞う調べ
円高も株価も遠く聞く暮らし

師走早々葉ボタンで買ってくる
無口の孫そつと土産の長寿箸

橋出来て島の娘が派手になる
高望みしないが駄馬の荒い息

ちよつと吹いて子にタコ焼を渡して
あいうえお覚えて孫の初便り

外人に頼まれシャッター押した寺
寒肥の椿の根元しかと踏む

否応なく事務に余生の五つ玉
爪を切る 孤独が音もなく弾く

氷山の一角私が石を積んだとて
人間ドック 口の達者な人と違い

核家族でも正月料理のメモをとり

花代子

房子

百合子

作二郎

泰弘

正坊

上志子

越子

諷云児

榮

佐代子

暢子

行平

杜的

節子

文子

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

裏門の鴨居で頭打つてくる
 楼門にまだ僧兵の息づかい
 七人の敵を試練とする門出
 門松を立派に立てる高利貸し
 門を出るいつかは果し親を胸に
 羽根のばす顔が揃った縄のれん
 不揃いで当て字もあつて老母の文
 アリバイを揃えて男風になる
 不揃いな湯呑みであくびしてる午後
 不揃いな母の手編のあたたかさ
 三人も揃うと大きくなる話
 冬の寺子供四五人遊んでる
 再婚の悩みの種は子供連れ
 育児法通りでモヤシの子に育ち
 隣から年始子供がついて来る
 手に余る子供が秘めた可能性
 母の背の温み忘れぬ子に育ち
 子供部屋 親の知らない地図がある
 四季巡る森に子供の夢がある
 絵日記へ母のない子が母を画く
 紙めても紙めてもお多福恰にいる子供
 子供た月よりもなお遠くなる
 冬の句に風花が舞う草城碑
 口笛が吹きたくなったよい便り
 田舎のオッサンと分る背広で初詣
 逆転はなかった師走の暦焼く
 冷蔵庫入り過ぎても落ち着けず
 尼崎尾浜川柳会
 日記くり若気の至り汗をかく
 三日まで何とか書いた日記帳

しげお 芳子 正一 保蔵 作二 文郎 一 河 伊三 三郎 芳子 紫香 曲ん手 白浜子 春子 定人 諷云児 美智子 杜的 静夢 かね子 久美代 萬歩 園 年代 春城武庫坊報 いわお 保蔵

芋粥を喰つたと日記書いてある
 日記帳四五日溜めて書く日ふえ
 一行に愛が燃えてる古日記
 出初め式梯子のぼりも年をとり
 繁忙の騒ぎ納まる除夜の鐘
 感激を詰めたポケット温かい
 四代を生き抜いても尚母達者
 山茶花の散つても散つても咲き続け
 にらみ鯛みんなに見られて目をそらす
 家計簿に折り目をつけて初詣で
 おでん屋の暖簾ぐぐらす向い風
 それぞれの個性で和む大家族
 松の内巾旗の街は静かなり
 約束をする体調崩れだす
 神前で長寿祈つて畏まり
 足腰をきたえた長寿の祝い酒
 巡りくる千寿の春に生きのびる
 嬉しくもまだ働ける長寿の船
 孫曾孫数が判らぬほど長寿
 サークル檸檬 藤田 泰子報
 脱皮してみたい気もする蛇の年
 にせ物の珠も心で光ってる
 かたことのすぐ覚えるコマシヤル
 蛇とかげバツグ草履で格をあげ
 覚えたてに使つてみたいカタカナ語
 おぼえ書き持たずに辻をうろうろと
 平成へ曲玉が継ぐ平和なり
 覚えてる味とは違ふ芋の蔓
 川柳たけはら 森井 菁居報
 サンタさんボンタンアメくれるかね
 うしろとびはじめてきてうれし
 六浦 敏之 武庫坊 貞吉 澄子 美智子 昌子 美代 弘治 歌子 美代子 向西 定人 寅之助 義嗣 十四郎 夢之助 紫香 千代女 雅子 智恵子 美子 美子 登美子 美緒 泰子 保ゆうすけ 幼典之

きれいなきものをきていきもち
 どんぐり目ちえだけどどんぐり目じゃないの
 庭そうじ朝のとうばん一つすみ
 二重とび二十一回できました
 先生は大学出たからえらいんだ
 大でさえ人の気持がよくわかり
 寒い冬手ぶくろをしていこうかな
 神様はおさいせんでお金持ち
 神様のいる空の上まで行きたい
 嬉しいなスキーが出来る山となり
 寒さにも負けずスボーツがんばるぞ
 決心がつかぬ進学まだ迷い
 初春の海ゆらりゆらりとあるころ
 飄々と生きたしコメディアンらしく
 朱の色で惚れた女と夢を描く
 マネキンのポリにドキッとするものか
 どのグループにも異彩を放つのが一人
 思い出も添えて賀状があたたかい
 老醜のせめてもおいのする石けん
 言い訳を考えている糞虫で
 控え目な私の好きな白椿
 逃げ道を作つてやるも親心
 舞う落葉素足で踏んだ日もあるよ
 一休みすれば紅葉の朝日山
 かくれんばかいたう字がまんま夢を見る
 明日へ向く愛とくいたう字がまんま夢を見る
 年毎に振る鈴の音は同じだが
 アイドルの写真に絶る二浪の灯
 子と孫と見下す富士の大樹海
 静養の気ままを許す置炬燵
 湯上りの鏡へ女よく笑う
 小一歩 美枝 小千枝 小三孝 小三昌 小三史 小四孝 小四裕次郎 小五晴 小五美 小五視 小六由 博 中三貴子 蘭幸 菁居 蓬春 静水 清水 笹舟 政巳 淑子 君枝 喜久恵 浪子 千年枝 俊夫 麻代 静佳 八重美 喜美子 一枝

ヒロシマのプラットホーム鳩が舞う
 ティースプーンゆるりゆるりと憩うひと
 誰だって淋しいのだよ木守り柿
 ふかし芋湯気の向うに亡母をふと
 ジャンケンに孫は注文つけてくる
 雑草よお前のように生きたいね
 ゲートするチームワークの輪にとけて
 よその子の窓の明りがまだ消えぬ
 ふところのヒ首誰にも見せぬまま
 それはそれ今は握手しておこう
 来る年に夢と希望を持って
 マウンドにもう上られぬ五十肩
 本音とはすこし違う電話口
 休日の鬼は一人にたりたがる
 すばらしい専門書です読めませぬ
 きれいいとばかり編んでるレース糸
 気の弱いオオカミならばまだなれる
 菩提樹を植えて仏に近づきぬ
 文明を嘲つ電池のないうちや
 森羅万象おれだけ言うお正月
 空っぽのボトルも混じる飾り棚
 還暦は過ぎても未来図まだ描けぬ
 母さんの手になってきたあかき娘よ
 九時がきて長女はねむり姫になる
 川柳塔まつえ新春句会 恒松

ヤスエ 静風 栄恵 光恵 愛子 千恵 伸子 笑子 房子 節子 令子 貞子 博子 白狐 太虚 比呂子 シゲヨ 新造 一路 靖子 千代美 町紅報 美治 雄々 妻子 清志 山久 操子

定年退職家族微妙に変化する
 家族とは頼りになる頃巢立つもの
 家族待つ今年もツバメ軒に来る
 出稼ぎの父へ家族の良い便り
 切札を疑惑の底で組み立てる
 切札はいつも持つてるポケットに
 切札を使わぬままに冬が来る
 切札が一枚欲しい年の暮
 切り札があり反論の時期を待つ
 聞く耳を持った切札ふところに
 負けて勝つ最後の切札もつ強さ
 切札を使い果たした春の絵馬
 影武者は切札そつとふところに
 運のない背中を冬の陽にあてる
 よい方へ解釈をして運とする
 運悪く出来損いと暮らす妻
 みぞおちのあたりで運が消化せぬ
 二人目も恋愛という男運
 運命の糸があやつる木偶の舞
 運命に泣いたあの日のすれ違い
 茶柱もい運にして朝の靴
 道端に運のひつが落ちている
 すらすらと書く恋文は軽すぎる
 すらすらと女房の問いに答えかね
 天下りすらすら先がよくきまり
 すらすらとゆかぬ女の熟秘権
 すらすらと始末書反省していない
 喝采のない夫婦でも屠蘇を酌む
 里帰り食べてしゃべってお正月
 正月も十日葉牡丹枯れてくる
 正月は逝きし夫の喪に服し

貢範 菊代 弘一 一進 たつみ みえ 寿美子 ちかし 愚童 友子 翠星 鳳人 久枝 博子 静恵 静翁 瑞枝 芳枝 昭二 きみえ 竹雪 小鹿 文子 巡歩 日出子 代仕男 与根一 多賀子 登志子 荒介 雪美

酒の量正月という免許符
 平成の御代も日銭で米を買つ
 平成へ戦の傷はまだ残り
 七草の粥で昭和の暮を引き
 昭和の子平成の子の時間帯
 平成と聞いて気分が若返り
 平成がまだ馴染めない掘炬燵
 翠洋会
 一等賞 鉛筆だった幼き日
 自家製の買うより高いアップルパイ
 答案紙 鉛筆大きな息を吸う
 ガリバー になったつもりで娘りんご
 新元号昭和と生れを老けさせる
 鉛筆画薄くも濃くも彩がある
 雪おろしリンゴの里の人や如何
 恢復期カシツとリンゴ音をたて
 知らぬことは知らぬといえる娘りんご
 しやりしやりと入歯りんごがよく噛める
 続くなら昨夜の夢を早よ見たい
 鉛筆で母の伝言走り書き
 鉛筆も削る手ことがある自己主張
 鉛筆を削る手元のもどかしさ
 雪国の情けにりんご赤くなら
 落書きで鉛筆ちびる長電話
 買物の夢細りゆく消費税
 アップルパイ焼いて孫見に娘にあいに
 仏壇に満張る娘の買うりんご
 豊中もくせい川柳会 田中 正坊報
 鉛筆に手を入れたままこんにちわ
 ポケットに手を入れたままこんにちわ
 ポケットをしらべたよなことを言う

鶴丸 舞姫 長三 米子 静江 町紅 兼治郎 絹子 英一 恭昌 恭昌 美津枝 春子 宏子 良江 東雲 綾子 仙吉郎 みつ子 登志美 光子 いたを 薫風 きく子 寿美子 博史

ポケットに詰つてゐるのは軽い鬱
ボケツトに胡桃が二つお父さん
孫の名と犬をちよいちよい間違える
四十年 名前もわからず同窓会

匿名もとくに祖父が決めている
名もなき僕も言いたい事がある
匿名なら僕も言いたい事がある

これにのきなみに埋もれる砂山か
一番にのきなみに埋もれる砂山か
一番にのきなみに埋もれる砂山か

春一番吹いてのちのお洗濯
一番風呂は父が入ると決めている
母の手が一番温い失意の日

一番で発つ荷へ喪服入れてある
おしゃべりおばちゃん積み残され左レベーター
広っぱで母のいない子が石を積み

バーゲンの値札を見ては躊躇をし
易の灯に人の弱さが集いくる
戦争と平和 一行読んだだけ

はたちの日 孫娘はレンタルでスキー行
板門店 同じ言葉で違う国
見たいものだけを見てゆく京の街

絵看板 駅頭に立て村おこし
旅半ば出会った人とまた出会う
曉 柳

三つ指の挨拶あぐらを慌てさせ
食卓に指で教えし亡夫恋し
マニキュアの指には遠し皿洗う

指運動脳を刺激とクルミくれ
指切りケンマン子供に嘘が言えませ
手の平に指で幾度も教えられ

あかぎれの指が寒波を知っていた
三つ指についてポーナス迎えられ

正坊 薫風 杜的 典子 登代子 とき子 つえ子 路児 富子 しげお 白溪子 萬的 紫香 登志実 武庫坊 主坊 明吉 明光 俊子 隆子 よし子 豊作 豊作 文古 利子 柳香 一眺 和江 たみ

秋雨に指触れ合った傘一本
招かない老いが十指に来て困る
指切りを忘れず孫へ旅土産

難聴は指書きされてやと知り
友達が欲しくて指切りばかりする
指切りで入陽の丘を散るわらべ

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい
爪染めた指の真価を尋ねたい

爪染めた指の真価を尋ねたい

八恵子 珍顔 美乃留 行江 三香 承平 進一 健太郎 滋雀 冬葉 文秋 度 章久 和子 新造 雅風 重人 信治 覚然坊 曲ん手 三恵子 千梢 岩信 滋雀 勝美 頂留子 しんじ 浩一郎 久子 善信 八ル子

理由などないが公園掃いている
神様に理由があつて生かされる
理由など聞かずに要らぬ嘘もいう

通らない理由が通る訳がある
それなりの理由で牛乳ばかり飲む
それなりの理由があつた別れ橋

その理由が話すと傷つく人が出る
隠したい理由が胃袋に溜まる
寅さんの一途へ秋の空は晴れ

一途さは誰にも負けぬ蟻の列
おじいさんの一途枯木に花が咲く
一途の耳を忠告が抜けていく

黒髪の前まで炎えている一途
ギャンブルの一途波紋の渦に居る
富柳会

駄菓子よりおまけが欲しい子供達
夏休み駄菓子も一緒に汗をかき
台風はよそをお通り落語さく

孫掃り台風一過蟬しぐれ
住めば都台風銀座を捨てきれず
裸婦の絵に目もくれず大根盗む飢え

老妻も他人の時はミス小町
見直して欲しい大根葉の悩み
他人から見れば良妻賢母です

いつまでも他人と云うておれん仲
直撃の台風を聞く空の旅
大根を洗う女の指細く

台風は父が残した大きな樹
倉吉川柳会 渡辺 独歩報 千代子 和枝

幸いを入れる袋を持っています
わざわざいをバネに幸いとります

幸いを入れる袋を持っています
わざわざいをバネに幸いとります

幸いを入れる袋を持っています
わざわざいをバネに幸いとります

幸いを入れる袋を持っています
わざわざいをバネに幸いとります

幸いを入れる袋を持っています
わざわざいをバネに幸いとります

幸いを入れる袋を持っています

智子 楓楽 柳宏子 庸佑 柳伸 公一 シメ子 トミ子 萬的 寿美 藤子 恒明 憲太郎 喜風 森子 池 花子 静枝 昭水 智久 富久一 曲ん手 莊次 文次 花梢 岳人 森子

消費税保守王国の景気づけ

子宝で幸せ模様織っている

日めくりをめくりたくない日の想い

新春は遊び心がツノを出し

景気いい会社で昼夜無休です

セリ市場景気よい声飛んで来る

幸いに難を逃れた乗り遅れ

花暦しらずしらずに傘のなか

不景気でうちのカナリや歌わな

青い鳥揺れる枝には止まらない

愚痴は今日だけにしとけという暦

どの部屋も暦をかけて春を待つ

導火線を替えて景気待っている

景気いい男のあとに付いて行く

日めくりを一枚剥いて一日生きる

いつの日か暦をきつと踏み外す

小さな幸せ信じてつむぐ新春の糸

北風が空の財布を吹き晒す

新皇后のきらめきを待つ新暦

幸いか奇蹟か天に句が抜けた

不景気に馴れた財布で湿っぽい

日捲りが瘦せる鱗を焚いている

幸不幸背中あわせに寝て起きる

正月の暦に鬼が泣きに来る

請求書と暦をおいてゆく酒屋

躁から鬱妻の暦は幅広い

銀行の暦を敷いて爪を切る

新春の髪少しフッシュナブルに結う

堺川柳会新年句会

河内

よく変えて来るので安い靴を買う

一肌を脱いで旅立つ葱坊主

月子報

妻	耕	独	石	千	雄	と	瑞	碧	や	ゆ	秋	重	柳	秋	秋	康	か	暮	京	小
子	花	歩	花	代	々	み	枝	水	え	子	女	弥	風	人	草	子	つ	満	子	生

野菜作る故郷に長寿の父母がいる

寅さんと会った屋台のコップ酒

終電を待っててくれる屋台の灯

安売りの赤い覗く妻を待ち

火を抱いて一本槍に宿る夢

無農薬 虫に野菜の味見され

川風の屋台でざんげ聞いている

子宝五人揃った鍋の温かさ

恋ごころ槍が降っても会いにゆく

高い品はめつつさがす安い品

姑から嫁を宝と賞める今日

給料の安い順からよう動き

人間の匂いぶんぶんする屋台

槍投げへビデオカメラが追う着地

出来悪い宝に家も土地も売り

ステーキの野菜薬として食べる

化粧した野菜は買わぬ市場籠

屋台から小さなお店持つつもり

健康が宝取り柄のない私

宝船追っかけ冬の日が暮れる

童話から夢の宝庫を開けてやり

鈴重ね友が宝となっていく

安売りの鯛はさびしそうな目で

槍玉にあげられてから顔が売れ

ママの腕野菜が好きになりました

常連にエリートも居る屋台酒

焼芋屋迷うる間に遠ざかり

好きやから屋台の後ろ押している

安ければ安いで不信抱いている

給食の大根めしを嬉しがり

寿恵子

新造

てるよ

与呂志

小鹿

れい

作二郎

金三郎

素灯

信博

真柳

天笑

射月芳

芳水

一三

東雲

正坊

道女

泰子

森子

かりん

みより

慧梢

半銭

頂留子

豊子

小雪

楓

春香

紀美女

また野菜が元気な夫にボヤかれる

夫にはバーゲンやったと言っておく

安い物たんと抱えて母帰る

川柳大阪

今年こそいい年願う初詣で

菊一輪乗り合いバスの和やかさ

鈍行もたまに楽しい旅となり

茶番劇イライラ国民するばかり

老舗でも三代続けば駐車場

不凍液入れていますかフルムーン

楽々と行く坂道は下り坂

楽ばかりしているのだから肥満体

倦怠期知っているのか夫婦箸

引き受けてから気がついた裏の裏

曲球も受けてくれます妻がいる

勳章を受けると急にかしこまり

受け皿のない浪人で身がほそり

吉報を受けるテレフォン持ち直す

古傷を見つめるあれば他人だろ

チャネルに合わせてママのスケジュール

石沈む波紋の先は知らぬまま

いつか楽でくるつもり玉の汗

しみかを分けて夫婦の膳がある

鉛筆を鼻にはさんでにらめっこ

腹切りを引受けるのも秘書の役

青春を書く鉛筆の芯は黒

鉛筆を削る不正を暴くため

人情にもろくて弱い4Bで

川柳ねやがわ

骨折で針金入れた足あわれ

眉水

五月

子

志報

三千雄

喜楽

淳水

亮太

敏

一步

天平

柳弘

本蔭

笑風

美津留

醉舟

喜醉

希久志

雅集

しげ

重人

与呂志

行伸

鉄心

洛醉

金太

比呂志

博泉報

喜代公

千鶴子

リクルート針の庭に座る人
 ボタン付けだけの針なら僕だって
 不愛想なナースで痛い注射針
 街角の屋台で今日の悔い捨てる
 えらい株買つてしまった秘書の顔
 裏がえす座布団の穴もつと大
 路地裏の夜道女は身構える
 一針に愛を編みこむクリスマス
 あの夢の半分でよい当りくじ
 空を翔ぶ夢かも知れぬ子の寝相
 不揃いの針目で明日も雑巾縫う
 裏町のピエロが抱いている野心
 針供養ミシンの針しか知らぬ子等
 裏町の人情の中で子は育ち
 寂しさを好きなお針でまぎらわせ
 針金の痛さに耐えて鉢の松
 針仕事亡母の面影灯にゆらく
 裏鬼門氣にする姑で嫌われる
 裏話猫がコソソリ聞いている
 その先はどうなったやら惜しい夢
 約束を一つ残して除夜の鐘
 独身できれいに生きた木綿針
 針箱に何でも入れる祖母のくせ
 整形の悔いを目鼻は知っている
 裏日本 雪は斜めに降りしきる
 採血を終った針の寒さみる
 内証話 針の穴から漏れてゆく
 年輪が裏の手ざわり知っている
 針の穴通って噂縫うてゆき
 静脈に苦情言うてる注射針
 単身の針が器用な釦付け

頓 坊 一 進 曲 手 創 吾 鉦 平 百 合 子 克 子 佐 和 子 時 子 雅 文 節 子 咆 煌 勇 太 時 弘 藍 子 さ か え 増 造 な つ め 三 峰 権 太 路 子 美 智 子 と し 一 鬼 君 子 春 子 波 留 吉 お さ む 一 芳 ま さ お 章

裏切った女を憶うクリスマス
 三世代夢を持ちよる屠蘇の席
 妻の口縫いたい針が見あたらず
 冬眠の蛇を起してからの悔い
 針箱の秘密のぞくと針が刺す
 悔い残る涙なかなか乾かない
 雑巾の針目眺めつ亡母徳ぶ
 大学の裏もきびしくなつたそな
 戦争展千人針が叫んでる
 聞きわけがよすぎ疑いたくもなる
 あれもこれも悔いることのみ花手桶
 悔いているピエロのような人生を
 裏方の苦労で舞台光つてる
 明日があるページへ女悔やまない
 仕立物おえて針の数かぞえ
 生真面目な男で裏が読み切れず
 負け犬の悔いはばやきになつてくる
 晴れ着縫う母の指先から春に
 人のうしろばつかり雑魚はみて暮らす
 針供養 豆腐に何の罪がある
 表から帰れぬ事情があるのです
 炎えつきて悔いなく落葉風に舞う
 真つすぐな男に裏道など知らず
 定年に悔い一つないかたつむり
 放り出した子に裏木戸は開けておく
 手を見つめ八十路の過去の裏表
 姑だけに聞えるお針箱の愚痴
 路地裏で余生を花と生きている
 わかあゆ川柳会 松本はるみ報

あやめ 光子 速水 かつみ シマ子 一途 冬葉 冬葉 頂留子 良三 三郎 博泉 英壬子 亜也子 庸佑 度 三千子 吉之助 あいき 磔 女 亜鈍 小路 敬山 麗水 柳宏子 紫香 恵美子 蔵栄

ふあうすと川柳社

創立60周年記念川柳大会

とき 4月29日(祝)午前10時

ところ 神戸市立勤労会館

(JR三宮駅前・神戸新聞会館東)

兼題

「誇る」 安藤まさ代選

「道」 佐藤一粒選

「澄む」 黒沢かし選

「姿」 山本 柳化選

「燃える」 藤代 院潮選

「声」 平田のぼる選

「実る」 小松原爽介選

「進む」 西尾 栞選

「若い」 磯野いさむ選

「階段」 藤本静港子謝選

事前投句

各2句詠

(事前投句を含め欠席投句拝辞)

会費 二、〇〇〇円(記念品呈)

事前投句締切 3月31日(ハガキも可)

投句先 〒663 神戸市長田区平和台町

3丁目5-1

藤本 静港子 方

藤本 静港子 方

藤本 静港子 方

藤本 静港子 方

はなやかな役者にあつた舞台裏
役目なら涙流したりなどはせぬ
お人よし損な役目を負わされる
大役を果した後の虚脱感
もつと捨ててしまつた下心
病む友を見舞つてかえる春の雨
枯枝へ春がしきりに呼びかける
歩いて歩いて足はあくまで労働者
音もなく地球を削る霜柱
下心虫とり草の餌にされ

むらくも新春句会 藤井

玄閑に入れば旧家の艶に会い
寿の一筆に満つ初硯
カルタ取り手と手重ねて初笑い
初孫を寿ぐ難きま春を呼ぶ
お喋りに時を忘れるいい仲間
黒髪の艶 幸せな母ゆすり
めでたさは二つ寿ぐ花を生け
健やかに揃い寿ぐ老夫婦
囲まれて齢い寿ぐ三つ重ね
すこやかな米寿の母の初笑い
新米の艶ふる里のうまい味
お年玉もらい左様なら初笑い
み仏に感謝 朝夕お経よむ
新年句会ならぶ元氣な顔の艶
仲のよい親を見ている子供の目
健康な余生を語る顔の艶
孫の声おしやべり電話初笑い
寿ぐは年の始めの祝いごと
初笑いみんな踊つて新年会
還暦へ心の艶を追つてゆく

かつ子 鈴江 聖子 世似 悦良 民人 天痴人 清泉 白汀 明朗報 峰雪 正朗 鶏生 芳子 秀子 文子 一葉 福子 ヤス子 林蔵 藤野 吉野 武衛 百代 竹乃 千里 久仁 島子 常子

初笑い天下の不満吹きとばす
あの手この手老いて盛んな顔の艶
白壁の艶を浮き出す年期ゴデ
平笑いと元号寿き歩みだす
初笑い顔のしわなつと気にならず
里帰りぬくいこたつに迎えられ
新成人夢いっぱい意見のべ
夢大きく抱いて翔く二十歳
雀百まで老いには老いの夢がある
感謝する背中の灸が利いてくる
米寿 喜寿 還暦艶のある笑顔
南海川柳会 飯田
のばりつつ降る算段整える
味方から出た告げ口に血がのぼる
子のぼる梯子は支えぬことにする
平成元年南海句会も改まり
始まつてみて実力を思い知り
漬物も魚も乗せて出る始発
ぎよめいきよじかくていくは始まりぬ
髪飾り敵も味方も新春になる
選挙カー飾る言葉にだまされる
玄閑に花一輪のある暮し
飾り皿乾いた風にあうばかり
明日からの心を飾る本を選ぶ
期待して食べに來たのに休みです
休み過ぎ尻の重さが倍になり
休むこと知らぬ私は日本人
電車ちんだけふところにして帰る
お帰りはこちらと中座追い出され
少年兵散つて十字架だけ帰る
川柳はびきの 塩満

翠星 巡歩 竹雪 カツ子 富子 昌子 三津江 幸子 梅園 義良 明朗 悦朗報 庸佑 恒明 悦郎 勝美 重人 志げ子 律子 柳伸 喜風 真砂子 凡子 湖風 花村 東雲 柳宏子 千乃子 甘平 元紀 敏報

元旦は賀状で友の声を見る
口数の少ない女と寒椿
固い土小さな春が覗いてる
ラッキーマン貝は美人のネックレス
定年の今更世辞は言うでない
覗いてる方も背後で覗かれる
元旦に何も言うまい床柱
警察も元旦だけはのどかなり
神様のこころ覗いてみたくなる
寿の箸紙匂う三ヶ日
元旦に家族が揃う祝い箸
和菓子のなかから元旦やつてくる
初詣で無事に参れることのぞみ
新年の景気ききたい寒椿
沖繩の空の青さに血の匂い
銀行のエトのハンコで済む賀状
街の子が毬に手古摺る栗拾い
鉛筆の芯でとおした父でした
この先がまだありそうな人と会おう
配達も元旦号は重からう
覗くから猫外に出す若夫婦
元旦を富士に迎える夢ばかり
共稼ぎ電話に留守番させてます

西日本文字放送作品募集
題「ホテル」 橘高薫風選

3句 締切3月15日
ハガキに明記の上、左記へご投句下さい
〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

健三 忠宏 ダン吉 志洋 たけし 希代司 葉子 昭子 美代子 利秋 悦子 一枝 キミ子 ケイ子 蛙隆 昇 美津留 吐来 眉水 白水 敏

柳界展望

集録一版・武庫坊

宿題1部（2句4者共選）

寺尾 俊平 岡山
塩見 一釜 札幌
長沢としを 小樽

宿題2部（2句2者共選）

齊藤 大雄 札幌

責める 高杉 鬼遊 八尾

任せる 桑野 晶子 札幌

吉田 州花 青森

錦 俊坊 旭川

感じる 野沢 省悟 青森

藤谷怠民愚 江別

投句Ⅱ宿題1部について

は、作品2句に住所・氏

名・雅号を明記、投句料

一〇〇〇円を添え、3月

15日までに、江別市文京

台46-16・藤谷方 川柳

大会事務局へ。

★しなの川柳社は「川柳し

なの」1月号を550号特

集として発行。

★川柳宮城野社は5月号で

500号となるのを記念、

全国誌上川柳大会を行う。

★NHK学園川柳九州大会

4月23日・湯布院町で開催

宿題（事前投句・2句）は

「大きい」「湯」「続く」

★第2回NHK学園全国川

柳大会の秀作入選同人名に

田村新造氏を追加します。

▽同人消息△

■昨年12月1日、和歌山放

送ミュージック・ステーション

で行われた「智水庵先

生映画を語る」の内容が、

三幸川柳教室発行の「川柳

七面」新年号に桜井千秀氏

（本社同人）の文責で掲載

されている。語る人は、菅

井智水庵（本社理事）、聞く

人は本木朱夏氏（同人）で、

映画の日になんて熱烈な

映画ファンとして知られる

智水庵氏が「駅馬車」「無法

松の一生」などの思い出を

縦横に語っている。

■川島颯云児氏（高槻市・

常任理事）は、姫路あしな

み川柳会の昭和63年度新天

守賞の特選を受賞。

回れ右した日もある定期券

■堀江正朗・芳子ご夫妻が

「川柳松江番傘」2月号に

「戦後の苦難を清く生き抜

く／あふれる夫婦愛」とし

て一頁組で紹介。

新同人紹介

山 田 妙子
楓葉・智子・薫風推薦

松 永 すすむ
薫風・鬼遊・登志実・清芳推薦

吉 田 あずき
薫風・登志実・清芳推薦

吉 田 明日香
薫風・登志実・清芳推薦

米 田 恭昌
薫風・鬼遊・登志実・清芳推薦

3 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	3日(金)午後1時から ふくらむ・辛抱・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料60円切手3枚
堺川柳会	5日(日)午後1時から 用意・よろこぶ・弱い・読む	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
八尾市民 川 柳 会	10日(金)午後6時から 蒔く・秘密・温度・肌	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 ま つ え	11日(土)午後1時半から 順番・虫けら・子供	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 わかやま	12日(日)午後1時から 支える・作戦・味	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口 川 柳 会	13日(月)午後1時から 音・森・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
高槻川柳 サークル 卯 の 花	15日(水) 正午から 実直・争う・デマ・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島風云児 句会費 500円 投句料 200円(郵券可) 各題2句
南 海 川 柳 会	17日(金)午後6時から 必要・枯野・危険・接続	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
南 大 阪 川 柳 会	19日(日)午後6時から 影響・欠陥・背負う・照る	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川 柳 ねやがわ	19日(日)午後1時から 花輪・客・体調・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川 柳 会	20日(月)午後1時から 品・申告・踏む・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根下車東南徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
富 柳 会	23日(木)午後1時から 似顔・女房・人相	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
川 柳 東 大 阪	25日(土)午後6時から 悲しい・十手・ベンチ・笛	東大阪市社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川 柳 会	27日(月)午後6時から 胸・突然・急用・受ける	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-33-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

●募 集●

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

課題 (5句)	吟 「公認」	題 「鳥」	西岡洛醉選	玉置重人選	辻白溪子選	小出智子選	高薫風選	黒川紫香選	西尾葉選	川柳塔(10句)
------------	-----------	----------	-------	-------	-------	-------	------	-------	------	----------

五月号発表 (3月15日締切)

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友に限らず、どなたでも投句できます。

課題 (5句)	吟 「ホテル」	題 「近い」	岩本雀踊子選	両川洋々選	山川克子選	小出智子選	高薫風選	黒川紫香選	西尾葉選	川柳塔(10句)
------------	------------	-----------	--------	-------	-------	-------	------	-------	------	----------

六月号発表 (4月15日締切)

本社3月句会

日時 三月七日(火) 午後六時
会場 メンズファッションセンター3階
東区内本町1-1 電話 06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし
兼題 「古い」
「敵」
「譲る」
「ゆつくり」
西田柳宏子選
西尾葉選
江口楓選
河内天笑選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

4月の兼題 「出費」「出会い」
「流れる」「猫」

4月の本社句会は7日(金)

3月の常任理事会は1日(水)

定価 五百円(送料50円)
半半分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)
一九八九年二月二十五日印刷
一九八九年三月一日発行

編集兼 西尾 厳
発行人 藤原 童心社
印刷所 藤原 童心社
大阪市阿倍野区三好町二丁目一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社
電話 〇六九一六九一四番
振替口座大阪 81-33368番

『夜市川柳』募集

第10回 「字」 中尾藻介選
3句・締切 3月末日
第11回 「手」 土居耕花選
締切 4月末日
投句先 〒593 堺市堀上緑町2-9-2
河内天笑方
堺川柳会

編集後記

☆平成と年号が変わっても私たちの暮らしのリズムは変わらない。新年会も新年おめでとう会とさして変わることなく、遠来の参加者も多かった。東野大八・波多野五楽庵陶氏・中尾澤介さんに、特に感謝の意を表します。

☆「昭和と私」の同人特集を組んだ。これは、五百人の同人一人余さず書いて頂きたかったものである。激動の昭和は、明治維新と同じに時代を画した時期で、赤と黒が豁然と開けた一日があった。赤に重きを置くか、黒に思いを尽くすか、人さままでであろう。

☆竹内紫緒氏の「言いまわしの個性」が終る。言語にしても目まぐるしく集計分析を行う時代、これからの川柳を示唆する所も多いが作品は作者の「こころ」であることに変わりはない。

☆今年になって、高橋操子さんと今治の長野文庫氏の計報に接した。それぞれの地で川柳界の要の役割りを

担い、長年活躍されていたお二人だけに、まだまだ生き続けて頂きたかった。心から哀悼申し上げる。栗主幹の弔辞と内容重複する任意に寄せられた追悼文は、二三割愛させて頂いた。

☆旧臘、過去のスクラップを整理する機会があり、昭和50年1月15日発会して、毎月句会を持ち、15回で終った「橋」の足跡を顧る中とが出来た。時実新子・中尾澤介・定金冬二・森中恵美子・室田千尋・田中好啓・墨作二郎・伊東静夢・窪田久美子・寺尾俊平・岩井三窓・堀豊次・海士天樹・前田美巳代の講師を迎えた。先輩たちの講話は、皆すばらしい主旨で、当時の川柳塔の若手は大いに啓発され、斬新な作品を生んでいく。☆若い時代には、少し気障と思える行動も、それなり

うだが、川柳塔の若手で進力になる人が出てほしいものと思う。

（薫）

ある日、テレビでタレントが、われわれ芸人に人格を求めるのは、現代の政治家、先生方が、あまりにもだらしがないから、その破よせだと思える。常識があれば、まっとうな職にも就いたが、落ちこぼれ、はみ出し者だからと、たいそう卑下されていた。

▼河原乞食といわれた昔はいざ知らず、人間平等の現世で誰が芸能人を、別格に見ることができたらどうか。どんな職業の方であっても立派な人もあれば、くだらない人もいる。職業でよしあしの判断はできない。

▼しかし何と、だらしがない政治家や高官の多いことが国民の一人として慙愧に堪えない。わたし一人が莫迦な方々の身代りになることもないが、胸を痛めるどころか肚が立つて仕方がない例えは、リクルート関連株のことなど、法に触れていないとシラを切る厚顔無恥

なお方を、内閣にもつ国民をたいへん不幸だと思う。

▼人間最底の線が法で定められていて、これを犯すと要婆におれなくなる。そんな最底の線を犯してない、我慢できることではない。人間には、法の上に常識があり、その上に良識があり、その上に道徳がある。この信仰は、神仏信心に根付たことでなく、人の道の至高だと思う。高僧になつてくれとは望みもしないがせめて恥をしろ良識ぐらいはもって欲しい。（き）

☆「文房四宝」ということばがある。むかしから書斎でつかう道具、つまり筆、墨、硯と紙である。中国、日本の文人たちは、この四宝で詩をつくり、文をつづった。それでは、現代に生きる文人の文房四宝とは、なんだろうか。

☆鉛筆、ペン、ボールペン、ノート、原稿用紙などがすぐ頭にうかぶ。ワープロ、コピー、ファックス、パソコンが現代の文房四宝

だという人もいる。いたって好奇心がつよく、あたらしいものにすぐとびつく私だが、残念ながらそこまで飛躍できない。

☆こんなことをかきはじめたのは、ほかでもない。今から二〇年前に『知的生産の技術』を刊行した国立民族学博物館長の梅俣忠夫編『私の知的生産の技術』を最近、よんだからである。この「知的生産」というのは同氏の造語である。

☆くわしいことは、この二冊の本をよんでいただくのが早道だが、つまるところ知的生産の技術とは、情報のつくりかた、処理のしかた、よみかた、かきかたではなからうか。そして、そのための道具をあえて四つにしめるならば、私はカメラ、テープレコーダ、ワープロ、コピーをあげたい。

☆中途半端なところで紙数がつきそうだが、私は川柳もまた、知的生産の一ジャンルだとかんがえている。鉛筆と紙さえあればという発想はもうふるい。正

KIRIN

21世紀へ乾杯

本格派。

旨さの辛口。

アルコール度数高め
 キリッとしまるドライ

キリンビール株式会社

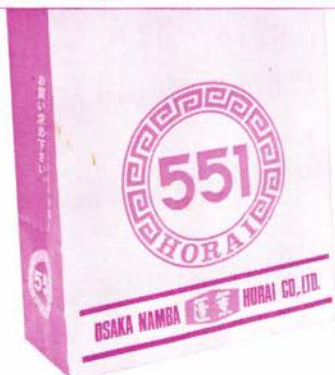
キリンドライ

標準的な小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。



ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
 その他有名百貨店でどうぞ